
魔法少女リリカルなのはStrikerS ～拳王アクセル～

アグカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ～拳王アクセル～

【Nコード】

N9315V

【作者名】

アグカ

【あらすじ】

第一次ベル力戦乱期……己の拳のみでベル力を統一した王がいた。その名は『拳王アクセル』……。数々の武勇伝を残しながらも、忽然と消えた謎多き王……。その子孫が今覚醒を果たす。

プロローグ：目覚め（前書き）

8 / 19
一部修正

8 / 24
文章の行間を少し調整

9 / 2
加筆修正

冒頭部分に加筆修正

9 / 6

擬音排除

プロローグ：目覚め

俺の名前は、アクセル・ターナー。

ミッドチルダ在住の格闘が大好きな十二歳の漢の子だ！

俺の住むミッドチルダは、『時空管理局』という多くの次元世界を管理する大きな警察のような組織の発祥地だ。

管理局では『魔法』というクリーンかつ安全なエネルギーを使う『魔導師』という存在が戦力の中核を担っている。

だが、この魔法を使う為に必要な能力は生まれ持った能力に依存する為、常日頃から戦力不足に悩まされているらしい。

その為、戦力確保の一環としてミッドチルダでは、義務として三歳児の時点で魔力適性検査を受ける。

勿論その時点で魔力値の高さが認められたからといって、強制的に管理局へ入局する訳では無い。

だが、ほとんどの場合、管理局へ入局するんだそうだ……給料や待遇がいらいしいから。

俺も例に漏れず魔力適性検査を受けたのだが、一応魔力適正はあるもののその数値がかなり低く、下から数えた方が早いって位なので、正直な話、管理局への入局したとしても戦力にはならないし出世もかなり厳しいと両親から聞いている。

もし魔力が低い人間が管理局で出世しようとするなら、血の滲むような努力やら大きなコネやら何やらが必要なんだって。

俺は小さい頃から趣味で格闘やってて魔力無しの試合だと結構勝ってるんだけど、魔法使われるともうその時点で負けが決定する。

身体強化やプロテクションなんて使われたら、腕力だけじゃどうしようもないからさ。

だもんで、幾等格闘技や剣術とかやってたとしても、魔法がロクに使えないと話にならないんだ。

最低限Cランク位は無いと、戦力にはなれないんだよね。

んで、更に両親から聞いた話によれば、このミッドチルダにおいて魔力適正があると無いとでは、就ける仕事にも影響したりする。魔力適正があると、出来る仕事の幅が大きく広がるからだそうなんだ。

魔力が無くても管理局や聖王教会に入る事は出来るけど、やっぱり魔力がある方が色々と優遇されるし、普通の会社でも魔力があると遇される事があるだって。

まあ、表じゃそこまで露骨じゃないらしいけど、見えない所では魔力持ちと魔力無しでは色々の違いがあったりする。

これも両親からの話だけど管理局を中心としている世界だから、魔法至上主義が蔓延しているのが原因じゃないかって話だよ。いやだよねえ……夢が潰れる感じた……。

俺の両親も仕事はこなせるらしいんだけど、魔力適正が低い為に思うように出世が出来ずにいたらしいんだ。

おかげで若い頃は結構苦労したんだってさ。

でも、今現在は地上本部のレジアス・ゲイズ中將により、そういった魔導師優遇みたいな風潮も徐々にだが緩和されつつあるんだと。両親も今はそれなりに出世出来て、金持ちと貧乏人の中間位の生活を営んでいるが……これ以上を望むのは、分不相応ってもんだ

ろうなあって言ってた。

しかし、こういう話を聞く度に思うけど、ほんと、レジアス中将って凄い人だ。

俺も将来はあんな漢になりたいもんだぜ。

んで、そんな俺だが現在両親と共に聖王教会の本部の聖遺物博物館に来ている。

久しぶりに両親も休みが取れたので、家族揃っての小旅行の最中だ。

今まで聖王教会には来た事が無かったので、多少なりとも興味がある。

まあ、俺は別に聖王を崇めている訳では無いし、宗教そのものにも興味は無い。

ただ、拳のみで戦乱を切り抜け果ては王となった、『拳王アクセス』に関しては格闘を志す者として非常に興味がある。

何せ、戦乱時代の事は伝わっているが、それ以前や戦乱後の事については謎の多い人物だから。

まあ、俺としては拳のみで一時代を築いたという、何とも漢気溢れるところに惹かれているが。

何時か俺もそんな拳士になってみたいと思う。

さて、それでは拳王の展示室に行ってみるとしよう。

確か、拳王が使ったとされるデバイスや関連書物なんかが展示されているはず。

《展示室》

ここが展示室か。

結構色々な物があるんだな。

蔵書やらなんやら、結構遺物が残ってるもんだ。

お、あれは、拳王の来歴か、ちよつと見てみるかな。

【来歴確認中……】

うーん、戦乱期の事は結構色々書いてあるけど、生没年や戦乱終結後の事はほとんど残ってないのか。

ベルカ時代の王達って、結構謎が多い人がいるみたいだけど、拳王はそれに輪を掛けて謎が多い。

何だかあれだなあ、テレビや漫画であるような孤高のヒーロー的な感じだ。

やっぱり、格闘を志す者としては憧れる。

じゃあ次はつと……デバイスの展示所に行ってみるか。

まあ、俺はデバイスを扱えないから余り意味は無いけど、一応見ておきたいし。

《デバイス展示所》

ここが展示所か……何だか他の部屋とは造りが違う感じた。
あれかな、やっぱり拳王が遺した遺物の中でも最重要な物だから、
展示にも気を使っているのか？

とと、あんまりのんびりしていると、父さんと母さん待たせちゃう。
え〜と説明書きは……お、あったあった。

【説明書き確認中……】

へ〜拳王のデバイスって位だからどんなド派手かと思ったら、結
構単純なデバイスなんだ。

アームドデバイスだと、使う魔法に応じて変形したりするらしい
けど、このデバイス<ソウルゲイン>はガントレット形態のみか。

でも、変形機構が無い分、頑強さは既存のデバイスでは及びも付
かない程頑丈なのか。

まあ、そりゃそうだよなあ、拳だけで戦乱を治めたような人物が
使っていたデバイスだしそれなりに凄いんだろう。

とはいえ作製時期や作成者は不明か……。
デバイスも今の技術じゃ解析出来ないみたいだし、やっぱり拳王
って謎が多い。

もう一つのデバイスである、<ラミア>はユニゾンデバイスか……
…これって今じゃかなり貴重なのか。

そういや、ユニゾンデバイスなんてあまり聞いた事ないもんなあ。

単体でも空戦SSS+相当の能力を保持していたらしいって……

どんだけ強いんだろう。

このデバイスだけでも、下手な軍勢より強いんじゃないだろうか。

しかし、両方のデバイス共に化石化してるのか……。
普通デバイスが化石化するなんてあり得ないよなあ。

この辺も含めて、本当に謎だらけだなあ拳王ってのは。
一体全体何者なんだろう。

「アクセル、そろそろ行くわよ」

「あいよ」

さて、そろそろ戻るとするか。

明日はヴァイゼンに行くんだし、早めに準備しないと。

「ガッツ」

「あいてっ！」

あいたたた、角にぶつけて皮がむけちまった。

やべ、血が出てる……。展示物に掛かってないかな。

て、やべ、デバイスに引っ掛かってるじゃねえか！

な、何か拭くもの無いか？！

つか、そもそも何でケースが開いてるんだよ！

普通こつというのは、嚴重にケースをロックしとくもんじゃないのか？！

て、愚痴ってる場合じゃねえや。

さっさと拭いてとんずらしないと！

そう思った瞬間、何か妙な音がした。

き、気のせいか……なんだか、モニタが作動するときのような音だったけど……嫌だな、さっさとこの場を離れた方がよさそうだ。

「な、何だ、今の音？！ やだな、マジでさっさと逃げよう！」

部屋を離れようとした瞬間、辺りに放電が起きた！
しかも、なんか地鳴りみたいな音まで鳴ってる！

な、何で部屋の中なのに雷と地鳴りが起きてるのさ！
どうなってんのさ！

「……い、一体何だってんだよ！ て、うわっ？！」

こ、今度は一体なんだよ！
さっきよりも放電が酷くなってるじゃないか！

『拳王アクセルの遺伝子データ確認……照合開始……完了』
『拳王アクセルの存在を確認』

うえ？！

何だ、この声？！

そ、それに、拳王アクセルって……。
どついう事だ、訳わかんねえよ？！

「何事だ！」

「うえ、守衛か？！」

うひゝこの訳の分からん状況で厄介なのが来ちまった。
どうやって説明すりゃいいんだ！

「その君、一体何が起きている」

「わかんないっすよ、見学中に突然こうなっちまって！」

『システム解放……』

『各部魔力伝達開始……』

も、もしかしてこの声って、あそこで化石化しているデバイスが
らか？！

嘘だろ……だって誰が何をしても起動しなかったはずじゃ？！

『封印モード解除実行
Affange
起動』

う、うそゝん……拳王のデバイスの石化が……解けちゃったじゃ
ないか！

何々、一体全体どう言う事なのさ！

「け、拳王様のデバイスが！」

「そんな、今までどうやっても起動しなかったのに！」

守衛の人達も動揺してる……。

こりゃこのまま関わり続けると碌な事にならないぞ。

早めにとんずらした方が懸命だろう……。でも、今のこの状況でどうやって逃げ出せば……。

て、あのユニゾンデバイス……何かさっきからずっと俺の方見てないか？

や、ヤバイ……この状況は絶対にヤバイ！

何だかわかんないけど、俺の勘がそう告げてる！

は、早く逃げ出さないと！

「お初にお目に掛かります……」一代目拳王様

$$\begin{matrix} \neg \\ \vdots \\ \wedge \\ ? \\ \perp \end{matrix}$$
[illegible]

ブローグ・話し合い（前書き）

9 / 2

加筆修正

9 / 4

加筆修正

プロローグ：話し合い

今俺は両親と共に、聖王教会の騎士であるカリム・グラシアの執務室に呼ばれている。

あの拳王のデバイス覚醒と、俺自身の事について調査する為らしい。

何せあの後大混乱だったからなあ……。

今まで誰が何をして目覚める事が無かったデバイスが突如として目覚めたもんだから、教会騎士の人達とかが出張ってきてそりゃもう、ひっちゃかめっちゃかだ。

そんな中でも、あのデバイス二機が俺の事を二代目拳王と呼ぶのだから、さあ大変。

もう、教会騎士の人達やその他諸々の皆さんが、大慌て。

速攻で俺を取り囲み、あれよあれよという間に両親共々拉致られた。

んで、そのままの勢いでこの部屋に連れて来られて、今に至る訳。

正直な所、調査と言われても、俺にも何が何だかわからないんだけど……。

突然二代目拳王様とか呼ばれたんだもん……。

ぶっちゃけ、俺と聖王教会やベルカ方面には一切の接点が無い。実家だって極々普通の一般家庭だし、そもそも俺の魔力量や魔力適正值は物凄く低いんだ。

そんな俺がベルカの王族の血族だなんて……どう考えてもありえ

ないっしょ。

だもんで、調査とか言われてもなあ……。

「調査を始める前に自己紹介をさせて頂きます。私はカリム・グラシア、聖王教会の騎士を務めております。」

「えと、アクセル・ターナーです」

うへへ凄いい美人さんだなあ。

いいなあ、こんな美人さんが姉とかだったら滅茶苦茶嬉しい。

んだけど、どうしてだろう、何故かこの人に対して引かかる感じがする。

何かこう、胸のあたりがザワつくというか何と言うか……表現し辛いけど何かが引つかかる。

何でなんだろう？

わっかんねえなあ……。

「ご家族でのご旅行中に申し訳ございませんが、事が事ではありますので、どうかご協力をお願いいたします」

「わかりました、けど、調査といわれても正直俺にも何が何だかわからない事が多いんですけど」

「それでも構いません、わかる範囲で結構です」

「それじゃ」

今日は家族旅行中にたまたま聖王教会に立ち寄った事、格闘をやっているので拳王に興味があり展示物の見学をしていた事を説明。

見学を終えて戻ろうとした時、机に腕をぶつけて怪我をしてしまい、その時に誤ってデバイスに俺の血液が付着してしまった事も説明。

その直後にデバイスから声が聞こえ、デバイスが覚醒したと説明した。

ぶっちゃけ、これしかわかんないんだよねえ。

「とまあ、これがあの時の状況の全てです」

「そう、ですか……」

「すみません、俺の不注意でこんな事になってしまつて」

「いえ、悪気があつた訳では無いでしょうから」

そうは言つて貰えると俺としても気が休まる。

もうね、何言われるかほんと、戦々恐々だったよ。

でも、これじゃ結局の所何も判つて無いに等しいからなあ……いつそデバイス自身に聞いてた方がいいか。

その方が色々と正確な情報を得られるだろうし。

うっし、そうしてみよう。

しかし、石像になつたユニゾンデバイスは後ろにいるけど、もう一つのアームデバイスって……何処にいるんだろ？

そのあたりについても聞いてみようかなあ。

聞いておかないと不味いよなあ、今後の為にも。

「えーと、ラミアでいいんだよね？」

『はい、拳王様』

「……えとさ、君らが覚醒した経緯というか理由を説明して欲しいんだけど」

『畏まりました』

そうしてラミアが語り始めた。

自分とソウルゲインを封印したのは、初代拳王アクセルである事。

そして、封印を解く条件は初代拳王アクセル自身が解くか、または、初代拳王アクセルの遺伝子データを確認する事によりロックが解除される事。

これは、後世の子孫の為に自らのデバイスや知識等を残す為であり、そして何より拳王としての力が他者に利用されないようにする為の措置なんだそう。

んで、今回偶然にも俺の血液が付着した事で、血液の中から初代拳王アクセルの遺伝子データを確認した為、ロックが解除され覚醒したのだと言う。

以上の事から、俺は間違いなく初代拳王アクセルの血を受け継いでいる事になるようだ。

ラミアの話聞き、両親含めカリムさんも啞然としている。

そりゃそうだよなあ、既に滅んでしまったベルカという世界の王族が現代に蘇ったようなもんだから。

特にカリムさんは複雑だろう。

何せ伝わっている話では、第一次ベルカ戦乱期に聖王家は初代拳王アクセルにボコボコにされたらしいし。

自分が神と崇めている存在を超えた存在の子孫が目の前にいるんだもんなあ……そりゃ複雑だろう。

父さんと母さんも、自分の息子がそんな大それた存在になるなんて思いもしないだろうし。

てか、俺自身が一番驚いているんだが……自分が拳王の血を受け

継いでいるなんて。

何処の漫画の世界だよって感じだわ。

「そうなるよ、ご両親の内どちらかは拳王様の血筋という事になりますね」

「ああ、そっぴやそっぴすよねえ」

となると、父さんか母さんのどちらかもベルカの王族って事になるだろう。

何せ俺の両親な訳だし。

でも、これって結構ヤバイんじゃないか？

現代に蘇った王族なんて、洒落にならない気がすんだけど。

「……いや、私達はどちらもベルカの王族の血は受け継いではいないよ」

「へ、何で？」

「……これはお前には話していなかったが……アクセル、お前は私達夫婦の本当の子じゃないんだよ」

「……はい？」

父さんから語られたのは、俺が父さんと母さんの子では無く、拾われっ子であるという驚愕の事実！

つか、何もこんな時にそんな大事な事言わなくてもいいだろうに。

状況的には、俺が赤ん坊の頃に自宅の前に捨てられていたんだって……何処のドラマですかそりゃ……んで、不憫に思った両親が自分達に子供が出来ない事もありそのまま拾ったんだそうだ。

以来、俺を自分達の息子として育てたらしい。

……まあ、別にその事を黙っていた件について、父さん達に恨み言を言うつもりは一切無い。

そもそも俺の父さんと母さんは、今の父さんと母さんだけだし。

本来の親がいたとしても、覚えてもいないから別にどうでもいい。俺は今の父さんと母さんが好きだし、今の生活に満足もしてる。

まあ、後で少しわがママを聞いて貰おうとは思っけど。たまにはいいでしょ。

「すまない、こんな大事な事を黙っていて」

「別に気にしてないって。大体本来の親がいるなんて言われても実感湧かないもん。」

「そうか……」

「でも、アクセルは間違い無く私達の子だから」

「あんがと、母さん」

何だかんだで、父さんも母さんも俺の事を何時も気遣ってくれてる。

その事に感謝こそすれ、恨む筋合いなんてある訳が無い。

しかし、そうなると現在の所、初代拳王アクセルの血を受け継ぐのは俺だけって事になるのか。

うーん、これってやっぱり面倒臭い事になるんじゃないか？

聖王教会からすれば、多分俺の事を放っておくなんて出来ないだろうし……困ったなあ。

どうしたもんか。

「しかし、こうなりますと、聖王教会としては貴方を見過ごす事は

出来ません」

「……あの、息子はどうなるのでしょうか？」

「聖王教会としては、ベルカに関わる重要人物であり、また、所有するデバイスの情報も歴史的に見ても非常に重要、かつ、危険であると判断し……教会騎士として聖王教会に所属して頂きたいと考えております」

ああ、やっぱりそういう事になるのか。

うーん、俺としては今此処で将来を決めるつもりは無いし、そもそも教会騎士なんかに興味は無い。

それにだ、そもそも俺が初代拳王アクセルの血筋であっても魔力値は低いんだ。

そんな奴が教会騎士なんて出来るはずも無い。

うっし、ここはしっかりと自分の考えを伝えておくべきだろう。

何せ俺自身の将来に関わる事だし。

「あの、申し訳ないですけど、俺自身はベルカの事なんて何も知らないし、そもそも俺は教会騎士に興味無いです。だから、俺自身は聖王教会に所属するつもりも、騎士になるつもりも一切無いです。」

「そうは申されますが、聖王教会としてはベルカ時代の重要な遺物である拳王様のデバイスを外に持ち出す事を許可する訳には参りません」

「そりゃそうでしょうけど……けどなあ、今この場で将来を決めるってのは……」

この場でいきなり将来を決めるのは無理がある。

今後に関わる事なんだし、ちゃんと時間を掛けてじっくりと選びたい。

じゃないと、後になって後悔するかもしれないし。
それは嫌だからなあ……。

それにだよ、拳王自体は聖王家とは関わりが無いんだし、別に所属する必要無くな？

初代拳王アクセルは確かにベル力を生きた人かもしれないけど、俺には関わり無いし。

つか、最大の問題として俺は魔力値が低いから、例えば騎士になっても役に立たないと思うんだよなあ。

格闘はそこそこ出来るけど、それだけじゃねえ……。

「そもそも拳王は聖王家とは関わりが無いじゃないですか。だとしたら、聖王を祭る聖王教会に所属する理由は無いでしょう。」

「仰る事はわかりますが、ベル力に関しては全て聖王教会が管理しておりますから」

「そりゃあんたらの都合だ、俺には関係ない。第一俺は魔力値はかなり低いんで、正直騎士になったとしても役に立たないと思うんですよ。」

『その心配は無いでしょう』

誰だろう、今の声。

ラミアの声じゃなかったし……あ、もしかして、もう一つのデバイスのソウルゲインか？

そっぴゃ、ラミアとは話したけどソウルゲインとは話していなかった。

一応挨拶しておくか。

「今の声ってソウルゲインか？」

『左様でございます、若き拳王様』

「えと……何処にいるんだ？」

『こちらです』

そういつてラミアが差し出して来たのは……リストバンド？

……ああ、これがソウルゲインの待機状態なのか。

てつきり宝石みたいな感じかと思ってたけど……何というかこれまた普通だ。

そこから売ってそんな感じのリストバンドだもん。

「へー待機状態はリストバンドなんだ」

『はい』

「武装形態後といい、ソウルゲインは結構シンプルなんだ」

『先代は派手な物はお好みではなかったようです』

「へーんでさ、魔力値が低い事が問題ないってどういう事？」

『ご説明いたしましょう』

ソウルゲインの説明によると、拳王の家系は元々皆魔力値は低いらしい。

しかし、拳王の家系に連なる者のリンカーコアは少し特殊で、鍛えれば鍛える程に魔力値の上限があがるんだと。

一般的な常識として、魔力値の上限というのは通常大きく変化する事は無い。

DランクからD＋ランク位までなら上がるけど、それ以上はどうやっても普通の方法では上がらないというのが一般的な常識だ。

だけど俺の場合は、今現在Dランクだけど鍛えればSSS＋すら

も凌駕出来るらしいんだよねえ。

それって、ある意味じゃありがたいが……何かややこしい事になりそうな気がする。

「まあ、鍛えれば強くなれるってのは拳士としては嬉しいけどさ」

『訓練法も私のメモリーの中に存在します』

「……ちなみにどんな訓練？」

『私の機能の一つである、＜シャドー＞を使い初代拳王アクセル様と組み手をして頂きます』

「……マジ？」

『はい』

……おいおいおい、初代拳王アクセルと戦えるって……どんだけだよ！

そりゃ俺も格闘を志している者として、拳王と試合が出来るなんて嬉しいけど……それって大丈夫なのか？

多少出来ると言っても、俺は本格的に誰かに師事している訳じゃない。
ある意味じゃ独学なんだ。

そんな俺が拳王なんかと遣り合える訳が無いと思うんだが。
ぶつちやけ、ぶつ殺されそうな気がするけど……。

『何も直ぐに先代と戦う訳ではありません。最初は基礎訓練等を積み地力を上げた後という事です。』

「まあ、そりゃそうだよな」

『＜シャドー＞により顕現するのは、あくまでも影ですので先代の人格を保有している訳ではございません。しかし、強さだけは本物です。』

「うひゝ益々凄そうだ」

『いかがいたしますか？』

勿論訓練なんかは受けるさ。

せつかくのチャンスだし。

でも、騎士になるかどうかってのはまた別問題だろう。

騎士になったら、色々と教会の規則やらなんやらで面倒臭そうだし。

それに俺は……ずっと陸士に憧れてたんだ。

あの時、俺が五歳の頃に事故による火災に巻き込まれた時、俺を身を挺して救ってくれた陸士の人の背中に……。

あの時の火災事故……辺り一面を赤い炎が包み、周りには既に息絶えた人もいた。

炎と煙が逆巻く地獄の中で、俺は一人、朦朧とした意識の中で死を覚悟した……。

だがその時、炎と煙を掻い潜り、俺を救いに来てくれた人がいた。頭から血を流しながらも、俺に笑いかけてくれた人……本当にあの時は安心したな。

その人は俺を背中に背負うと、自らのデバイスを掲げ炎の中を駆け抜けた。

何度も何度も『必ず守るから』と俺に言葉を掛けながら……。

だけど……そんな地獄の中で突如として辺りを包む大きな爆発音が響いたのを覚えている。

俺はほとんど意識を失いかけていたのでよく覚えていないが、何か得体の知れないモノが居たような気がする。

そして気が付いた時には、俺は病院のベッドの上だった。

……後で教えられたけど、俺を助けてくれたのは陸士108部隊の人らしく……その人は大怪我を負ってしまい、程なくして亡くなったそうだ。

事故の原因なんかは今でも謎らしく、詳細はわかっていない。しかも、助かったのは俺を含めて数名という……近年でも稀に見る大事故だったらしいんだ。

意識がほとんど無い状態だったから臃げではあるが、俺は今でも覚えてるよ……あの大きな背中とあの時の笑顔を……。

あれぞ正しく漢の背中であり、漢の顔だった。

あの事故以来俺も何時かあんな風な漢になりたいと思い、格闘を

やり始めたんだけど、魔力値が低くて管理局に入局してもお荷物になりそうだったから半ば諦めていた……。

だけど、諦めかけていた夢を叶えるチャンスが来たんだ、何があっても見逃す事は出来ない！

「それにどんな理由を差し置いても、俺はずっと陸士になりたかったんです。これは俺が小さい頃から抱いていて、諦めかけていた夢なんです。だから何と言われようと、騎士にはなりません。所属するなら地上本部に陸士として所属します。」

「……ではこうしてはいかがでしょう、騎士の称号を持ちながら地上本部に所属するというのは？」

「それって……レジアス中将辺りはあんまりいい顔しないんじゃないですか？」

レジアス中将の本局と聖王教会嫌いは有名だからなあ。

下手に騎士の称号なんて持ってたら、それこそハブられちまうかもしれない。

せつかく陸士になっても、ハブられるのは流石に嫌だし。

そう考えると騎士の称号なんて、ぶっちゃけ邪魔でしかないんだよなあ。

「ま、まあ、確かに否定は出来ませんね……」

「でしょう、だから俺は騎士の称号は要らないですよ。もうはっきり言えば俺のこれからに関して騎士という称号は邪魔以外の何者でもなんです。だから、貴方がどう言おうとも俺は騎士になるつもりも、教会に所属するつもりもありません。」

「……はあ、何を言っても無駄のようですね」

「ええ、俺の夢であり、憧れですから」

そうだ、陸士になるって夢と憧れだけは捨てられない。
せつかくこうしてチャンスが巡ってきたんだしさ。

そりゃ勿論、カリムさんの言い分もわかるけど、それはそっちの
勝手な言い分だし。

俺の人生は俺のもんだからね！

「しかし、拳王様のデバイスを持ち出すのは……」

『我らは拳王様以外には従わぬ』

『我らを装着出来るのは拳王様をおいて他に無し』

『我らは聖王家には従わぬ！！』

「だ、そうですよ」

「……はあ」

なんだか二人共嫌に聖王家に対して強く出るなあ。

初代と聖王家は、第一次ベル力戦乱期の時、滅茶苦茶争ったらしいからその辺が引つかかっているのかな？

それからも騎士になるかどうかについてカリムさんと話し合った
が、結局の所、俺本人に騎士になる意思が無いので、この話は平行
線を辿るだけで物別れに終わった。

何れまた機会を見て話し合おうという事に……話し合っても騎士
になるつもりないけど。

次いで俺が本当に初代拳王アクセルの血筋であるか確認の為、身体的な検査が入った。

というのも、ラミアとソウルゲインの証言だけでは信憑性が薄いという事らしい。

……調べた所でわかるのかなあと思っていたが、どうやら聖王教会では公開していない遺物もあるらしく、その中に唯一拳王のDNAが採取出来る遺物があつたらしい。

んで、そのDNAと俺の血液から採取したDNAを比べたところ……ほぼ完全に一致。

これが動かぬ証拠となり、俺が拳王の血筋である事が証明された。

検査に当たった人やカリムさんも、驚きと同時に頭を抱えていたけどね。

更に更にカリムさんが頭を抱える要因として、ラミアとソウルゲインの二人が俺以外には絶対に従わないと再度の強硬主張。

しかも、二人が何時の間にか俺の事を自分達の主として登録してしまつたらしい。

その登録機能の部分にはそれこそ物凄い頑丈なプロテクトが二重三重にも掛けられていて、その上中枢部はブラックボックス化されてるみたいで、正直、今の技術では手の出しようが無いらしい。

これでは登録解除も、二人を再封印する事も出来ないんだって。

結果として、俺が間違いなく初代拳王アクセルの血筋である事も証明されているので、聖王協会側も止む無くラミアとソウルゲインの所有を認めた……というか認めざるを得ない状況なんだってさ。

ほんと、一時はどうなる事かと思ったよ。

これで漸く晴れて俺達家族は自由の身となった。

まあ、どうやら聖王教会側は俺を取り込む事を諦めていないようだけどさ。

しっかしまあ、あれだねえ、まさか旅行の最中にこんな事になるとはなあ。

面倒に巻き込まれなければいいんだけど……ベルカ王族の末裔なんて世の中に知れたら確実に面倒事に巻き込まれるよなあ……うむむ、どうしたもんかなあ。

「しっかし、これからどうしようかなあ……今のままじゃ陸士訓練校に入るのも難しいだろうし」

『ならば、修行の旅に出てはいかがですか？』

「修行の旅ねえ……」

『先代もそうして力を付けられたようですから』

「へーそうなのかあ」

まあ、その辺は父さんと母さんとも要相談だろう。

俺一人で決めていい事じゃないだろうし。

しっかし、これから先の俺の人生今までみたいにはいかないだろうなあ。

何だかとんでもない事態に巻き込まれている気がする……一体この先どうなるんだろう。

第零話：旅立ち（前書き）

09/02 アクセルの初期魔力値をD - からDに変更

第零話：旅立ち

先日の拳王のデバイス覚醒事件から一週間が経過。

旅行は色々とあり過ぎて中止となり今は自宅に戻っている。

この一週間、ずっと考えていた事がある。

それはソウルゲインから提案された、修行の旅に出るかどうかについて。

正直、今の俺は魔力値で言えば最低ランク二歩手前のDランク、つまりは限りなく低いって事。

これじゃソウルゲインを使いこなす事は出来ない。

それに、ソウルゲインから聞いた話によると、どうやら初代拳王アクセルが使用した格闘技は現行のシューティングアーツやストライクアーツとは全くの別物らしい。

その名前が、ソウルアーツ魂流。

特徴としては、魔力を使うのは勿論だがその他にもう一つ、人間の体内に流れる生体エネルギーを使用するという事にある。

この生体エネルギーのコントロールには特殊なリンカーコアが必要になって来るらしく、それを持つのは初代拳王アクセルの血を引く者だけらしい。

しかも魔力を使うよりも遥かに体力的な消耗が激しいんだそうだし、まあ、当然と言えば当然だろう、何せ生体エネルギーな訳だし。

そして魂流ソウルアーツの最終的な到達点というのが、魔力と生体エネルギーを融合させ扱う事。

この融合させた状態のエネルギーを、初代拳王アクセルは魂ソウルと呼んでいた事から魂流ソウルアーツという名前になったんだそうだ。

んで、この魂ソウルがまた凄いのなんのって。

これもソウルゲインから聞いた話だが、Aランクの攻撃を魂ソウルを使つて放つた場合、魔力のみのSランク攻撃に匹敵するとか……。

どんだけ無茶苦茶なんだそりゃと、正直恐ろしくなった。

まあ、流石は初代拳王アクセルが使った格闘技だなあとも思っけど。

んでだ、これらを習得するとなると生半可な訓練じゃ無理らしい。ぶつちやけてしまえば、生死の境を常に彷徨う位の荒行が必要。

そんな荒行をするとなると、陸士訓練校なんかじゃはつきり言って無理がある。

となると、実戦で磨いていくしか無い訳で……詰まるところ管理外世界で無茶して来いと……。

しかし、俺って十二歳なんだけど、この年でそんな危険極まりない生活をしていいのだろうか……。

何か人として失くしてはいけないものを失くしてしまう気がする……。

でもまあ、将来の事を考えれば強くなるに越した事は無いだろう。俺がベルカ王族の血を引いているなんて、確実に知れ渡るだろうから自衛の為に強くなる必要性はある。

ともなれば、やっぱり魂流ソウルアーツを体得すべきなのは間違いない。しかし、父さんと母さんはどうかねえ……反対されそうな気がする

るけど……とりあえず話してみるか。

《自宅・居間》

と、言う訳で只今両親を説得中であります。
が、しかし、予想通りなかなか納得してくれない。

幾等ミッドの風潮として自立を推奨しているとはいえ、管理外界に行こうとしてるんだもんよ。

当然と言えば当然だろう。

まあ、頭ごなしに否定はして来ないだけマシだとは思うが……。
うーん、どうやって説得したもんか。

「なあ、父さん、母さん、頼むから行かせてくれよ」

「しかしだな……」

「幾等なんでも管理外世界に行くのは……親としては心配よ……」

「そりゃそうだろうけど、でもさ」

とまあ、こんな感じでさっきからずっと繰り返している……。

そりゃ心配してくれてるのは十二分に判るし、危険なのは百も承知。

ただどさ、やっぱり漢の子としては意地があんのよ。

せっかくのチャンスを棒に振るなんて出来ない以上、頑張って二人を説得するぞ！

それから数日間、ソウルゲインやラミアも加わり二人を説得。根気よく何度も何度も説得した結果、遂に父さんと母さんから許しが出た。

その際、父さんが可愛い子には旅をさせろって事で母さんを説得してくれた。

何だかんだで、父さんは俺の事を漢の子として見てくれている…
…母さんはちょっと甘いけど。

とはいえ、一日一回は必ず連絡する事を条件とされた。
後、可能であれば、年に数回は帰ってくる事も条件とされた。

その辺りの条件は当然と言えば当然だろう。
俺も元々そのつもりだったし。

しかし、管理外世界だから連絡は難しいかなと思っていたが、ソウルゲインに次元間通信機能が内蔵されているので連絡は問題なく出来るらしい。

加えてラミアが次元間の転送魔法を持っているので、移動に関しても問題ないようだ。

それならば、後は生活に必要な最低限の物を準備するだけでいいだろう。

幸い料理は得意だし、家事関係は小さい時からやってるから問題

ない。

うつし、そうと決まれば早速準備しなきゃ！
先ずは…… キャンプ用品でも買いに行くか。

「んじゃ、旅に必要な物を買に行くのでしょうか」

『わかりました、アクセル様』

「父さん、母さん、それじゃちょっと出かけて来る」

「ああ、気をつけてな」

「無駄遣いは駄目よ」

「わかってるよ、それじゃ行って来ます」

《クラナガン中央：ショッピングモール》

えーと、先ずはキャンプ用品だけ……寝袋と後は……簡易的な鍋とかかな。

火に関しては現地調達の方がいいかなあ……下手に器具を持って行っても燃料切れたら邪魔になるし。

そういや、ソウルゲインで格納領域とかってどうなってんだろ。
広いなら、荷物を持たなくていいから楽なんだけど。

「なあ、ソウルゲイン」

『はい』

「ソウルゲインの格納領域って、どん位広いんだ？」

『アクセル様のご実家がそのまま入る程度です』

「ぶー？ そんな広いの？」

『はい』

うつひゝそれだけあればかなりの物が格納出来るじゃないか。
だとすると、旅に必要な荷物は全部入れておいても問題無さそう
だ。

となると、必要な物は……寝袋と鍋や食器類、それからナイフな
んかもいるだろう。

壊れた時の用心に、何個か買っておくべきか。

「うつし、買う物は大体決まった、そんじゃ行こうか」
『はい、アクセル様』

その後色々と買い物済ませ、一路帰宅。
出発は明後日と決まった。

向かうべき管理外世界だが、ラミア曰く無人の管理外世界に行く
らしい。

目ぼしい世界については既に当たりを付けているんだそうだ。

全く何時の間にそこまで手回してんだろう……。
有能すぎて逆に怖い位だ。

なお、地力が付き始めたら違法研究施設なんかも潰して回ろうか
と言う話になっている。

それも見つかればの話ではあるが……しかし、いいんだろうか、勝手に潰してしまつて。

下手にそんな事をする、管理局が煩いような気がするが……。まあ、実際見つかったらの話だし、やるかどうかはまだわからないだし今から心配してもしようがないか。

当面の間は地力UPを目指して、基礎体力と魂流ソウルアーツの基礎を叩き込む。

んでソウルゲインとラミアの試験を突破出来たら、本格的に魂流ソウルアーツの体得を目指す。

期間は八年。

二十歳までには体得を目指す。

まあ、かなり厳しい修行になりそうだけど、やっぱりここは漢の子の意地としてやり遂げよう。

初代拳王アクセルはどうやら、魂流ソウルアーツを八年で体得したらしいから、せめて同じ期間で体得しなきゃ。

何れは初代拳王アクセルを越えなければならない。

二代目拳王となった以上、拳王の名に恥じないようにしなければいけないだろうし、何よりも二代目のボンボンなんて言われたくないから気合を入れて頑張るぜ！

「んじゃま、明後日の出発前に色々準備を済ませておこつ」

『はい、アクセル様』

一体どんな世界なんだろうねえ。
今から楽しみでならないぜ！

そして二日後、いよいよ出発の日がやって来た。

目指すは無人の管理外世界……事前情報として聞いた限りではそこにはかなり強力な原生生物がいるらしい。

そしてソウルゲインとラミアから課されたテストというのが、その原生生物を倒す事。

ちなみにその原生生物は、どうやらこれから向かう管理外世界の中でも上位に位置するらしく相当な力を持つようだ。

正直な所、話を聞くだけでも震えが来る……だが逃げる訳にはいかない。

ここで逃げたら、それこそ憧れたあの背中を超える事が出来ないもんな！

絶対にテストをクリアして、魂流^{ソウルアーツ}を物にしてやる！

そして、あの時の陸士のように、守れる漢に！

そして遂に旅立ちの日がやって来た。

これから先、当分の間は両親には会えないからしっかりと目に焼き付けておかなきゃ。

「それじゃ、父さん、母さん、行って来るぜ」

「くれぐれも気をつけてな」

「何かあったら直ぐに帰ってくるのよ」

「わかってるよ」

『アクセル様は我等がお守りいたします』

「八年後には、見違えた俺を見せてみせるからさ、楽しみに待っていてくれよ」

「ああ」

「元気だね、ちゃんと連絡はするのよ」

「おう、じゃあ、行って来る！」

こうして俺は修行の旅へと一步を踏み出した。

まだまだ子供で、何も力が無い俺だけど必ず二代目拳王として先代を超えてみせよう。

そして、立派な漢になってみせるぜ！

さあ、旅立ちだ！！

第一話・修行漬けの日々（前書き）

9 / 6

擬音排除

第一話：修行漬けの日々

あの日、両親を説得し修行の旅に出てから既に一年が経過した。
この一年、思い返してみると本当に辛かった……。

修行の旅に出てやって来たのは、とある管理外世界。

ここには人間は存在せず、鬱蒼とした森と大きな海が広がるばかり。

そして何よりも……多数の原生生物が存在し常に生存競争の真っ只中にある。

もう、毎日が生き残りを掛けたサバイバル。

そんな中俺は、ゲインとラミアの指導の下、魂流ソウルアーツを会得する為に必要な基礎体力と身体能力作りの為に、日夜修行に励んでいる。

最初は本当に辛かった……毎日かなり長い距離をランニングさせられ、その後は筋トレをしつつ魂流ソウルアーツの基本的な型を叩き込まれる。

それが終わると、今度は肉体をより頑強にする為に……ラミアの攻撃に耐えるという訓練が始まる。

ぶっっちゃけ、死ぬる……陸士訓練校の訓練なんぞ目じゃないぜ……。

んで、それが終われば今度は魔力値を高める為の訓練として、限界まで魔力を使い回復したらまた限界まで使うというのを繰り返している。

これは、リンカーコアに負荷を掛ける事で、魔力値の底上げをする訓練なんだそうだ。

勿論やり過ぎてしまうと、リンカーコアそのものがダメージを受けてしまうので、その辺りはちゃんとゲインとラミアが見極めてくれている。

じゃないと、下手すりゃ魔法そのものが使えなくなってしまう。

そういった諸々の訓練が終わったら、普通ならぶっ倒れるところだけど、生憎この世界じゃそうも言ってられない。

生きる為には食わなきゃいけない以上、食料の調達をしなきゃならないんだ。

しっかも、これがまた厳しいのなんのって……。

確かにこの世界じゃ獲物は多いけど、その獲物となる奴等も生存競争に必死だから、下手をすれば俺が獲物になりかねない。

更に言えば、基本的にラミアは手を貸してはくれない。

本当に危険な場合のみ手を貸してくれるが……おかげで何度か死に掛けた。

まあ、そういった常に死と隣り合わせの状況で修行しているもんだから、一年経った今ではランニングも然程きつくなってきたし、ある程度は格闘の型も覚えてきている。

それに、魔力値に関しても当初のD - からB +まで急激に伸びている。

僅か一年足らずでここまで成長できるとは思っていなかったが、実を言うとここからが難しい。

ラミアが言うには、B +程度の魔力値ならば然程苦労はせずとも上がるらしい。

ただ、これ以降は本当に上がりにくいらしく、A A A +からS -

へ上がる際の壁は半端じゃなく厚いようだ。

だがしかし……そんな高い目標だからこそ燃えるってものだ！

んで、ゲインとラミアとも相談した結果、当面の目標として魔力値S+を目指す事に。

まあ、かなりきついのは間違いないけど、目標は高い方が遣り甲斐があるし頑張ろう。

さて、そんなこんなで今日も一日が終わろうとしている。

食料については当面の間は問題がない分だけ採ってあるし、今日は明日に備えて早めに寝ておくか。

「んじゃ、そろそろ休むかな」

『アクセル』

「んあ、どした、ゲイン？」

『最近、いい調子のようだからな、そろそろ次の修行に入ってもいいかと思ったのだが』

「次の修行？」

『ああ』

「どんな内容なのさ？」

『それはな……』

ちなみに、この一年の間に俺はソウルゲインの事を『ゲイン』と呼ぶようになり、ゲインも俺の事を『アクセル』と呼ぶようになった。

まあ、ラミアは相変わらず様付けで呼ぶんだが、それでも結構碎けてきてはいる。

んで、新しい訓練の内容だけど、今までに輪を掛けてハードな内容だった。

これから先は、常に俺の周囲のみ重力を増加させた状態にする。

これは、重力を増加させた状態で日常生活を送る事で、筋力の密度や骨の密度を上げる為の修行らしい。

んで、マラソンなんかの時は、更に重力係数を増加させ、なおかつリンカーコアに負荷を掛けた状態で走れる。

更には飛行魔法訓練が追加されるんだが、その訓練中にもラミアの攻撃を避け続けるという鬼のような訓練内容だ。

うゝん、この修行内容だけでも凄いいんだけど、更に追加として、ゲインの機能である<シャドー>を使い、初代拳王アクセルと組み手をするんだそうだ。

勿論、最初から全開の状態で作っては歯が立たないので、段階的にシャドーの強さを開放していくそうなんだが……本当にやれんのかどうか……。

だって、相手は初代拳王アクセルだ、そんな相手と組み手できれば実力も上がるだろうけど……。

『自信が無いか？』

「いや、修行そのものはやるさ。けどさ、俺って格闘の方はどうなんだろうと思ってさ。」

『ふむ、今まで本格的な組み手をした事が無かったからな、自分の実力がどの程度なのか把握出来ないと言う訳か』

「そんなとこだなあ」

『それも致し方ないのかもしれん、ただ、お前の今の実力はかなりのものだと思うぞ』

「そうなのか？」

『ああ、そこらの魔導士には負ける事はあるまい』

「へ〜」

『だからといって慢心はするな』
「わかってるさ」

滅多に俺の事を褒めないゲインがこう言ってくれているんだ。
俺の格闘の実力も上がっているのは間違いないんだろう。

なら、その自信を元に頑張ってみるとしよう。

多分初めの内はボコボコにされるだろうけど……まあしょうがない……うっし、明日からより頑張ろう！

そして一夜明けた今日から新しい修行が始まる。
とは言っても、今までの修行内容がさらにハード化されるのに追加で、組み手と飛行訓練が加わるだけなんだけど。

でもなあ、飛行訓練中に墜落するとヤバイなあ。
聞いた話じゃ、飛行魔法って結構難しいみたいだし、上手くやれっ
つか少し不安だなあ。

悩んでても始まらないし、修行を始めるとしますか。
んじゃま、恒例のランニングからいくとしますか。

「んじゃ、まずはランニングからやるか」
『それでは重力負荷を掛けるぞ』

「おう、やってくれ」

そう言った瞬間、体全体がまるで地面に押し付けられるような感覚を覚えた。

なんだこりゃ、滅茶苦茶重いぞ！

重力負荷って、こんなに重くなるのか！？
マジかよ……指一本動かすのも結構辛いぞ……。

この状態でマラソンとか、どんだけ地獄なのさ！
ぐむむ、こりゃ思った以上にハードになりそうだ……！

と、とはいえ、この状態で動いていればそりゃ筋力も上がるだろうし、体も頑丈になるのは間違い無さそうだ。

そこはかとなく無茶な事している気がするんだけど……ま、いいつか、あんまり深く考えてもしょうがないし。

「そ、それじゃ、ランニング行つて来る」

『はい、アクセル様』

いやはや、ほんと、こんな状態でランニングなんてして体持つかな？

今までの修行もかなりきつかったけど……こりゃ死ぬかもしれないなあ……。

……じ、実際に走ってみたけど今までの比じゃなかった……。
もう、全身がガクガクで正直滅茶苦茶キツイ。

『どうだ、アクセル』

「……も、もう無理……動けないってばよ……」

『先代もこれを初めてやった時は、同じ状態だったな』

「そりやそうだろ、こんなん普通の人間がやる訓練じゃないって」

『しかし、体力、筋力、肉体の頑強さは間違いなく上がる』

「だろうなあ……少し休んで息を整えたら次にいくよ」

『そうするといい』

その後暫く休憩した後、日課のメニューをこなした。

日課のメニューこなすだけでも、今までの比じゃない位に疲れた。

だがしかし、これから飛行訓練と組み手が待っているのだ。

飛行訓練もそうだけど、やっぱり格闘を志す者としては組み手は何より重要だ。

自分の実力がどの程度なのか判断するには、やっぱり組み手が一番だし。

まあ、相手は初代拳王アクセルだし、このボロボロの状態ではまともにやれるとは思わないけど。

『では、アクセル様、先ずは飛行訓練より開始いたします。』

「おう。といつても、俺って飛行魔法の原理とか知らないんだけど。」

『全身に均一に魔力を流し、各部位の魔力を細かく制御する事が重要です』

「ふむふむ……それって結構難しいんじゃないか？」

『ええ、その為にマルチタスクが必須になります』

「マルチタスクか？今まであんまり意識した事が無かったからなあ」

『この飛行訓練には、マルチタスクの訓練も含まれています』

「わかった。んじゃ、気合入れてやったりしますか！」

『はい、頑張つて下さい、アクセル様』

その後、飛行訓練を続けたが、地面からほんの少し浮いた瞬間バ
ランスを崩してぶっ倒れまくった。

こりゃ一朝一夕で出来るもんじゃないぞ。

おかげで、何度顔面を強打したかわかんないよ。

おまけにマルチタスクやってるもんだから、余計に神経使つてし
まっつて滅茶苦茶疲れた……。

正直今の状態で組み手するのは無理っぽいなあ……。

体中痛いし、魔力も結構使ってしまったているから、今日はもう休
んで回復に専念しないと明日以降に支障が出そうだ。

しかし、何だかんだ言つてラミアは物凄い心配性だなあ、落下
する度に滅茶苦茶慌ててたし。

ゲインも半ば呆れてたもん。

獲物取りに行く時なんか、かなり心配してるみたいなんだよなあ。

一応ゲインが常に一緒だから問題は無いって言ってるんだけどねえ。

まあ、心配してくれるのは嬉しいしラミア自身は普段は滅茶苦茶優しいんだけど……時折目つきが怖い時があんだよなあ。

特に風呂入ってる時なんかね……なんか鼻息荒いし……。

ゲインもあんなったラミアには気をつけろって言ってたから、それとなく注意はしてるんだけど……。

何かこう、何時か襲われそうで怖いんだよねえ……。

あ、ちなみに、風呂は近場に温泉が湧いてたのでそこを使ってる。時折動物も入ってくるが、結構仲良くやってるんだ。

毎日温泉に浸かれるのは、ある意味ではラッキーだよなあ。

風呂の心配いらねえんだもん。

『アクセル様』

「ん？」

『組み手の方はいかがなさいますか？』

「あゝ今の状態だと少し厳しいかも……体力使い過ぎてるし……」

『無理をしても身につかないだろう、ならば今日はもう休むといい』

『そうですね、その方がよいかと』

「んじゃそうしょうか」

流石に色々やり過ぎているので、組み手はもう少し様子を見てからって事にした。

これ以上体を痛めつけても、得られる物は無さそうだし。

つか、これ以上やると、下手すればリンカーコアにもダメージが行きかねない。

そうになると、せっかく修行しているのに意味が無い。

さつさと風呂入って寝てしまおう。

今日は本当に疲れたからなあ、ぐっすり眠れそうだ。

「んじゃ、風呂入ってくるよ」

『はい、それではお供いたします』

「あいよ」

最初は驚いたよ、行き成り入ってくるんだもん。

しかも、隠さずにさ……思春期真っ盛りな漢の子としては非常に辛いんです。

まあ、今ではもう半ば諦めたので何も言わないけどさ。

しかし、ラミアの奴、自分が物凄い美人だって事わかってないんじゃないだろうか。

デバイスって言ってもラミアの場合って、見た目や肌の質感とかはほとんど人間と変わらないからなあ。

ゲインも言ってたけど、ラミアはユニゾンデバイスの中でも取り分け特殊な部類らしいから。

何でも生体デバイスって分類らしくて、活動のエネルギーを契約者の魔力じゃなく普通に食物から得るんだそうだ。

しかも、人間が生きていく上で必要な行為……まあ所謂睡眠や排泄、その他諸々の行為は全て出来るんだそうだ。

何でデバイスにそんな機能を付けたのか疑問に思っ
てゲインに聞いてみたけど……ゲインも自分達の作成者については語ろうとし
ない。

というか、データはあるらしいんだけど、プロテクト掛けられて
るらしくてその外し方はわからないんだって。

うーん、それがわかればある意味今のデバイス技術は飛躍的に上
がりそうな予感がするけど……出来ない物は仕方が無い。

それに、何処で作られたとか別に今の俺には関係の無い事だしさ。

とと、考え事ばかりしてないで早く風呂にいこつと。

今日もアイツら来てんのかなあ？

《温泉》

温泉に着いてみると、やっぱり何時のも奴らがいる。

ここの固有の動物みたいなんだけど、あんまり人間である俺を怖
がらないんだよね。

多分だけど、ここの惑星にはもっと恐ろしいのがいるから多分恐
怖の対象にならないんだろう。

一度だけ俺も見ただけあったけど、ぶっちゃけあれはでか過ぎる。

何れはあいつと対戦しなきゃならないみたいだけど、本当に勝て
るのかね、あんなの。

でもまあ、あれに勝つ事が出来れば、そんじょそこの魔導師程
度なら余裕で勝てるだろう……何せ規模が違いすぎるし。

「いやゝやつぱ温泉はいいなあ」

『そうですね、アクセル様』

『私も肉体があれば味わえるのだろうがな』

「そういうなって、何時もピカピカに磨いてるじゃんか」

『そうだな』

『……出来れば私も』

「……ラミアを磨くのは色々問題ありそうなんで却下」

『ぐすん……』

……十三歳の俺がラミアの体を洗うのは、倫理的に非常に問題大有りでしょうが！

普段はしっかりしてるのに、どうしてこういう時だけこんなのかね、ほんと。

『やれやれ、ラミアは先代の頃から変わらん』

「そなの？」

『ああ、似たような事を言って先代をよく困らせていた』

「……そりゃねえ、ラミアみたいな美人相手だと困るでしょうよ」

『嫌です、アクセル様、そんなはつきりと……』

『ふう……そういう所はアクセルは先代とよく似ている』

「へ？」

『先代も無意識で女性を惹きつける方だったからな』

「そんな、俺はもてた試しなんてないぞ？」

『……わかっていないのだなあ……まあ十三歳のアクセルではしょうがないかもしれんが』

「何だよそれ」

ゲインも普段はいい奴なんだけど、時折こうなんだよなあ。
何か含みがあるというかなんというか……。

んでも、別に怒るとかそんな事はないけど。
ゲインもラミアも俺にとっては大事な家族であり、何より信頼出来る相棒だから。

さてと、それじゃそろそろ上がって父さん達に連絡を入れてから寝るとしよう。

明日からも頑張らなきゃ。

「んじゃ、そろそろ上がるうか」

『はい、アクセル様』

『明日からは組み手も入れていくぞ』

「……うへ、こりやまた厳しくなりそうだなあ」

『ふふ、しっかりと鍛えてやろう』

「ゲインはスパルタだよなあ、ほんと」

『そうでなければ先代を超える事は出来んぞ』

「わかってるよ、必ず越えてみせるさ」

『その意気だ』

『頑張って下さい、アクセル様』

「おうよ！」

何時か必ず先代を超えて、最高の拳士になってみせる。
その時こそ、胸を張って二代目拳王を名乗ろう。

うつし、頑張るぜ！

第二話：魂へソウル（前書き）

09 / 04 擬音排除

戦闘描写修正

09 / 06

戦闘描写再修正 台本チツクだったので……。

第二話：魂へソウル

修行開始から早くも三年が経過。

この三年の間に基礎体力作り等の基本的な修行に加え、魔法や一般教養に関する座学、それにゲインの機能である〈シャドー〉を使った先代との組み手をこなして来た。

一般教養や現在の魔法理論等については、ラミアが一時的にミッドチルダに戻り情報を仕入れている。

その内容も、魔法の基本理論から応用理論、それに治療魔法や儀式魔法、結界魔法等々本当に多岐に渡る内容だ。

おかげで今まで知らなかった事についても色々勉強になり、かなり魔法についても知識が付いたと思う。

何しろ俺は元々一般的な学校に通っていたので、魔法に関する知識は実の所かなり乏しかったからこの座学は非常に為になる。

んで勿論、魔力値の最大値を伸ばす為の訓練も続けている。

おかげで現在では魔力の最大値がA A - まで到達し、最近ではある程度魔法も覚え、長時間魔法を使っても早々魔力切れを起こさなくなってきた。

そして一番重要な修行である先代との組み手だが、先代の強さを十段階に分け段階的にレベルを開放しながら行っている。

やり始めた当初は、そりやもうボコボコにされてしまった。

何せ一段階目のレベルですら、拳を振りぬく速度が見えないんだもんなあ。

ありや最早達人とかってレベルじゃない。

おかげで毎日顔がボコボコになってしまい、ラミアがいなかったら顔の形が変形しているところだ。

全く、先代は手加減て物を知らないからなあ……。

まあ、そんな無謀な組み手を毎日繰り返していたおかげか、今では俺も格闘の技量は結構上がっていると自分でも実感があるしゲインとラミアにも認められている。

実際、今では<シャドー>の強さは五段階目のレベルまで到達している。

しかし、本番はこれから。

今までの<シャドー>は魔法だけしか使って来なかったが、六段階目のレベルより<シャドー>が魂ソウルを使い始める。

そうなつて来ると、今までとは比じゃない強さを発揮するはず。

正直、生き残れるかどうかすらも怪しい気がするが……まあ逃げる訳にはいかないから勿論やり遂げるつもりだ。

とはいえ、六段階目に上がるにはやはり俺自身も魂ソウルが使えなければ話にならない。

なので、一週間後にゲインとラミアからのテストを受ける事になっている。

それまでは一旦修行は停止し、体調をベストの状態に調える事に努める。

何せ相手はこの管理外惑星に住む原住生物の中でも上位に入る存在。

生半可な事じゃ勝てやしないだろうから、気合を入れて掛からな

いと。

まあ、本気でやばくなったらラミアが手助けしてくれる事になっているが、それではテストをクリアした事にはならないから何としても自分の力でクリアしなければならない。

「そっぴや、テストの相手って具体的にはどんな奴なんだ？」

『この惑星に古くから存在する生物だ。体長も大きい者で十メートル近くなる。』

「うへ……聞くだけで強そうだ」

『実際そこらの魔導師より遥かに強い』

「んでも、よくこの惑星にいるって知ってたな」

『この惑星自体は先代がご存命の時代から存在していてな、先代もここで修行したのだ』

「そうだったのか、どうりで色々知ってる訳だ」

『まあ、あの時代より大分様変わりしているが』

「そりやそうだろ、先代が生きてたのって何千年も前だし」

『まあな』

でも、その時代から生き残っている生物だとすると、かなり強いのは間違いない。

何せこの惑星……生存競争が激しいからなあ。

俺も獲物捕まえる際に、何度襲われた事が……。

特にあの狼っぽいのは毎度手を焼かされる……今じゃある意味顔なじみになっちまったもんなあ。

『今のアクセルなら実力的にも互角といったところだろう』

「へーそうなんか……何か実感湧かないけど」

『それは致し方無い。何せ比べる相手がいないのだから。』

「ラミアじゃ強すぎるもんなあ」

『そうでしょうか、アクセル様』

「だってラミアって魔力値で言えばSSS+だし、その上遠距離と近距離の両方に対応出来て……弱点ないじゃん」

『確かにそうですが、近距離戦闘では私は先代に勝てた事は一度もありませんでした』

「そうなのか？先代っていいよ化け物だなあ……」

『まあ先代も初めからそこまで強かった訳では無いさ。あの方も血の滲むような修行の果てに強さを手に入れたのだから。』

「そっか……それを聞いて俄然やる気が出て来た！」

『ふ……その意気だ』

『頑張つて下さい、アクセル様』

そして遂にやって来た運命の日。

今俺は、テストの相手となる獣の住処に向かっている。

ゲインからの情報では、そいつは自分のテリトリーに入り込んだ者を無条件で襲うらしい。

しかし、テリトリー外存在に関しては一切感知しない習性らしく、それ故にあまり表に出る事は無いらしい。

だとすれば、今まで遭遇しなかったのも頷ける。
何せこっち方面は来た事が無かったからなあ。

『アクセル、目標はあの洞窟にいる』

「……何か如何にもって感じだな」

『生体反応からして間違いは無い。気を引き締めろ。』

「ああ、わかつてる」

注意深く洞窟に近づくと中からテストの相手となる獣が出てきたが……なんだありゃ？

出てきたのは、つぶらな瞳、異様に尖がった鼻、長い爪を持つ両手足……なんとも見た目は愛嬌がある。

だが、油断は出来ない。

何せゲイン達がテストの相手に選ぶ位だ……相当強いと考えた方がいいだろう。

『アクセル様』

『何だ、ラミア』

考え事をしていたら、突然ラミアから念話が届いた。

何だろう、何か問題でも起きたのか？

『夕食の材料にしますので、出来る限り原型は残してくださいませ』
『りよ、了解……』

あ、あれを食うのか……何か物凄く食いつらい気がするが……。まあ、この惑星では負ければ食われるのが常だし、あまり気にする必要もないか。

と、そんな事を考えていたとき、奴の動きに変化が起きた。明らかに何かを探し……そして……。

『アクセル、奴がこちらに気づいた、構えろ！』

「おう！」

「キユウウウウッ！」

奴が俺の存在に気づき、猛烈な勢いで突進して来る！

くそ、回避は間に合わない！

「ゲイン！」

『Panzergeist』
パンツァーガイスト

来る！

防御魔法展開！

「ぐあっ！」

全力で防御魔法を展開したってのに、思いっきり吹っ飛ばされた。
くそう、何だあのデタラメな腕力は！

下手に防御に回ると潰される！

こっちから仕掛けていかなきゃ！

「なろう、なめんなあ！」

拳と肘による連打！

蹴りも織り交ぜて奴に攻撃を叩き込む！

「キユウ！」

くそ、あの野郎叩き込んだ攻撃を全部両手で防御しやがった！
しかも、何だあの硬さは！

まるで岩を叩いてるような感じだ！

このままじゃジリ貧になっちまう、出し惜しみしてる余裕はねえ！

「ゲイン！」

『了解！』

「いくぜー!!」

体内で魔力を練り上げる。

練り上げた両手に集中！

ゲインが^{シュトゥルムヴァイント}Sturmwindを発動！

このまま突っ込み、奴の懐深くまで突っ込み、突きと蹴りの連続攻撃を浴びせてやる！

「白虎咬！　でりゃあー！」

そして、奴が後退した瞬間、練り上げた魔力を開放！
奴のどてっ腹にぶち込む！

「キュウウウウウ？！」

ダメージは通ったが、奴はまだ倒れない！
くそ、しぶといぜ！

「キュキュー！」

あの野郎、こっちに向かって突っ込んで来やがった！
やばい、今の体勢じゃかわし切れない！！

パンツァーガイズト

『Panzergeist!』

「がつ?!」

ギ、ギリギリでゲインが防御魔法を展開してくれたけど、かわし切れなかった!

ち、ちくしょう、いいのを貰っちゃったぜ!

この野郎……か、可愛い顔してなんてエゲツ無い攻撃しやがって! 危つくミンチになってるところだったじゃねえか!

しかし……今のでアバラが一本持つて行かれちゃみたい!

このまま守りに入ってちゃ不味いぜ!

その後も一進一退の攻防が続くも、なかなか決着が着かない。そりゃそうだ、ここで負ければ餌になるだけだから、奴も必死なはず。

しかし、体力的には奴の方が上なのは間違いない。

現に俺は体力、気力共に使いすぎている為、既にフラフラ……。

くそ、些か血を流しすぎた。

このままじゃ不味い……何か打つ手は無いのか!

『アクセル』

「今忙しい、つての！」

『魂^{ソウル}を使え、そうすれば新しい魔法が使える！』

「使えって言ったって、使い方知らないってば！」

『出来なければ、奴には勝てんぞ！』

「んな事言ったって！」

ちくしょう、魂^{ソウル}を使うって言うても一体どうすればいいのさ！？
魔力と生命エネルギーの合一なんて、即座に出来るはずがないだ
ろう！

「キュキュウ！！」

俺の集中が途切れた瞬間を狙い、奴が大きく振りかぶった一撃を
俺に向けやがった！

やばい、防御も回避も間に合わない！

「うごあー！」

く、くそ、戦闘中に集中切らすなんて、俺もまだまだな……。
マジで直撃食らっちゃったぜ……。

……ま、不味い、このままじゃ意識が……。
ちくしょう、このまま負けちまうのかよ……。

『アクセル様！』

『アクセル！』

くそ……なんとかしたいけど、体が言う事きかねえ……。
俺はここまでだったのかよ……くそつたれめ……。

『ソウルゲイン、もう我慢出来ない、手を出すぞ!』
『待て、まだだ!』
『し、しかし、このままではアクセル様が!』
『まだアクセルは負けていない、アクセルなら必ず立ち上がる!』
『でも!』

……。
……。

ああ、なんか、ラミア達が叫んでる……このまま寝ちまえば、もう楽になれるんだろう。
そうだよなあ、ここで立ち上がったって、勝てるかわかんねえんだしもういいかなあ……。

そう……だよな……。
俺がやらなくても……きっと誰かが……守るだろう……。

もう、いいんじゃないの。
魔力も低いなりにここまでやったんだから、もうさ……。

……なんて、弱音吐いてる場合じゃねえだろが、俺のばかったれ！
せつかくここまで地獄のように辛い修行に耐えてきたってのに、
こんなところで終わってたまるかよ！！

寝てる場合じゃねえぜ、立ち上がらなきゃ！

だって決めたんだろ、守れる漢に……なるってよお！！！！

「ぐ、ぐが……ぬあああ！！！」

『アクセル様！』

『アクセル！』

「へ、へへへ……」

……こ、根性で立ち上がったけど、この後一体どうすりゃいいんだ？

俺が使える魔法のじゃ、それなりのダメージは与えられても止め
を刺せるほどじゃない。

……奴に止めを刺す為には、ゲインの言う通り魂ソウルを使うしかない。
しかし、魂ソウルの使い方を知らない俺では……くそ、一体どうすれば
！？

「キユウ！」

「ち、ちくしょう、止め刺すつもりか！？」

奴の眼が光った……確実に俺を殺るつもりかっ！

やばいぜ、今の俺じゃ立っているのが精一杯……魂ソウルを使うしか手は無いけど、今の俺じゃ！

『アクセル、魂ソウルを使う為に必要な事は、自分の中にある流れを感じ取る事だ』

「……流れ？」

『そうだ、自分の中にある流れだ』

流れて言ったって、この状況じゃそんなの感じ取る暇が！
くそ……！

『集中しろ、アクセル！』

「ええい、くそ、こうなりやヤケだ！」

とにかく集中だ！

魔力を感じた時と同じように、とにかく集中するんだ！

意識を自分の内側に……。

自分の中にある流れを感じ取る……。

……何だろう、この魔力とは違う暖かい感じは……。

今までに感じた事が無い……凄く暖かい感じ……これが生命エネルギーなのか……。

『そうだ、それこそがお前の生命エネルギーだ！ その流れを自らの意思でコントロールするんだ！』

「俺の意思で流れを……」

俺の意思の流れに向けると……その途端、今までに感じた事が無い程の膨大なエネルギーが俺の中で唸りを上げているのを感じる！

周囲も俺の中の力に怯え鳴動し、大気まで震えてやがる……。

これが……生命エネルギーの力……。
魔力よりも、遥かに力強い力……。

この流れを操るには……逆らっては駄目だ。
俺の意思と流れを同調させるんだ！

「キユ、キユウ?!」

『いいぞ、その調子だ、そのまま流れをリンカーコアに集中させる
!』

流れに逆らわず、流れを俺の意思と同調させ、全てをリンカーコ
アへ……。

……わかる、わかるぞ、俺の中で全てが一つになっていくのが…
…これなら……いける!!

「……ゲイン、魂^{ソウル}発動だ!!」
『了解!』

全ての流れが一つになり、俺の体から魂^{ソウル}が溢れ出した!
溢れ出た魂^{ソウル}に呼応して、周囲も鳴動している。

この力は今までの魔力だけの状態とはケタ違いだ。
魂^{ソウル}ってのは、こんなに凄いのか!?

「うつ……」

『アクセル様!?!』

『アクセル?!!』

……お、驚いてる暇は無いみたいだ……。

俺も限界が近い……この力で一気に決着を付ける！

「ゲイン、やるぞ！」

『了解だ、細かい制御は私が行つ、アクセルは想いのままに！！』

「おうよ！ 覚悟しな、この切っ先、触れれば切れるぜ！」

^{ソウル}
魂を練り上げ、肘のブレードが展開！

高速移動魔法^{シュトルムヴァント}Stormwindを使い一気に間合いを詰めなが

ら分身！

初めて使う魔法だが、今の俺ならやれる！
いくぜえええ！！

「キュ！？」

「受ける！ 舞朱雀！！！」

全ての分身を使い、肘のブレードによる斬撃を奴に浴びせる！
一発一発がSランククラスの一撃だ、半端じゃねえはず！

奴も必死に防御しているが、明らかに防御しきれていない！
このまま押し込む！

「これで……終わりだあ！ でええい！！」

分身による斬撃を受け奴が怯んだ！
決めるなら今だ！

奴の一瞬の隙を突き、俺は上空に舞い上がり練り上げた魂を^{ソウル}一気に解放！

奴に向けて渾身の一撃を見舞う！

「俺の全身全霊だ、受け取りやがれ！！」

「キュ、キュウウウウウ……！！」

最後に一際大きな断末魔の叫びを残し奴が沈んだ……。俺もボロボロだったが、なんとか倒せた……。

あの土壇場で魂^{ソウル}を使いこなせなかったら、今この場で倒れているのは俺の方だったろう……。

慢心や油断があった訳じゃないが……俺もまだまだだ……。

「や、やったぜ……」

『見事だ、アクセル』

『アクセル様、お見事でした』

「はは、あんがと。しかし、少し疲れた……。」

……これで漸く第一段階のテストクリアか……。マジで死ぬかと思った……。今回の修行はきつかった……。

ああ、もう駄目だ……。意識保ってられない……。少し……。休む……。ぜ……。

『アクセル様！？』

『力の使い過ぎで気絶したか、ラミア、早く治療を』
『わかってる！』

……う、うぐぐ…… ああ、そっか、あの戦闘の直後に気絶しちゃったんだっけ。

あいたたた、まだ体中が痛い。

でも、今にして思うとよくあいつを倒せたなあ。
もう、かなりギリギリの状態だったけど。

『目が覚めたか、アクセル』

「ああ、ゲインか…… まだ体中が痛いけど」

『無理も無い、最初からあれだけの魂ソウルを放出してはな
「そっか」

ゲインの話では、かなりの量の魂ソウルを放出してしまった為、結局俺はあれから三日も寝込んでいたようだ。

だが、あの極限状態のおかげか、魂ソウルの扱い方については覚える事が出来た。

しかし、今回の相手は滅茶苦茶強かった。

テストの相手だから強いとは思ってたけど、まさかあそこまで強いなんて。

「でもさあ、よくあの状況下で魂ソウルを使う事が出来たよなあ」

『魂ソウルの習得には、極限状態での修行が必要だからな』

「そっなの？」

『ああ、先代も同じような条件下で魂ソウルを習得したのだ』

「へ」

まさに命懸けの修行が必要だった訳か。
ほんと、マジで死ぬかと思ったもん。

でもまあこれで、修行の方も次の段階に進む事が出来る訳だ。
これからは、今までの修行に加えて魂ソウルのコントローも入ってくる
事になるのかあ。

こりやまた一段とキツクなりそうだ。
まあ、遣り甲斐があつていいけどさ。

『アクセル様！』

「ああ、ラミア、三日ぶり」

『ああ、よかった、本当によかった！』

【喜びのあまりその豊満な胸にアクセルを抱きしめるラミア】

「むがつ！？」

ちよ、ラミア、苦しい！
息が出来ないってば！

「く、苦しい……」

『ラミア、アクセルが窒息するぞ……』

『あ、申し訳ありません、つい』

「ぶはっ」

本気で窒息するかと思った……。
でも、ラミア、やっぱりでかい……て、何を考えてるんだ俺は！？

「ラミアにも心配掛けてごめんよ」

『もう、本当に心配したのですよ、アクセル様』

「ごめんよ」

うゝむ、プリプリ怒ってるラミア……可愛いです！

て、まあ、今回は本当に無茶しちゃったから、反省しないと。

「しつつかし、今回よく魂ソウルが使えたよなあ」

『魂に必要な生命エネルギーを感じ取るには、極限状態にまで達する必要があるので。昔、先代も同じような状況下で魂ソウルを編み出したのだよ。』

「そうだったのか」

『私としては、非常に心配です』

「うう……ごめんてば」

『先代もよくラミアに心配を掛けていたぞ』

「……妙なところで似ちゃったんだなあ」

『もう、妙なところで先代に似ないで下さい。次からは止めさせて頂きますよ。』

「わかったよう、もう無茶はしないってば……多分」

『もう……』

まあ、これから先無茶をしないかと言えば……間違いなくするだろうなあ。

ラミアには心配掛けまくりそうで……何だか申し訳ない気分だ。

その後、ゲインとラミアと話し合った結果、体を休める為にも後一週間は修行を休む事に。

修行再開後は、今までの修行に加えて魂を自在にコントロールする為の修行も追加される事になった。

それと後一年、この惑星で修行したら、別の惑星を点々とする事も決まった。

これは、環境に慣れてしまい過ぎると刺激が無くなり。修行に影響が出てしまう可能性があるかららしい。

確かにどんな環境であれ慣れてしまうと、刺激が無くなり何時か何処かで手を抜いてしまったりするから、環境を変えるのは大事だと思う。

それにせっかく旅に出ている訳だし、やっぱりいろんな世界を見てみたい。

ああ、それと、先代との組み手もレベルが上がり、次からは六段階目に突入する。

五段階目でも十分に強かったのに、魂ソウルを使い始めたら一体どれだけ強くなるんだろうか。

正直、怖い気もするけど、これから先の事を考えればやらない訳にはいかないだろう。

それに……早く<麒麟>もマスターしなければならぬし……。

「しかし、今回の戦いは色々と反省点が多いなあ」
『そうだな』

『ターゲット分析の甘さも致命的でしたね』

「あゝ確かに……もう少しターゲットの情報を分析してから突入すべきだったと思う」

『そうだな、その辺も先代と似ているようだぞ』

「うゝん、やっぱり変なところで先代に似てるのかな？」

『教育しなおした方がよろしいでしょうか？』

「勘弁して……」

でもまあ、俺はまだまだ未熟だから色々と治すべき事は山のようにある。

それを一つずつ治して、何時かは先代を超えてみせよう。

とりあえず、当面の目標は魔力値S+と全魔法を使いこなす事、それから魂のコントロールを向上だ。

二十歳までには帰る予定だし、今が十四歳だから後六年の間に目標を達成しなきゃなあ。

結構難しいかもしれないけど、何となくいけそうな気がする。
うっし、これからも頑張ろう！

EX話：主人公設定（前書き）

9 / 3 年齢が間違っていたので修正 11歳から12へ

9 / 4 大幅に加筆修正

名前を『アクセル・アルマー』から『アクセル・ターナー』に変更

EX話：主人公設定

【プロフィール】

名前：アクセル・ターナー

名前は引き取られた際服に付いていたプレートから
姓は今の両親の姓

年齢：なのは達より二歳年上

物語開始当初は十二歳

性別：漢

性格：努力家

家族や友人には分け隔てが無い
大らかであり、細かい事を気にしない
一度信用した相手はとことんまで信用する

容姿：髪 - ソウルゲインと同じ淡い蒼

眼 - 特徴的な深い紅の瞳

顔 - 左頬に一つだけ火災事故の際に負った傷があるがそれ以外は整っている

初代拳王アクセルに顔立ちは似ている

初代拳王アクセルよりは幼い感じの顔立ち

身長 - 同年代に比べて高い

体格 - 引き締まっており、無駄な筋肉が付いていない

服の上からだとかと割と細身に見えるが脱ぐと凄い

家族構成：父、母

共に血の繋がりに無し
赤ん坊の頃に拾われる

趣味：格闘技の修行

格闘の試合観戦

料理

魔力値：物語初期D - 以降修行により増加

第七話時点でA A A

魔導師ランク：正式計測が無い為不明

魔力光：ライトブルー

魔法術式：古代ベルカ式

戦闘形式：魂流ソウルアーツ

.....

【使用魔法】

・青龍鱗せいりゅうりん：ランクB

両手から無数の魔力弾を連続発射する。

一発一発の威力は小さいが弾速が早く、一度に発射される数も多い為制圧力が高い。

牽制にも多用される。

魔力ソウルor魂に対応。

・玄武剛弾：ランクA

腕より発射される貫通性の高い砲撃。

アクセル唯一の中距離まで届く魔法である。

放たれた砲撃は、回転しながら進む為プロテクション等も削りながら突破する事が可能。

発射の際、アクセルの腕の部分が回転する。
ソウルゲインのガントレット

魔力のみでも使用可能。

・白虎咬：ランクA

高速移動魔法である、<シュトゥルムヴィント>を使い一気に敵の懐に潜り込み、猛烈な拳と蹴りのラッシュを浴びせる。

最後に溜めた魔力or魂を一気に解放し、両手から圧縮した魔力or魂の塊を撃ち出す。

近距離用の魔法であり、使う機会の多い魔法である。

また、応用として接近時に魔力or魂の塊のみを撃ち出すバージョンもあり。

この場合は、圧縮が弱くなるので威力は下がる。

魔力or魂に対応

・舞朱雀：ランクAAA

魂を使い、シュトゥルムヴィントの速度を最大限にし多数の分身を作り出し敵に突貫し肘の部分のブレードで切り刻む。

通常は一体の敵に対して分身全てで攻撃するが、応用として分身それぞれが違う目標を攻撃する事も可能。

ただしその場合、威力が低下する。
魂でのみ使用可能。

・麒麟：ランクS

アクセルの使用魔法の中では最強を誇る魔法。
魂のリミットを解除し、最初に青龍鱗を放ち牽制、そのまま突っ

込み白虎咬で敵を滅多打ちにした後、蹴りで敵を打ち上げ舞朱雀を叩き込む。

最後に魂^{ソウル}を最大にして敵に突っ込み、ブレードで一刀両断にする。魂^{ソウル}でのみ使用可能。

・ ???

詳細不明の魔法

・ シュトゥルムヴィント (Sturmwind)

高速移動用魔法。

アクセル専用の魔法で、魂^{ソウル}に対応している。

所謂ソニックムーブと同じだが、速度はこちらが上。

・ パンツァーガイスト (Panzergeist)

シグナムと同様の防御魔法。

主に一面を守る事に特化している。

この他にも、現代で発展したミッドチルダ式の魔法等、基礎的な魔法は使用可能。

.....

【魂流^{ソウルアーツ}】

初代拳王アクセルが編み出した格闘技で、使用できるのは拳王の血筋のみ。

特徴として魔力と生体エネルギーを掛け合わせた、魂^{ソウル}を使う事が挙げられる。

魂^{ソウル}使用時の威力は魔力単体で魔法を繰り出すよりも遥かに高い。

例：Bランク攻撃がAランク攻撃に相当

ただし、体力の消耗は魔力単体の比では無い為、習得する為にはかなりの修練が必要。

使いこなせば強力ではあるが、使い方を誤れば自身にダメージが来てしまう諸刃の剣でもある。

基本的な型等は、地球のくムエタイ>に似ている。

魂^{ソウル}流における必殺は、肘を使った攻撃である。

.....

【補足】

拳王アクセルと同名の少年。

三歳児の時点で魔力適性検査を受けるも魔力値が低すぎる為、将来の事を考えた末に管理局への入局を避け普通に暮らす事を選択。

その為、学校等も魔法学校等ではなく通常の学校に通っていた。

学校でも割とモテるはずが、本人が気づかずそのまま終わってしまっている。

但し自分では気が付いていないが、格闘には非凡な才能があり格闘の試合においては魔法未使用であれば結構な数を勝ち越している。

肉体的には頑強であり、身体能力も同年代の中ではかなり高めである。

格闘の才能や肉体の頑強さ、身体能力の高さは拳王の血筋に寄る所が大きい。

十一歳の時、家族との小旅行の際に聖王教会へ立ち寄り、そこに展示されている【拳王アクセル】が使用したデバイスを見学している時に、偶然にもデバイスを隠せさせてしまう。

拳王アクセルが使用したアームデバイス【ソウルゲイン】とユニゾンデバイス【ラミア】を扱う事の出来る唯一の人物。

両デバイスから拳王と認められ、かつ、聖王教会からも状況的に拳王として認められる事に。

その後、^{ソウルアーツ}魂流を習得する為に管理外世界へ修行の旅に出る。

なのは達三人娘の事については知らないが、ジュエルシード事件や闇の書事件についてはラミアの調査により結構深い所まで知っている。

基本的に大らかな人物で、少し抜けている所もあるが、犯罪者すら受け入れる度量を持つ。

修行する事が最近の趣味になりつつあり、暇があれば修行をしている。

ただ、強くなる事よりも、『守れる漢』になるという事に情熱を燃やしている。

その為、強さを競い合う事には、そこまで強い興味を抱かない。

五歳の頃に火災事故に合い、その際得体の知れない存在を目撃している。

また、この火災事故の際に助けてくれた陸士に憧れ格闘を始める…
…また、この事がきっかけで陸士に憧れを抱く。

修行する事が楽しく、今の所は恋愛にそこまで興味が無い……ただ、周囲の女性からは多数好意を寄せられている。

好意を抱いているのは第七話時点では、『ラミア』『プレシア』『ウーノ』『ドゥーエ』の四人。

周囲の男性からすれば、最早病気の域では無いかと言われている。

EX話：デバイス設定（前書き）

08 / 29

ソウルゲインの機能を少し加筆修正。

EX話：デバイス設定

名称：ソウルゲイン

愛称：ゲイン

人格：男

性格：冷静ではあるが、底に熱い情熱を持つ

時折皮肉っぽくなる

王の指示には忠実

種別：アームドデバイス

魔法術式：古代ベルカ式

待機状態：リストバンド

戦闘形態：ガントレットとブーツ

バリアジャケット：白地のズボンとジャケット

スーパーロボット大戦OGINのアクセルの服

内蔵機能：圧縮格納領域

シャドー

魂^{ソウル}コントロー^ル補助システム

装着者生命維持システム

???

<機能説明>

圧縮格納領域：通常の格納領域を更に圧縮している。

通常の格納領域よりも多くの物が入る。

更に生物も腐らないという優れもの。

シャドー：初代拳王アクセルの影を投影する機能。

人格は持たないが、強さは当時の初代拳王アクセルそのまま。

強さは十段階に分かれており、六段階目より魂ソウルを使用する。

影と言っても周囲の魔力素を元に生成されている為、質量が存在する。

魂ソウルコントロール補助システム：魂ソウルの流れのコントロールを補助する。
より細かい制御を可能とする為のシステム。

これが無いと魂ソウルを無駄に放出してしまう。
また、周辺にある魂ソウルの

流れを制御する事も可能。

同時に魔力素の流れも制御する事が可能。

装着者生命維持システム：装着者が瀕死の重症を負った際に発動。

あらゆる生涯を排除し、装着者の生命維持を優先する。

この際、ソウルゲインがアクセルの体を操作する為、アクセルの意識は表に出て来ない。

リミットも自動的に解除され、近づく者全てを自動的に攻撃する。

???：未だ解放されていない初代拳王アクセルすら、使う事が出来なかった機能。

どのような機能であるかは一切不明。

<概略>

初代拳王アクセルが使用した、アームドデバイス。

製作者や製作場所等は不明。

変形機能を持たない代わりに、幾つかの内蔵機能を有する。

頑強さにおいても、現行のデバイスよりも遥かに頑強。

解放されていない機能があり、これについてはアクセルの成長次第。

当初はアクセルを様付けで呼んでいたが、今では名前で呼び合う仲に。

アクセルの命令が最優先であり、他の者の命令は一切聞かない。

二代目であるアクセルの事は非常に気に入っており、また、アクセル自身もソウルゲインを友として見ている為、関係は非常に良好。

何時どんな時でもアクセルを信じ、アクセルの行動を補助する役割を担う。

アクセルの頼れる【相棒】である。

.....

名前：ラミア

人格：女性

性格：王には従順

普段は凜としている

王に仇名す者には徹底して冷酷
多少の妄想癖がある

容姿：スーパーロボット大戦OGのラミア・ラブレス

趣味：アクセルの世話を焼く

アクセルの寝顔鑑賞

種別：生体ユニゾンデバイス

魔力値：SSS+

実際には測定不能

ランク：空戦SS+

魔力光：使用するデバイスにより変化

アンジュルグ ピンク

ヴァイサーガ 漆黒

魔法術式：古代ベルカ式

使用デバイス：非人格型アームドデバイス<アンジュルグ>

主に射撃戦、広域攻撃用、ヴァイサーガより空間

戦闘能力が高い

弓と小型の盾、背面にフレキシブルウィング

肩、腰にアーマーを装着

非人格型アームドデバイス<ヴァイサーガ>

主に近接戦闘用、アンジュルグより防御力とスピ

ードに優れる

大型の両刃剣<五大剣>、背面のマント

肩、腕、足にアーマーを装着

.....

.....

【使用魔法】

アンジュルグ装着時

・シャドウランサー

左腕に装着される小型の盾から発射される槍状の魔力弾。一度に発射できる数が多い為、牽制用として多用される。

・ミラージュ・ソード

魔力により形成されるエネルギーソード。リンカーコアに直接攻撃する事も可能。

・イリユージョン・アロー

アンジュルグの装着時の主用魔法。
左腕に持つ弓から、魔力で形成した矢を発射する。
貫通性能が高く、射程も長い。
また、矢を分裂させる事で複数の目標を攻撃する事も可能。
一発の威力はデイベインバスターより上。

・ミラージュ・サイン

ミラージュ・ソードを用いた近接魔法。
背面のフレキシブルウィングを最大出力にし、高速移動しながら五芒星を描くように敵を斬り刻む。

最後にミラージュ・ソードの最大出力で突きを放つ。
アンジュルグ装着時では、二番目に殺傷力の高い魔法。

・フアントムフェニックス

アンジュルグ装着時の最大攻撃魔法。

リミッターを解除しイリユージョン・アローの矢に収束した魔力を込め、鳳凰を模した膨大なエネルギーを敵にぶつける。

収束魔法に該当し、その威力はラグナロク・ブレイカーを越える。余りにも威力が高いため、普段は使用出来ない。

使用するには、アクセルによるリミッター解除許可が必要。

ヴァイサーガ装着時

・烈火刃

魔力により形成されるクナイ状の武器。

敵に刺さると魔力爆発を起こす。

爆発の規模自体は大きく無い為、眼くらまし等にも使用される。

・水流爪牙

両手の箒手に魔力による爪を出現させ、敵を斬り裂く。

バリアブレイク機能付きの為、プロテクションの硬い敵に対して有効。

・地斬疾空刀

五大剣を使い、魔力の剣圧を飛ばす。

ヴァイサーガ装着時では、一番射程が長い。

連続発射も可能。

・風刃閃

魔力を使い竜巻を起こし、敵を捕獲。

その後、五大剣での連続攻撃を叩き込む。

斬り込みのスピードは音速を超える。

・奥義・光刃閃

ヴァイサーガ装着時の最大攻撃魔法。

リミッターを解除し、視認出来ない程のスピードで相手を斬り刻み、止めに居合い斬りを叩き込む。

デバイスであるラミアだから使用出来る魔法であり、人間には使用不可能。

こちらも殺傷能力が高すぎる為、基本的にはアクセルからのリミッター解除許可が必要。

他に治療魔法、防御魔法、結界魔法等、ほとんど全ての魔法を使
いこなす。

.....

<概略>

初代拳王アクセルが従えたデバイスの一機。

生体ユニゾンデバイスであり、エネルギーを人間と同様に食物から
得る事が出来る。

この為、王の魔力を必要としない。

魔力切れ等の緊急事態の場合は、主の魔力を必要とする場合もある。

ユニゾンに関しては、出力が大き過ぎ今のアクセルでは肉体的にも
魔力的にも負担が大き過ぎる為、本当に危機的状況でない限りは滅
多にしない。

本人的にはユニゾンしたい。

演算能力等、デバイスとしての能力も非常に高く、管理局のサーバーですら痕跡を残さずにハッキング出来る。

加えて攻撃魔法以外にも、治療魔法や防御魔法、結界魔法等も使いこなすある意味チートデバイス。

現時点では、王であるアクセルよりも遥かに強いが、アクセルより目立つ事はしない。

アクセルからの命令があれば別。

アクセル以外には従わず、アクセルを守る事を至上としている。

この為、アクセルに手を出す相手には一辺の躊躇も無く、微塵の後悔も無く殴殺出来る。

ラミア自身は今の王であるアクセルに対して、並々ならぬ愛情を持っている。

故にアクセルに対しては、かなり積極的にアタックを掛ける。

何時かアクセルと結ばれる事が夢と語る、結構な乙女回路も持っていたりする。

良くも悪くも、アクセルの頼れる【女房】である。

第三話：母親（前書き）

08 / 29

加筆修正

08 / 31

加筆修正 主にジュエルシード関係。

9 / 6

一部加筆修正

第三話：母親

魂^{ソウル}を会得してからも日夜修行に励み、修行開始から四年が経過した。

今では俺も十五歳。

いやはや、何と言うか早いもんだよなあ。

修行を始めた当初は自分がここまで強くなれるとは思っていなかった。

あれだけ無茶な修行を繰り返していれば、嫌でも強くなるんだろうけど。

何せもうあれだ、先代との組み手は無茶苦茶の一言に尽きる。

魂^{ソウル}を会得した事で、＜シャドー＞のレベルも六段階目に上がり、先代も魂^{ソウル}を使い始めたがこれがまた……何というかバグってんじゃないかと言えない。

唯でさえ攻撃の速度が速いのに、魂^{ソウル}を使い始めた事で攻撃そのものにもシュトゥルムヴィントが掛かってるようで……。

だもんだから、もうね、拳が音速ぶつちぎってます。

ぶつちやけ、見切れません！

おかげで初期の頃のように、またボコボコにされる日々が続いている。

ほんと、ラミアがいなかったら、間違いなく顔の形変わってる。

まあ、そのおかげか、タフさは相当いい線いってると思う。

つか、タフじゃないとやってられんわ！

んでだ、ここでの修行も既に四年が過ぎたので、一路別の管理外世界に移動する事に。

移動先については既にゲインとラミアが選定済み。

何でもこの惑星よりも更に輪を掛けて凄い場所らしい。

……一体全体どんな場所なのやら。

それと、ラミアが持って来た情報の中に、二つほど気になる情報があった。

一つ目が、これから向かう管理外世界にどうやらかなり古い遺跡があるらしい。

それも恐らくは古代ベルカ時代か下手をすればそれより以前の遺跡の可能性があるようだ。

一体全体何処でそんな情報得てくるのか、本当に気になるのだが、ラミア曰くナイショだそうで……うーん、何か下手に突っ込み入ると後が怖い気がするので、あまり気にしないようにしておこつと。

俺も曲りなりにも、二代目拳王を受け継ぐ訳だし、やっぱり古代ベルカ時代等には興味がある。

ので、ゲイン達とも相談し、修行の合間にその遺跡を探索する事に……何が待っているのか結構ワクワクするぜ。

んで、もう一つの気になる事というのが、管理外世界である『地球』において発生した二つのロストロギア絡みの事件。

過去にも管理外世界でロストロギアの暴走事故等は起きているので、別段気にするような事でも無いのだが、今回は少し様子が異なる……というのも、それぞれの事件解決において、管理外世界でありながら非常に高い魔力を有する現地の人間が事件解決に活躍した

為だ。

どうも、聞くところによれば、目覚めた当初からA A A +とかふざけた魔力を持っていたらしい。

……何かそれを聞くと、死に物狂いで修行しているのがバカらしくなってきた。

でもまあ、会った事も無い人間に嫉妬したところで意味は無いので、俺は俺で頑張る事にする。

しかし、魔法に目覚めてそれ程経ってないのに、収束魔法とか使いまくるって……天才ってないもんだねえ。

てな事を言っていたら、ゲインとラミアからも俺も十分に天才だと言われた。

そうなのかなあ……何か自分じゃ実感無いんだけど。

とにかくそんな訳で次なる世界へ移動する事に。

当面の間は修行を続けながら、遺跡探索をして過ごす事に。

とはいえ、次の世界は半年程度で移動する事になっている。基礎的な修行は粗方終えているので、これからは色々な世界を渡り歩く事に。

んじゃま、移動する為の準備をしましょう。

といっても、ほとんどゲインの格納領域に突っ込んであるから、別に準備する事なんてないんだけど。

「んじゃ、そろそろ移動するか」

『そうだな、既にここでやるべき事は終えている』

『忘れ物はございませんか、アクセル様』

「大丈夫、全部ゲインの格納領域に突っ込んであるし」

『流石に生肉を入れられるとは思わなかったぞ』

「だって勿体無いじゃんか」

『そうですね、向こうでも食料が直ぐ手に入るとは限りませんし』

『そうなんだがな……どうも生臭くなりそうだな……』

「ちゃんと向こう着いたら磨いてやるってば」

『ならばいいが』

ゲインの格納領域は本当に便利だ。

何せ、生物入れても腐らないんだもん。

おかげで、この世界で獲れた食料は全部持っていく事が出来る。

次の世界にも動物類はいるみたいだけど、実際食えるかどうかわかんないしなあ。

もしもドラゴンとかだと、倒すだけでも厄介だし。

そんじゃ、そろそろ行くとしますか！

「おつし、それじゃ行こうか」

『ああ』

『はい、アクセル様、では……』

こうして、次なる世界へ俺達は旅立った。
大きな期待と、一抹の不安を抱いて……。

.....。

『アクセル様、到着致しました』

「.....ここが次の修行場か。しかし、何とか何も無いとこだなあ。」

『地表の約七割が海、後の三割が陸地になります』

「へーんじゃ海中訓練とかも出来そうだなあ」

『そうですね』

「あ、でも、水着が無いか」

『それなら既にご用意してございます！』

「.....何時の間に」

『先日ミッドへ戻った際に入手しておきました！』

ラミアってこういう事になると、何と云うか物凄い行動が早い.....
つか、金渡してたっけ？

.....恐らく父さんか母さんに金貰ってるんだろうけど.....何時の間にそこまで仲良くなってたんだろう、謎だ。

でもまあ、水中での訓練で地上でやるよりもかなりきついって話を聞いた事があるから、いい修行にはなるだろう。

古代の拳士も、よく水を利用して技を磨いたなんて話もあるし。

しかし、こんな惑星にマジで古代遺跡なんてあるのか？

まさか、海の底に沈んでるとかないだろうなあ.....でもまあ、それも浪漫があつていいかな。

とりあえずは、拠点となる場所を探すでしょう。

考えるのはそれからだ。

「んじゃま、拠点を探そうか」

『畏まりました』

『どうする、空から探すか？』

「そうしよつか、飛行訓練も兼ねて」

『了解だ』

『はい』

拠点となる場所は……やっぱりある程度木々が生えていて、かつ、飲み水に困らない場所がいいだろう。

幸いこれだけの海が広がっているなら、魚位いるだろうから食料には困らないだろう。

俺は基本的に好き嫌い無いし、魚は元々大好物だ。

……こういう時は雑食性な自分がラッキーだと思う。

四年もサバイバル生活してた関係もあるだろうけど、最近じゃ獲物を捌くのもあまり気にならなくなってきたし。

最初の頃は動物を捌くのは、視覚的にも心情的にも結構きつかったからなあ。

ま、とりあえず、飯の心配は後にして拠点探さないで。
寝る場所無いと流石に不味いし。

……うゝん、結構な距離を飛んだけどなかなかいい拠点が見当たらない。

ちよろちよると小島はあるんだけど、木が無かったり水場が無かったりとなかなか条件に合う場所が無い。

うむむ、困った。

このままだと、今日の寢床が確保できないぞ。

「なかなかいい拠点が無いなあ」

『そうだな』

『アクセル様、あそこはいかがでしょう？』

「ん？」

ラミアが指し示した方角を見ると、程よい大きさの小島が見えた。中央に大きな台地とでも言うべき場所があり、その周りを大小様々な木々が囲んでいる。

あれだけの木々が生い茂っているなら、恐らく水場もあるはずだろう。

住む場所もあの台地の上にすれば見晴らしもいいし、丁度いいかもしれない。

「結構良さそうだね、それじゃもっと近づいて上空から見てみるか」
『はい』

『では、探査魔法を使ってみたらどうだ』

「あ、そっか、一応ミッド式のサーチャーは教わったんだっつけ。んじゃ、使ってみるか。」

『アクセルはミッド式の細かい魔法は苦手だから、この機会にそ

の苦手を克服しておくべきだろう。」

「……しょうがないじゃん、俺、古代ベルカ式なんだもん」

そうなんだ、実の所、ラミアに教わってわかった事なんだけど古代ベルカ式を基本とする俺でもミッド式の魔法をある程度は使う事が出来る。

ある程度と言っても基礎的な物に限られてくるんだけど。

しかし、ミッド式の魔法を使う場合は、古代ベルカ式に合わせて術式の調整が必要になる。

俺はこの調整が苦手なんだ……だって細かいんだもん。

でもまあ、何れ地上本部に勤務する事になった場合、捜査とかでは戦闘用魔法よりもこういった探査なんかの基礎的な魔法の方が役立つだろうから頑張って修行している。

……そういや、聖王教会は俺を騎士にする事は諦めてるのかな？

俺としては、今でも地上本部に勤務したいと考えているんだよなあ。

何せ俺の憧れる漢って、全部地上本部の人達だしさ。

有名なオーバーランカーである、『ゼスト・グランガイッ』。
現在も地上本部を引っ張っている、『レジアス・ゲイズ』。

そして、あの時、俺を助けてくれた『名も知らぬ陸士』。

……こうして考えると、俺って憧れているのはどうにも漢臭い人達ばかりだ。

普通、憧れるとしたら、本局の提督とか美人執務官とからしいからなあ。

友達は本局のリンディ・ハラOWNに憧れてた……まあ、どうも憧れるベクトルが違ったような気もするけど。

だもんだから、俺は地上本部勤務を選ぶ事になっている。修行を終えてミッドに戻ったら、速攻で地上本部に申請しに行こつと。

『アクセル、考え事をする前に動け』

「ああ、ごめんごめん」

『全く、お前は考え事をしだすと止まんからな』

「悪かったよう、んじゃ、早速探査魔法を使うとしますか」

『上手くやれよ』

「おう」

その後何とか探査魔法を使い島の探索をしたところ、島の東側に水場を発見。

更に色々調べてみたが、大型の動物等も存在しないようで、危険性が少ない事も確認が取れた為、ここを拠点とする事に決定。

ただ、水場の周りはぬかるんでいるようだったので、拠点としては使えないのでやはり当初の予定通り台地の上を拠点とする事にした。

まあ、水については毎回汲みに行けばいいだろうし、それもまた

修行の一つになる。

『では、アクセル様、早速これを！』

「ん？ ああ、水着か……て、今着る必要は無いんじゃない」

『いいえ！ せつかくのお召し物が濡れてはいけません！』

「あ、ああ、わかったよ」

『はあ、やれやれ……』

そうして水着に着替えた訳だけど……案外普通だ。
というよりも、よく俺の好みを反映している。

……こりゃ間違いなく母さんの仕業だな。

となると、多分ラミア用の水着も渡しているはず……あの母さんがラミアを見逃すとは思えないし……一応聞いてみるか。

「なあ、ラミア、この水着だけど母さんの勧めじゃないか？」

『はい、よくお分かりですね』

「そりゃね、俺の好みにあってるし、何よりもラミアが金を手に入れるとしたら俺の両親に相談するしかないっしょ」

『はい、仰るとおりです』

「だとすれば、恐らく母さんだろうけど……ラミア用の水着も渡されてんじゃない？」

『ええ、お母上から私も水着を着るようにと……』

「ははは、多分着せ替え人形にされただろう」

『ええ』

「まあ、母さんそういうの好きだからなあ……んで、どんな水着なのさ」

『こちらです』

そうして差し出されたのは……何だこりゃ、ほとんど紐じゃねえ

か！

大事な部分は一応隠れてるけど……胸なんかほとんど見えるじゃねえかよ！

母さんめ、一体全体何を基準にこんなん選んだのさ！

そりゃラミアは超一級品の美人だし、スタイルは滅茶苦茶いいし、絶対に似合うだろうけど……だからってこれはなあ……。

「母さん……一体どんな基準で選んだんだ」

『アクセル様にお見せするなら、これが一番いいと仰っておられました』

「……俺に？」

『はい』

……ま、まさか、ベッドの下に隠しておいた雑誌……見られたのか？

確かあれにも、こんな水着が載ってた気がするけど。

ぐあああ！

滅茶苦茶恥ずかしいぞ、これ、帰ったら絶対言われるに決まっているじゃないか！

ちくしょう、母さんめ、勝手に人の部屋漁りやがって！

帰ったら文句言ってやる！

『では、着替えます』

「のわ！？　ここで脱ぐなッてば！」

『しかし』

「ええい、いいから隠れて着替えろッてば！」

『……畏まりました』

「たくもっ……」

『アクセルも大変だな』

「そう言うなら、ラミアのあの天然具合をなんとかしてよ」

『無理だ、ラミアのあれは最早手が付けられん』

「うっ……」

そりゃね、俺も十五歳の健康な漢の子ですから、女性の裸に興味が無い訳じゃない……むしろ大好物だ！

だけどねえ、ああも無防備に目の前に晒されると……流石に恥ずかしいんだよ。

しかも相手はあのラミアだし。

ラミアって自分じゃ気が付いてないかもしれないけど、モデルになってもおかしくない位の美人だからさ……もう少し自重して欲しいと思う……。

『お待たせいたしました』

「ああ、お帰り……」

『いかがされました？』

「ああ、いや、何でもない！」

うひゝ目のやり場に困るんだけど！

何だよ、あの水着！

予想以上に布面積が小さい！
ほとんど見えてるってば！

「……まあ、似合っているよ」

『ありがとうございます、アクセル様』

「ま、まあ、とりあえず、水着もある事だしここでの修行はやっぱ

水の中がメインになるのかな？」

『そうだな、水中での修行は地上で行うよりも体に負荷が掛かる。故に筋力の増強にはかなりいい修行になる。』

「そっか」

『それに、内蔵を鍛えるにも丁度いいのでな。素潜りもやって貰うぞ。』

「泳ぎは割りと得意だけど、素潜りはあんまやった事ないから、どんだけいけっかわかんねえや」

『最初から深く行き過ぎると、潜水病の恐れもある。徐々に慣らしていけばいい。』

「わあつた、んじゃ、早速やるか」

『そうだな』

『はい、アクセル様』

予想通り、水中での修行がメインになるようだ。

勿論今までの修行も続けるけど。

やっぱり格闘において内蔵を鍛えるのは重要だ。

格闘の技の中には、体の内側に衝撃を与える技もあるから、内蔵が弱いとそれだけで弱点になりかねない。

それに状況によっては、救助活動とかも必要になって来るだろうし、そう考えた場合やはり呼吸器系の強化は必要だ。

火災現場とかで、息が続かないから役に立たないじゃ、アホ丸出しだもんね。

うっし、それじゃ早速やっていきますか。

これでまた、先代に一步近づければいいんだけど。

拠点を決めてから早くも二ヶ月が経過。

その間、今までの修行に加えて、海への素潜りや水中での魂流ソウルアーツの型の訓練も追加された。

素潜りの方は徐々に距離を伸ばしているが、水中での魂流ソウルアーツの型の訓練は非常に辛い。

始めた当初はもう、筋肉がパンパンになってしまつて……翌日は筋肉痛で地獄を見た。

まさか水中での訓練があれ程までに辛いとは……舐めてたぜ。
なかなかやるでは無いか、水中め！

そんなこんなで、修行を続けながらもこの世界にある古代遺跡を探して回っていたのだが……つい先日、遂にその遺跡を発見した。発見したきっかけは、たまたま食料を探しに少し遠出した時に、水中にゲインが妙なエネルギーを発見した事による。

潜って詳しく調べたところ、やはり人工的な構造物だそうで、ラミアから聞いていた古代遺跡で間違いが無いそうだ。
んで、今日はその遺跡に入ってみる事に。

やっぱり漢の子としては、冒険には憧れるからな！
一度でいいから、こういう遺跡探検とかしてみたかったんだよ。

でもまあ、ゲインが感知した妙なエネルギーってのも気にかかる。ゲインが言うには、俺が使う魂ソウルに似ているらしいんだけど……一体全体何でそんなエネルギーが存在してんだろう。

その辺りも含めて調査をする事に。

まあ、こつちにはラミアもいるし、俺もそこそこ戦えるし何か起きてもなんとかなんでしょ。

「うつし、それじゃ行くか！」

『随分と張り切っているな、アクセル』

「そりゃね、遺跡探索なんてワクワクするじゃん」

『やれやれ、そういう所はまだまだ子供だな』

「いいじゃんかよう、漢の子なら懂れるって！」

『ああ、アクセル様……可愛らしい……』

何かラミアの感想がおかしい気がするけど……まあ気にしない気にしない。

さて、そんじゃ行きますか！

水中から遺跡内部に進入。

ここまでは特に問題が無かった。

ただ、気になるのは、入り口から少し進んだ先からは空気がある

という事。

何故かわからないが、水が入って来ていない。

これもあの謎のエネルギーが原因なんだろうか？
だとすれば、結構凄い発見なのかもしれないなあ。

「今の所、問題は無さそうだなあ」

『ああ、畏の類等も見受けられない……しかし、この遺跡内部に漂うエネルギーは……』

『奥に行くほど強くなっているようです』

「こりゃ、何か凄いもんでもあんのかな？」

『……わからん、魂に似てはいるが、それにしても大分不安定なようだ』

「うゝん……何だろうなあ……」

『人体に有害では無いようですが、気を緩めない方がよいかと』

「そだね、注意だけは怠らないようにしよう」

ゲイン達にもはつきりとわからないとなると……俺なんかが考えてもわかる訳無いか。

しかし、魂^{ソウル}って生命エネルギーと魔力の混合のはずだから、空気中に漂ってるってのもおかしい話だよなあ。

一体何がどうなってるんだろ。

まあ、それも、最奥部に行けばわかる事か……んじゃ、注意しつつ最奥部を目指しますか。

それ以後もさしたる危険は無かった。

途中、少し分かれ道があったけど、探査魔法で確認して正解の道を選ぶ事が出来た。

間違いの道も、単純に行き止まりってだけのようだったけど。

しかし、なんと言うか拍子抜けだよなあ……もっとこつ罨とか一杯あんのかと思ってたけど。

ゲインが言うには、恐らく古代の神殿の一部だろうとの事。それなら罨なんか無くても当然だろう。

んで、いよいよ最奥部に到着。

何があんのかなあ……お宝でもあれば面白いんだけど。

「ここが最奥部か……なんだか不思議な場所だなあ……」

『ああ、ここは、魂に似たエネルギーに満ちているようだ』

『はい、それに空間の位相がずれた形跡があります』

「位相のずれって……」

『今は問題が無いようですので、恐らく一時的かと』

「そっか、よかった……」

空間の位相がずれたって事は……次元震でも起きたのか？

でも、もしそうだとしたら、この場所がこんなに綺麗なはずはないよなあ。

次元震なんて災害が起きているなら、下手をすればこの惑星自体が消えていてもおかしくはないし。

うーん、一体どうなってるの？

『アクセル、前方に何かあるぞ』
「ん？」

何だろう……祭壇かな？
行ってみるか。

《祭壇》

祭壇と思しき場所に来てみると……台座の上に誰かが二人横たわっている。

何でこんな場所に人が寝てるんだ？

「人……だよな……」

『そのようだ』

『……二人共に心拍、脈拍、呼吸、全て停止しています』

「という事は……死んでるのか？」

『はい、医学的には死亡している状態です。しかし、その割には腐敗が進んでいません。』

「そう言えば……綺麗なままだよなあ」

普通、動物にしる人間にしる、死体を放置すれば腐るはずなんだけど……この人の遺体にはその様子が見られない。

どう考えてもありえないっしょ、ここに放置されている事といい

……しかも、この人が持つてるのって……デバイスじゃなか。

という事は、管理世界の人なのか？

うーん、わからんぞ。

「ラミア、このデバイスからデータを引き出せないかな」

『やってみます』

「だけど、どうして腐敗してないんだろっ」

『わからんが……恐らくこの場に満ちているエネルギーが関係しているのだから』

「……益々わかんないな」

その後、ラミアによりこの人が所持していたデバイスから情報をサルベージしたところ、幾つかの事が判明。

先ずこの人の名前は、『プレシア・テストロッサ』と言うらしく、元々ミッドチルダに住んでいた研究者らしい。

この人は自分の娘である『アリシア・テストロッサ』の蘇生を行う為に、＜ジュエルシード＞というロストログアを集めていたという事。

その＜ジュエルシード＞を巡り、管理外世界の『地球』で管理局と対立していた事。

俗に言う＜ジュエルシード事件＞というのがこれに当たる。

確か、ラミアが調べた中で俺が気になっていた、管理外世界で起きた事件の事だったのはず……よもやその首謀者の死体にお目に掛

かるなんて思いもしなかった。

んで、この人はその事件の最後に虚数空間に飲まれ、そのまま帰らぬ人になっただけらしい。

それともう一つ、データの中からこの人の日記と思しき物が発見された。

その内容は……何というか壮絶と言うべきか……。

実際には娘であるアリシアが死んだ後からの事が記録されているが……何とも筆舌に尽くしがたい。

アリシアを蘇生する為に、アリシアのクローン体である『フェイト・テストロツサ』を創り上げた事や、それ以外にも幾つかの違法研究らしき研究をしていた事などが克明に記されている。

気の弱い人じゃ、これを読んだだけで気絶しそうな程にエグイ内容だ。

ただ、このとんでもない日記の最後の一文に記されているのが……これまた何とも情に訴えるというか何と云うか……。その内容が……。

『私の可愛い娘アリシア……そしてもう一人の大切な娘フェイト……あなた達と……もう一度、幸せに、暮したかった……』

これを読んだ時、不覚にも号泣してしまった。
壮絶なるは親の愛！

泣かせるじゃないのさ！
俺はこういう話に弱いんだ！

「……何だか壮絶な人生だなあ」

『そうだな、愛情というのは狂気に走ればそれだけで大きな災いを産む』

「だけど、親の愛情は海よりも深いか……」

ほんと、凄いやな、親つてのはさ。

まだまだガキな俺だけど、親をやってる人つてなそれだけでも無条件で尊敬出来るわ。

「さてと、感動するのはこの位にして、この辺りの調査をもう少し続けるか。どうも気になるんだよね、この場所が。」

『ああ、何かあるといけないからな、しっかり調査して危険が無い事を確認しておくべきだ』

『では、私はこの空間に満ちているエネルギーについて調査いたします』

「頼むよラミア」

ラミアによるこの空間に満ちるエネルギーの調査が開始され、数日が経過した。

その間、俺と言えば、相も変わらず修行漬けの日々。

調査とかってなると、今の所俺に出来る事は無い。

何れはそういった部分についても覚えていくべきだろうけど。

……とはいえ、あの場所の事とあの二人の事が気になってどうにも身が入らない。

何とか出来ないもんかねえ……せめてもう一人の娘にあの人の遺言だけでも伝えられたらねえ。

『アクセル様』

「お、どつたの、ラミア」

『調査が終わりましたので、この場までお越しいただけますか』
「わかった、今行くよ」

流石はラミア、もう調査が終わったのか。
優秀な女房役がいると、助かるなあ。

んじゃま、あの祭壇に行くでしょう。
どんな結果が出るか、少し楽しみではあるし。

祭壇に到着すると、ラミアがモニタを展開して待っていた。
つか、あんな機材をどっから調達してんだろっ。

相当金が掛かるだろうし……うゝん、ほんとラミアは謎な部分が多い。

まあ、その辺りは後で聞くとして、とりあえず調査結果を聞くと

しよう。

「ラミア、お待たせ」

『いえ』

「んで、どうだったの、ここの調査結果は？」

『はい、それですが』

ラミアからの調査結果によると、この場に満ちているのは魂^{ソウル}そのものというよりも、高濃度の生命エネルギーだそうだ。

それも人間一人が出せる量を遥かに越える程の濃度らしい。

何でそんな高濃度の生命エネルギーがこんな場所に満ちているんだろう。

普通じゃあり得ないでしょうに。

「しかし、何故にそんな生命エネルギーが……」

『仮説としては恐らく……惑星そのものの生命エネルギーではないかと』

「惑星の？」

『はい』

惑星が生命エネルギーを発生させるって……そんな事あんのか？
言ってみれば惑星なんて、岩の塊みたいなもんだろう。

前に聞いたゲインの話では、空気中にも多少の生命エネルギーや魂^{ソウル}は漂っているらしい。

これは、その周辺に住む生命体が放出しているらしいからだそうなんだが……惑星そのものが生命エネルギーを放出するなんてあり得るのか？

『証明された訳では無いが、星を一個の生命体と考える仮説は存在する……所謂ガイア仮説と呼ばれるものだ』

「ガイア仮説……」

『ああ、古代ベルカの時代よりも前から存在する仮説だ』

「へーそんな仮説があんのか。でも、その仮説通りだとすれば確かに生命エネルギーを発生させるのも頷けるか。」

『ああ、そしてそのエネルギーは個人が発生させるものよりも遥かに濃度が高い』

「ふーん、そうになると、そのエネルギーのおかげであの死体も腐らないって事か？」

『そう考えるのが妥当だ。恐らく高濃度の生命エネルギーに包まれる事よって、死体の防腐が成されているのだろう。』

「不思議な事もあるもんだなあ」

うーん、生命の神秘を見たって感じた。

こんなん学者連中が見たら、血相変えて研究しそうだけど。

まあ、勿論発表なんてするつもりは無い。

そんな事したら、この場所が荒らされてしまうし。

と、そんな事を考えていたら一瞬何かが光ったのを見つけた。
何だろう、プレシアさんの持ち物かな？

「なんだろ、これ」

『どうした、アクセル』

「ほら、これ」

『これは……高濃度魔力結晶体だ』

「魔力結晶体……なんでそんなもんがこの人の服に？」

『……恐らくこれが<ジュエルシード>では無いか？』

「ああ、そういう事か」

『恐らくそのジュエルシードにより、何らかの作用が働き、虚数空間とこの空間とが繋がったのだろう』

「確かに……そう考えれば辻褄は合うか……」

やっぱロストログアって凄いんだなあ。

普通空間を繋げるなんて、余程の魔力が無きゃ出来ない事だ。

それをこんな石ころみたいなのがやってのけるだなんて……管理局がやつきになって封印したがる訳だ。

こいつも封印掛けておいた方が良さそうだ。

暴走でもされたらそれこそ洒落にならない。

……まあ、暴走したとしてもラミアだったら抑えられそうだけど、ここの遺跡が崩れちゃうかもしれないし。

しかし、どうしたもんかなあ。

この人達の遺体は……やっぱ火葬して遺族に送るべきか？

確かもう一人の娘は生きているはずだし……管理局に問い合わせれば居場所位はわかるだろう。

面倒事になりそうな気がするけど。

「やっぱこの人達の遺体は火葬すべきかな」

『だろうな、ここより出せば腐敗してしまうだろう』

「だよなあ……」

でも、遺族の意向を聞かずに火葬とかしちゃって大丈夫なのかな？
やっぱり何とか連絡を取って、遺族の意向を聞くべきじゃないだろうか……。

とはいえなあ、遺族であるもう一人の娘って、恐らくけど管理局に保護されてるだろうし……。

下手に関わると、色々厄介な事になりそうだしなあ……うーん……悩む。

『……アクセル様、一つご提案がございます』

「ん？」

『アクセル様の魂を^{ソウル}コントロールするお力と、我々二人の機能を使いこの場に満ちる生命エネルギーを収束、更にこの<ジュエルシード>の魔力を使いこの二人に収束した生命エネルギーを与える事で……この二人を蘇生する事が出来る可能性があります』

「……へ？」

蘇生が可能って……マジなのかそれ？

それが本当に可能だとしたら……確かにこの人の最後の願いを叶える事が出来るだろう。

でも、人間である俺がそんな大それた事、果たしてやっていいのかどうか。

死者の蘇生なんて、はっきり言って神様の領分だろう。

人間の領分を越えすぎている。

幾等この人の最後の願いが家族と暮す事とは言え……流石に死者の蘇生ってのは傲慢が過ぎやしないだろうか。

それにだ、<ジュエルシード>って、調べた限りじゃ結構不安定な物質らしいし、そんな物を使ってしまうと危険じゃないだろうか？ 幾等封印を施したとしても、暴走したりするんじゃないか？

「うーん、とは言ってもなあ、死者蘇生なんて幾等なんでも……そ

れにジュエルシールドも危険じゃないかなあ……。」

『それに、下手をすればアクセルにも影響があるかもしれん。これだけの高濃度の生命エネルギーを操作する等、アクセルにはまだ厳しいのでは無いか？』

『確かに今のアクセル様ではまだこれだけの生命エネルギーの操作は難しいかもしれん。ジュエルシールドについても今は安定していますが、暴走する危険性は確かにあります。ですが、私はこの母娘を放つては置く事は出来ないのです……。』

何だか随分と必死だなあ、ラミアの奴……。

何か思い入れでもあんのかね。

「……」

『生きていれば幸せを掴む事は出来ます。しかし、死んでしまつては幸せを掴む事は出来ません。』

「そりゃまあ、そうだけど……」

まあ、俺も拾われっ子である以上、家族のありがたみというのは十二分にわかるつもり。

残されたもう一人の娘の事も考えれば……確かに親がいる方がいいのは間違いないだろう。

それにこの人の最後の願いは、娘達と幸せに暮す事。

蘇生が出来れば確かにそれが適う可能性もあるけど……。

『アクセル様、どうか』

「うーん……つか、ラミアは何でそこまでこの二人に入れ込むんだ？」

『……それは』

『過去の戦の時に、ラミアは二人の人間を死なせてしまっている』

「そりやまあ戦である以上は人が死ぬ事は承知の上だろう？」

『確かにそうだ……だがその二人は……戦とは無関係な普通の民であり、死なせてしまった原因は……ラミアのミスによるものなのだ』
「……そうだったのか、それでこんなに必死な訳か……」

所謂罪滅ばしみたいなのかな？

それともトラウマか……ラミアも結構抱えてる事があるのか……とは言えなあ……死者の蘇生となると……やっぱり悩むよなあ……。

アリシアちゃんもこの年で死んでしまうのは可愛そうだし、プレシアさんもやつぱ放つては置けないよなあ……。

ふう……何だか踏み込んだじゃない領域のような気がしてならないし、何とも傲慢な考えのような気がするけど、人助けと思ってやるだけやってみようか。

それで罰を受けるなら……そんなきょうがないさ。

助けられる可能性を無視しておくのも、寝覚めが悪いし。

うつし、そんじゃやるだけやってみましようかね。

出来るかわかんないけどさ。

「……わかったよ、ラミア。んじゃ、いっちょやってみよう。出来るかどうかわかんないけど。」

『いいのか、アクセル』

「まあ、傲慢かもしれないけどさ、やつぱ生きているからこそ幸せなんだと思うよ」

『アクセル様……』

「俺も拾われっ子だしね、その辺はよくわかるつもりさ。父さんと母さんが拾ってくれたからこそ生きて幸せを得られたんだし。」

『そうか……お前がそう決めたのなら私は反対しない。全力でサポ

「トしよう。」

「悪いな、ゲイン」

『ふ……構わんさ』

でも、俺一人でこの場に満ちる生命エネルギーを収束するのは、結構キツイだろうなあ。

だとすれば……ラミアとユニゾンして能力の底上げをするべきかね。

さつき、ラミアも三人の力でなら可能って言ってたし。

でも、ユニゾンは今までした事が無いからなあ。

どうなるのか正直不安ではあるんだが……まあ、やると決めた以上、気合入れてやるしかないか！

うっしや、二代目拳王として、成し遂げてみせるぜ！

「と、そうだ、実行する前に聞いておきたいけど、この場の生命エネルギーを収束したらその瞬間に腐敗が進むって事は無いのか？」
『全てを収束する必要はありません。蘇生に必要な分だけを収束すれば。』

「そうなのか。んで、どんくらい必要なの？」

『その辺りはこれから計算いたします』

「わかった」

それもそうか、ここに満ちている生命エネルギーの量は人間一人分よりも遥かに多い訳だし。

全部収束して与えると、過剰過ぎて返って悪影響が出ちゃうか。

となると、必要な分量だけを収束する訳か……こりゃまた難しそうだ。

俺って収束魔法とかは苦手だからなあ。

『それと、収束する際はユニゾンした状態で行うのがよろしいかと』
「ユニゾンか、そういやした事なかったなあ」

『今のアクセルではまだまだ制御しきれんからな』

「悪かったね、未熟者で」

『ふ……そう思うなら早く一人前になれ』

「わぁってるよ、んじゃ、収束はユニゾン状態でやるとしようか」

『畏まりました！ 全力でサポートいたしますー！』

「おう、頼むぜ！」

その後、ラミアにより必要な生命エネルギー量の計算やらなんやら、色々と準備があり数日が経過した。

この数日の間にも、修行は怠らず色々やっているが、やっぱりあの二人の事が気になって上手く修行に身が入らない。

それというのも、やると決めはしたが、やっぱり心のどこかでこのまま蘇生していいのかって気持ちがある。

ゲイン達の話では、遙か古代には死者蘇生を試みた事はあるらしいけど、成功した例は無いらしいし、何よりもその試み自体は神の領域を侵すとして随分忌諱されたらしい。

それを俺みたいな小僧が果たしてやっていいのかどうか……うー

ん、やっぱり非常に悩む……。

でもまあ、悩んだ所で答えは出ないだろう……答えが出るとしたら生き返った後、二人に直接聞くしか無いだろう……生き返ってよかったかどうかをさ。

「んじゃま、ユニゾンしてやるとすつか！」

『はい！』

「『ユニゾン・イン！』！」

さてと、ユニゾンしてみたが……何だか不思議な感じた。

自分の中に俺のとは違うエネルギーの塊が存在するってのは。

でもまあ、この状態なら何となくだけどいけそうな気がする。
確証は無いけど。

「おっし、そんじゃ始めるとするか……といっても、どうすりゃいいんだ？」

『周囲にある生命エネルギーの流れをアクセルのリンカーコアに集中させる。アクセルはそれを一つに収束する事に専念しろ。細かい制御は私とラミアが行う。』

『お任せ下さい、アクセル様』

「んじゃ、ジュエルシードの制御もラミアに任せていいのか？」

『ああ、それでいい、アクセルは収束のみに専念してくれ』

『はい、ジュエルシードの制御はお任せ下さい。暴走は確実に抑えます！』

「OK、そんじゃ、やるぞ！
魂^{ソウル}発動！！」

先ずは自分自身の魂^{ソウル}を発動し、生命エネルギーの流れを掴む。
これやらないと、まだ上手く魂^{ソウル}をコントロールできないから。

何れは魂^{ソウル}を発動させなくても、流れを掴める様にしないと。
この辺も要修行だ。

『アクセル様、そのまま魂^{ソウル}の流れを維持して下さい』
「了解だ！」

『アクセル、周囲の生命エネルギーの流れを集中させる』
「おうよ！」

ゲインがそう言った瞬間、俺の中に何か巨大な流れが入り込んできた。

す、すげえ、これが惑星が放つ生命エネルギーかよ！

人間の比じゃねえぞ！

こんなん制御出来るのかよ！

「くう！ かなりキツイぞ、こいつはあ！」

『気を緩めるな、アクセル！』

「わあつてるよ！」

『必要な生命エネルギー量到達まで、後八十パーセントです！』

「……まだそんなにか」

これは思った以上にキツイ！

入り込んで来る大きな流れに潰されそうだ！

だが、ここで負ける訳にはいかない！

何としても、成功させてみせる！

『アクセル、堪えろ！』

「わかつてる！」

『アクセル様、頑張ってください！』

「ああ、こんな事で負けてちゃ、二代目拳王の名が廃るってもんだ！」

『その意気だ、アクセル！』

とは言ったものの、正直な話滅茶苦茶キツイ！
体がバラバラに引き裂かれそうだ！

くう……まだ必要な量は収束しないのか！？
頼むから早くしてくれ！

一時間程経過したが、未だに必要な量に達していない。
ちくしょう、これ以上は体が持たない！

は、早く収束してくれ！
マジでヤバイんだってば！！

「まだか、まだなのか？！ もう、俺の体も限界に近いぞ！」
『後五パーセントです、アクセル様、耐えて下さい！』
「こ、こなくそおおー！」

気合を入れて耐えていたが、遂に俺の体が耐え切れなくなり始め
やがったのか、両腕と両足から血が吹き出て来た！
滅茶苦茶痛え、体が引き裂かれそうだ！

「ぐがつ！」

『アクセル様！』

『アクセルの肉体が高濃度生命エネルギーの負荷に耐えられなくなつて来たぞ。このままでは不味い！』

『い、一度中止すべきでは？！』

『だが……』

じよ、「冗談じゃないぜ、せつかくここまで来たつてのに中止なんてさせてたまるか！

滅茶苦茶痛いけど、根性で耐えてみせる！

それに、次にやつてもここまでいけるかどうかわかんないんだ！
このまま気合で乗り切るしかねえ！

「せつかくここまで来たんだ、耐えてみせるさ！」

『し、しかし！』

『これ以上は！』

「いいからやるんだ！」

『……わかった』

『……はい』

「悪いな、二人とも……」

『いいさ、私はアクセルを信じる』

『私もです、アクセル様』

「あんがとよ！」

ここまで来たら、もう意地でもやってやるさ！

俺だって伊達や酔狂で、二代目拳王を襲名した訳じねえんだ！

こんな時は……気合と根性だあ！

やってやるぜ!!

『……アクセル様、生命エネルギーの収束が必要な容量まで達しました!』

「おっしやあ!!」

『私とラミアでタイミングを図る、合図したら魂^{ソウル}を全開にして二人に向けて開放するんだ!』

「おう、任せろ!」

『では……』

……

……

……

『今だ、アクセル!』

「おう! 魂^{ソウル}、全開だあ!!!!」

『ジュエルシード魔力全開放、出力最大! 全魔力をアクセル様へ!!!!』

収束した生命エネルギーとジュエルシードの魔力が混ざり合うのを感じる!

この魂^{ソウル}を全て二人に向け解き放つ!

必ず成功させる!

いくぞお!!

「でりやあああ!!!!」

俺の中の魂^{ソウル}と、この場に満ちる膨大な生命エネルギーが一つになった!

収束した全ての力を、二人に向け解き放つ！

その瞬間遺跡を揺るがす衝撃と、眩い光りが発生！
俺はそのまま意識を失った……。

……。

……。

……う、うぐぐぐ……。

いててて……あ、あれから一体どうなったんだ？

せ、成功したのか？

二人は蘇生出来たのか？

『アクセル様！』

「あ、ああ、ラミアか……なんだユニゾン解けてるのか？」

『はい、最後の衝撃の際に……それよりもアクセル様のお体は！』

「ああ、体中が痛いけど、まあなんとかね……」

『あまりご無理をなさらないで下さい、本当に心配したのですから
「悪い、毎度毎度心配させてしまって……そっぴやゲインは？」』

『……大丈夫だ、問題なく機能している』

「そっか……んで、二人はどうなったんだ？」

『今確認いたします』

「頼むよ」

これだけの労力費やして失敗していたら、流石に凹むなあ……。手応えからして失敗している事は無いだろうけど……。どうなんだろう。

しかし、今後はやりたくないな、これ。

半端じゃなく体が痛いんだもんなあ……。当面の間は修行を休んで体の回復に努めた方がよさそうだ。

『確認したところ、心拍、脈拍、呼吸、全て微弱ではございますが、再開されています』

「と、いう事は？」

『はい、蘇生は成功したようです』

「そっか」

蘇生成功か……。。

頑張った甲斐があったなあ……。

ああ、そう思うとなんか気ぬけちゃったよ……。

ああ、駄目だ、もう力が入らないや……。

『アクセル様?!』

『アクセル?!』

「ごめん、何か安心したら気抜けちゃった……。暫く休むから……。後で、起こして……」

『……。畏まりました、今はお休みくださいませ』

『やれやれ、アクセルも無茶をするものだ』

『だが、人の為に命を掛ける覚悟が出来るのだ、流石は二代目といったところだろう』

『そうだな、アクセルの人を想う心は、先代以上かもしれない』

『ああ、きつと、アクセル様なら先代を超える事が出来るだろう』

『その時こそ、アクセルは真の拳王となるだろう』

『ああ』

こうして、二代目拳王アクセルにより、本来の運命を書き換えられた人物が現れた……。

これが後にどういった結果を招くのか、今はまだ誰にもわからない……。

第三話：母親（後書き）

今回の話は少々大きすぎたかもしれません。

しかし、ガイア仮説とアクセルの生命エネルギーを操作するという力などを考えた時に、今回の話を思いつきました。

ちなみに、今回の三話については、掲載したのとは別の流れの話があります……活動報告にでも残しておくべきでしょうか？

もしも読みたい方がいれば、活動報告にでも掲載しておきます。

後、ラミアの水着は、スーパーロボット大戦OGインスペクターのアニメのEDでラミアが着ていたのをイメージしています。

それでは！

第四話・家族（前書き）

9 / 6

加筆修正

第四話：家族

プレシアさんとアリシアちゃんの蘇生が完了し、それから三日が経過している。

未だに二人は目を覚ます気配は無い。

だが、呼吸などは徐々に安定して来ている。

近い内に目を覚ますだろう。

彼女らが目を覚ます前に幾つか決めておく事がある。

先ず第一に、彼女らをもう一人の娘である『フェイト』に会わせる事は現時点では出来ないという事。

ラミアに詳しく調査して貰った結果、どうやら現在フェイトという娘は管理局でも有名な『リンディ・ハラオウン』の養女となって引き取られているらしいのだ。

なので、もしも彼女に通信を送ったりすれば、管理局へプレシアさんとアリシアちゃんの事を報せるようなものなんだ。

そうになると非常に不味い。

何せ、プレシアさんの罪は、被疑者死亡という事で解決にはなっているけど、本人が生きていたなんて事がバレでもしたら確実に管理局は逮捕に来るだろう。

そうなつて来ると、蘇生を行った俺も無事じゃ済まない。

絶対難癖付けられるに決まってる。

そついった理由から、今の段階ではフェイトに会わせる事は出来ない。

まあ、どの道、プレシアさん自身も心の整理をする時間は必要だろうしさ。

それから次に、彼女らを俺の旅に同行させるという事。

これはある意味リハビリも兼ねているが、このまま彼女らを解放してどこぞに行かせてもいい結果には成らないだろうなあという予想がある為だ。

何せ蘇生した二人だからさ、下手に違法組織とかに捕まってみろ、絶対実験動物扱いにされる。

せつかく助けたのにそれじゃ、流石にねえ。

他にも色々細々した事を決める必要があるが、とりあえずはこの二つは絶対に守って貰わなきゃならない。

これも彼女ら自身の為ではあるしさ。

何れ機会があれば、フェイトに会う事も出来るだろう。

……何とか管理局と司法取引が出来るだけの交渉材料があればいいんだけど、今の時点じゃ俺にはそんなの無いしね。

それと、気になる事が一つ。

プレシアさん何だけど……確実に若返ってるようなんだ。

明らかに肌の皺やくすみ等、所謂お肌の大敵が消えている。

何故だ！

『恐らくは、多量の生命エネルギーを浴びた為と考えられます』

「あゝ細胞が活性化したとか、そんな落ちか？」

『多分……』

「の割に、アリシアちゃんプレシアさんに比べて変化が少ないな」

『こちらの少女には、リンカーコアが存在していません。それが影響したのでは無いかと。』

「ああ、そういう事か……ほんと、リンカーコアって意味不明な事が多いよなあ」

『確かにそうだな』

つか、プレシアさん……若返りすぎです！

どうみても二十歳位なんですけど……俺とそう変わらないじゃないか。

……何というか、世の女性達が聞いたら、それこそ地獄の大乱戦になりかねない！

やっぱりこの場所と蘇生の事については絶対に秘密だな。

あれからまた三日経過。

その間、俺も怪我の治療と体力の回復の為に修行は一時中断。

早く修行を再開したいけど、無理をすれば体が壊れてしまうのでここは我慢の子だ。

とはいえ、本当に何もしていないと筋力も落ちてしまうので、軽い筋トレはしているけど。

『アクセル様、プレシア・テストロッサが目を覚めました』

「お、マジか、直ぐ行くよ」

遂に目を覚ましたか。

となれば、色々と説明しなきゃならない。

多分自分が蘇生した自覚もないだろうしなあ。

普通ならあり得ないし……自分でも思うがなんという超展開、まるで漫画の世界だ。

まあ、魔法そのものが、魔法文化の無い世界からすれば漫画みないなもんならうけど。

とと、そんな事考えてる場合じゃない、早く行かないと。

《祭壇》

祭壇についたし、ご挨拶しておきますか。

こついう事は最初が肝心だからな！

「ラミア、お待たせ」

『アクセル様、お待ちしておりました』

「プレシアさんは？」

『こちらです』

少し奥に行った所で、プレシアさんは壁に背を預けていた。少し虚ろな感じがするけど……とりあえず話しかけてみるか。

「プレシア・テストロッサさん、俺の声、聞こえますか？」

「……ええ」

「よかった、耳は問題ないか。一応目も大丈夫です?」

「……見えて……いるわ」

「そっすか、んじゃま自己紹介を。俺はアクセル・ターナー、二代目拳王を継いだ者です。」

「……拳王」

「そっす」

ありやりや、まだ意識がはっきりしていないようだ。
無理もないか、数年は死んでたんだし。

この辺は時間を掛けていくしかないか。
焦っても、余計に悪い結果になりそうだし、ゆっくりと回復を待
つとしようかね。

「……ア、アリシア……は……何処……」

「ああ、アリシアちゃんなら、まだ寝てるよ」

「……寝てる……」

「そそそ、プレシアさんと同じで蘇生したんだ。暫くすれば目も覚
めると思うよ。」

「……アリシア……が……蘇生……本当なの!!」

「おわっち!」

アリシアちゃんの事を聞いた途端、目を覚ましやがった!
マジでびっくりしたぞ!

げに恐ろしきは、親の狂おしいまでの愛情かつ!
つか、プレシアさん、目覚めた直後なのにえらい剣幕だ!

「お、落ち着けて!」

「アリシアは、アリシアは無事なの?! ねえ、答えて!!」

「無事だつてば！ 呼吸も心拍も脈拍もはつきりしてる、その内容を覚ますつてば！」

「……ほ、本当に」

「ああ、あんたと同じでしつかり蘇生出来てるよ」

「私と……同じ……あ……」

「やつと思ひ出したか」

漸く今の自分の置かれた状況が理解出来たようだ。

んじゃま、簡単に説明しておきますか。

混乱されてもややこしい事になりそうだし。

さっきの剣幕を見る限りじゃ、多分大丈夫だとは思うけど。

んで、プレシアさんに二人の遺体を見つけた状況や、その後に俺が二人を蘇生させた事などを説明して聞かせた。

説明の最中にプレシアさんの意識もはつきりしてきたようで、東食に比べればかなり受け答えがはつきりして来た。

やっぱり研究者だけあって、頭の回転は頗る速い。

まあ、これだけ意識がはつきりしてれば問題は無いだろう。

「という訳なんですよ」

「……何だか信じられないわ」

「ま、そうでしょうね。けど、二人が蘇生しているのは間違いない現実ですから。」

「……そうね、感謝しているわ」

「それとですね、何でかよくわからないんですけど……プレシアさん若返ってますよ」

「……へ？」

うむむ、プレシアさんの間の抜けた顔……結構可愛いじゃねえか！
……いかにいかに、人妻相手に何を考えてるんだ、俺は！

というか、こういう事を考えていると大概の場合、ラミアに怒られる危険性が高い。

あんまり考えないようにしよう。

「ほら、これで自分の顔見てみるといいよ」

「……二十歳の頃の顔だわ」

「理由はよくわからないけど、恐らくは蘇生の際の副次効果的なものじゃないかなと」

「……何だかデタラメね」

「俺もそう思いますよ」

さてと、現状説明はこれ位にしておいて、問題となるフェイト関係の事を説明しておきますか。

これに関しては色々思うところはあるんだが、今の段階ではしょうがないんだよね。

何れ会えるように、何か考えなきゃいけないんだけど……正直、俺の頭じゃいい案が思いつかない。
元々細かい事考えるの苦手だし。

まあ、その辺は追々皆で考えていけばいいだろう。
俺一人で考えるよりは、遥かにいい案が出るだろうし。

「でだ、プレシアさん、あんたのもう一人の娘の事だけど」

「……フェイト……」

「一応所在とかは確認取れているんだが……悪いけど今すぐには会わせる事は出来ないぞ」

「……え？」

「何せ管理局の提督に養女として引き取られてるからさ。下手にそんなところ行ってみなよ、あんた逮捕されるかもしれない。そうなつて来るとアリシアちゃんの事だってあるし、俺自身も色々面倒な事になりかねない。何せ蘇生なんてやらかしたんだからさ。」

「……確かに……そうね……」

「それにあんた自身も心の整理の時間は必要だろう。まあ永久に会えない訳じゃない、ちゃんと心の整理を着けてから、会う為の方法を一緒に考えましょう。」

「……わかったわ……どの道、もう会う事は出来なかった身ですもの、あなたにお任せするわ」

「あんがとさん」

案外とすんなり納得してくれたが……色々と思うところもあんだろうなあ。

まあ、とりあえずは、一番厄介そうな部分が解決した事だし後はじっくりやってけいいか。

出来れば早めに会わせてあげたいけど、その為にはこの人の犯罪歴を消去する必要がある。

それも合法的な手段でだ。

となると……管理局と司法取引でも持ち掛けるしかないか？

うむむ、管理局相手に司法取引となると、相当なネタを用意しなきゃならない。

いつその事、ラミアに頼んで管理局の粗探しでもして貰うか？
一部の上層部辺りなら、結構黒い事やってそうだし。

その上で動かぬ証拠と共に、司法取引を持ち掛ければ……何とかなんねえかなあ。

……んでも、そんな単純な方法じゃ流石に無理だよなあ。

管理局だってバカじゃないだろうし、幾等なんでもそんなこつちや司法取引に応じるかどうかはわかんねえ。

となると……うむむ……駄目だ、脳みそが限界に……。

やっぱプレシアさんも交えて、もちつとしっかり考えよう。
行き当たりばったりでやっても、いい結果には成らないからな。

『アクセル様、アリシア・テストロッサが目を覚ましました』

「ア、アリシアが……！」

「わかった、今行くよ」

「アリシア！」

「ちょ！ まだ動いちゃ駄目だってば！」

「は、離して！」

やれやれ、ほんと、娘の事になると人が変わるな、プレシアさんは。
しょうがない人だ、仕方ないから運んでやりますか。

あ、どっころしょつと！

……結構軽いんだな、プレシアさんって。

「きゃ！」

「運ぶだけだから我慢してくれ」

「え、ええ……」

やっぱりあれかな、若返った影響で体重とかも減ってるのかな？
プレシアさんの年齢からすると、やけに軽い気がするが……とど、
今はそんな事考えてる場合じゃない。

早くアリシアの様子見に行かなきゃ。

……プレシアさんが暴走しそうだけど。

……。

……。

「ラミア、意識はどうだ？」

『まだ少し虚ろな感じですね』

「まあ、しょうがないか」

アリシアちゃんて改めて見ると……滅茶苦茶可愛い。

これじゃ、プレシアさんが入れ込むのも無理は無い。

しかし、確かアリシアちゃんて五歳児のはずだが……にしてはや
けに小さい、大体三歳児位か？

やはり生命エネルギーの影響なのか、プレシアさんと同様に若返
りが起きているんだろうなあ。

……やっぱり蘇生するっていうのは、かなり危ない橋を渡る行為
だったようだ。

今後はもう少し考えて行動しないと駄目だな。

「……う、うう……」
「お、起きたか」

目を覚ましたけど、まだ寝ぼけている感じた。
無理も無い、数十年死んでいたんだし。

肉体の方もそうだけど、記憶とかってどうなんだろうか。
数十年死んでいた事を考えると、記憶とか飛んでるんじゃないだろうか？

プレシアさんが彼女の肉体を保全していたとはいえ、その辺りは
どうなんだろうか……。

これで記憶飛んでるとかになると、プレシアさんは大分凹むだろうからなあ。

しかし、三歳児になったアリシアちゃんだが……何この可愛い
生物。

頻りに手を動かしてるんだが……滅茶苦茶可愛い。

この可愛さじゃプレシアさんが入れ込むのもよくわかるわ。
姉がこれだと、妹のフェイトもさぞ可愛いんだろうねえ。

と、そんな事よりも、アリシアちゃんの状態を確認しなきゃ。
記憶があるかどうかも含めてな。

「アリシアちゃん、目見えるか？」
「……お兄ちゃん……だれ？」
「お兄ちゃんはアクセルってんだ、よろしくな」
「うん……ママは……？」

「ママならほら、ここに居るぞ」

「ア、アリシア……ああ、良かった、良かった！」

「ママあ……アリシア、お腹すいたの……」

「ああ、アリシア、何て可愛いの！」

「あゝプレシアさん、愛でるのは後にとりあえず診察させてくれ」

「あ、ああ、ごめんなさい、ついアリシアが可愛いものだから」

「そこは激しく同意するが、まあ後にしてくれ。そんじゃラミア、診察頼むよ。」

『畏まりました』

肉体的な診察をラミアにして貰ったところ、何処も異常は無いと確認が取れた。

記憶の方もどうやら問題が無いようだ。

先ほどプレシアさんをちゃんと母親だと認識していたし、言語もはつきりしている。

自分の事もある程度は覚えているようだが、自分が死んでいた事はよくわかっていないようだった。

まあ、自分が死んでいたなんて自覚を持てっつても、この年の子には無理な話だろう。

なのでアリシアちゃんには、アリシアちゃん自身が死んでいたという事は黙っておく事にした。

下手に伝えてショックを受けられたら、それはそれで面倒だし。態々辛い思いをさせる必要も無いだろう。

その後、幾つかの確認の後、皆でメシを食う事に。
飯の合間に各自自己紹介をしておいた……その際、両名共に名前
で呼ぶ事を許可された。

つか、アリシアちゃん、目が覚めたばかりだというのによく食べる事食べる事。

猛烈な勢いでパクついているが……よく食べこぼすんだこれが。

「美味いか、アリシア」

「うん！」

「そつか、ちゃんとよく噛んで食べるよ」

「はぁーい！」

「ああ、アリシア、なんて可愛いのかしら」

「んとに親ばかだな、プレシアも」

「しょうがないじゃない、可愛いんだもの」

「やれやれ……」

アリシアの食事風景を拝みながら、プレシアは喜びに打ち震えている。

まあ、もう二度と拝む事が出来なかった娘の笑顔だからねえ……
喜びも一押しだろう。

食事が終わった後、アリシアは直ぐに寝てしまった。
まあ、三歳児なんて寝るのと食べるのが仕事みたいなもんだしな。

アリシアの寝顔を見て、プレシアは更に身悶えている。

……やれやれ、本当に娘バカだな。

「プレシア、そろそろ戻って来いってば」

「あ、ああ、ごめんなさい、つい……」

「やれやれ、とりあえず今後の事を決めておこうぜ。アリシアの事だつてあんだからさ。」

「そ、そうね、わかったわ」

プレシアと話し合いの結果、プレシアとアリシアが俺達の旅に同行するという事で決定。

当初は難色を示すかとも思っていたけど、割とすんなり納得してくれた。

今のプレシアは犯罪歴がある以上、下手に管理世界には行けないかと言って、管理外世界で暮すのも難しい。

という訳で、俺達の旅に同行するという事で決まった。

これについてはプレシア自身からの要望もあり、割とすんなり決まった。

旅の同行者が増えるのは、俺としても楽しいから大歓迎だ。

「それと、これが最重要だけどプレシアの犯罪歴を何とかする方法だが」

「……無理はしなくていいわ、私がした事は裁かれて当然の事だもの」

「そうは言っけど、アリシアの事もあるし……流石にアリシアを親なしにする訳にはいかないだろ」

「そう、だけど……」

「とは言っても、なかなかいい案が無いんだよねえ……やっぱ可能

性があるとしたら司法取引を持ち掛ける事だろうけど……それには結構なネタを用意しなきゃなんないし」

「……そうね」

「うむむ……どうしたもんかなあ……」

プレシアの罪を帳消しに出来るだけの、でかいネタとなると早々転がってるもんじゃないなあ。

……やっぱラミアに粗探しをして貰うしかないか？

でも、あんまり危ない橋は渡りたくないし……むう……マジで困ったぞ。

勿論このまま二人を見捨てるなんて選択肢は存在しない以上、なんとかしなきゃらないんだが……ぐう……思いつかない。

『アクセル様』

「ん？」

『やはり、当初の予定通りに違法研究施設等を潰し、功績を重ねるのがよろしいのでは？』

「あゝそうだなあ……」

違法研究施設やそれに類する犯罪組織を潰しまくって、恩赦でも取得するべきかな？

それに加えて、ロストログアでも見つけて封印して渡せば……なんとかならないかなあ。

でもなあ、本局相手に司法取引を持ち掛けるのは不味いよなあ。

絶対にプレシアや俺達を確保しようとするだろうし……ぐう……

マジで八方塞がりだぞ。

駄目だ、幾等考えてもいい案が出て来ない。

もう少し時間を掛けてじっくりと対策を練る方が良さそうだ。

「功績を重ねるのはいい案だと思うけど……それだけだとまだ不安だなぁ。やっぱプレシア達の事はもっとじっくりと考えるでしょう。」

『畏まりました』

「……すまないわね、面倒を掛けるわ」

「乗りかかった船だしね、ここで見捨てる訳にはいかないよ」

「ありがとう……」

「どういたしまして」

予定としては、この世界は半年いる予定だったけど、先ずは二人の回復を優先すべきだな。

二人の体調なんかが完全に回復次第、次の世界に移動する事にしよう。

とはいえ、アリシアがいるから、あまり過酷な世界は不味いだらう。

うーん、そうなるとやっぱ無人世界がいいかなあ？

なるべく穏やかな世界がいいんだろうけど、それだと修行にならないってのもあるし……これまた悩む。

まあ、その辺りはゲイン達とも話し合って、ちゃんと決める事にしよう。

あ、そうだ、そういやアリシアの服を手に入れないと。

何せアリシア、素っ裸だからなぁ、今のままじゃ風邪引いてしまふよ。

明日にでもサイズ測ってラミアに買って来て貰おう。

見た目についてはプレシアに聞けばいいだろう。

二人が目覚ましてから既に三ヶ月が経過。

二人も順調に回復していて、既に日常生活は支障が無い状態まで回復している。

どうやら、あの場に満ちていた生命エネルギーのおかげで回復も早まっているようだ。

これなら、予定通りに次の世界へ行けるだろう。

この三ヶ月の間に、二人とはかなり仲良くなれた。

つかもつ、あれだね、家族っぽい感じ……プレシアが母親で俺が長男でアリシアが長女ってな感じだろう。

その事をプレシアに言ったら、肉体年齢的には離れていないのに、息子ってのはどうなのよって言われてしまった。

流石に俺がプレシアの旦那になる訳にはいかんでしょ……まあプレシアは美人だから俺としては嬉しい限りだけど……なんて事を言っていたらゲインにまた呆れられてしまった。

『アクセルは相変わらずだな』

「何が？」

『わからんのだなあ、お前は……』

「???」

「さらっと口説いてるわよ、貴方」

「そんなつもりないってば」

「あんまりそう言う事を言っていると、本気にしちゃうわよ」

「……気をつけます」

「ふふ、そうしなさい」

別にそんなつもりは無いんだけどねえ。

それ程おかしい事を言ってるんだろうか……わからんぞなもし。

まあ、そんなこんなで、二人とは仲良くやってる。

ラミアも結構プレシアとよく話している事がある。

女性同士だと、やっぱり通じる物があるのかな。

漢の俺にはわからんけど。

二人とはそんな感じで過ごしているが、肝心の修行の方とは言え
ば、水中での素潜りは結構な深さまで到達できるようになった。

しかし、この世界、水中にいる魚が滅茶苦茶凶暴なんだ。

所謂甲冑魚みたいなのがいて、俺を見つけると確実に襲って来る。
倒せる事は倒せるんだが、もう硬いのなんのって。

しかも、食っても美味くないと来ているもんだからもうね……。
中には非常に美味しい魚もいたんだけどさ。

アリシアは当初は魚が嫌いだったようで、ほんと、最初の頃は結構
大変だったけど今では克服している。

勿論、魚だけでは栄養が偏るから、時折肉や野菜もちゃんと食べ
させている。

相も変わらず食べる時は、リスのように頬をパンパンに膨らませて食べているので、その度にプレシアが悶えているんだけどね。

まあ、可愛いのはわかるんだけど、毎回身悶えなくともいいでしょうに。

それと、アリシアはやたらと俺に懐いているようで、何をするにも俺の真似をしようとする。

ソウルアーツ
魂流の型の修行をしている際も、隣でよく同じような事をしていく。

まあ、よく大振りになりすぎて、コケているけど。

このまま行くと、将来格闘大好き少女になってしまうような気がする…… 女の子的にそれは不味くないだろうかと少し心配な兄心なのだ。

ちなみにだけど、プレシアは元々魔導師としても非常に優秀で、魔力値もSS+という化け物クラスの魔力値らしい。

しかもだ、術式の変換等についても非常に詳しく、座学の際に色々と教わっている。

俺は術式の変換が苦手なので、効率的な術式変換の方法については非常に助かっている。

今ではラミアに加えプレシアが座額の教師となっている。

おかげで最近では探查魔法等で術式を古代ベルカ式に変換するのも大分慣れて来た。

今までは探查魔法は、単体でしか発動出来なかったけど、複数の探查魔法を一度に発動出来るようにすらなっている。

いやはや、本当に二人には頭が下がる。

この調子で座額を続けられ、ミッド式の基礎魔法は全て使えるようになりそうだ。

「アクセル、ちょっといいかしら」

「ん？ どつたの？」

「ほら、前に言ってたじゃない、私の罪の帳消しの為の方法を考えているって」

「ああ、そうだよなあ、でも未だにいい案が浮かばないんだよ」
「それなんだけど、こんな案はどうかしら」

そういつてプレシアが提案してくれたのは、色んな世界を回り人材を集め、俺を中心とした部隊を設立してはどうかというものだ。昔から戦力不足になっていた地上本部なら、恐らく食いつくだろうという話。

確かにそうなる可能性はあるけど、行き成り部隊ってのは難しくないだろうか。

幾等俺が聖王教会に認められている二代目拳王とはいえ、実績なんかは存在しない訳だし。

てな事を言ったら、プレシアから更なる案が出て来たんだが……その内容がまた黒いのなんのって。

先ず、現在の地上本部の総大将であるレジラス・ゲイズだが……どうも裏じゃ結構黒い事をやっているらしい。

その黒い事ってのが、広域次元犯罪者である『ジェイル・スカリエッティ』と何やら取引をしているという事。

確かに地上本部の総大将が広域次元犯罪者と取引しているなんて知れたら、それこそ大スキャンダルだ。

司法取引を持ちかけるには十分なネタだろうけど……裏を取るのも大変そうな気がするなあ。

と、考えていたら、プレシアはどうやらジェイル・スカリエッティの事を知っているらしい。

というのも、もう一人の娘であるフェイトを造り出した技術、『プロジェクトF・A・T・E』の基礎を造り上げたのがジェイル・スカリエッティらしい。

何故基礎だけかと言えば、ジェイル・スカリエッティは途中から『戦闘機人』や『人造魔導師計画』に路線を変更した。

その後、『プロジェクトF・A・T・E』をプレシアが引き継ぎ研究を続行、最終的にフェイトを造り出すという成果を残すに至った。

なる程ねえ、フェイト誕生にはそんな裏があったのか。

んで、肝心のジェイル・スカリエッティとプレシアの接点だが、研究の引継ぎの際に一度だけ会った事があるらしい。

狂気のようなもので取り繕ってはいるが、その奥底には自分自身を認めて貰いたいという思いが見え隠れしていたというのがプレシアの印象だそうだ。

ふむふむ……ならばその辺りを軸に攻めれば……ジェイル・スカリエッティを俺達側に引き込む事も出来るんじゃないだろうか？

もしそれが可能になれば……オーバーランカー二人に超絶の頭脳を持つ研究者二人……んでもって古代ベルカ式魔法の使い手を一気に手に入れる事が出来る。

多分これだけの戦力なら、レジアス中將は食いついて来るだろう。

その際、プレシアとジェイル・スカリエッティの犯罪歴を取っ払って貰えばいけんじゃね？

何とも穴がありそうで怖いけど、試してみる価値はありそうだな。となれば、今後はジェイル・スカリエッティの搜索をして貰うのがいいかもしれないな。

「そんじゃ、今後はジェイル・スカリエッティの搜索をすべきかな」「古い物だけど、ジェイル・スカリエッティの端末番号を一つ持っているわ……もう使われてはいないと思うけど」

ふむ……試しに呼びかけてみるか。

繋がったら繋がったでめっけもんだし、駄目なら駄目で地道に探せばいいだろう。

最悪地上本部のデータ覗き見してしまえばいいし。これまた危ない橋ではあるが……今更だしなあ。

「……よし、物は試しだ、呼びかけてみよう」

「繋がったらどうするつもり？」

「とりあえず、会っ約束を取り付けたいかな」

「会ってどうするの？」

「うーん、可能なら奴を俺達側に引き込む」

「……あれを、ねえ……」

「まあ、あくまでも可能ならっただけさ」

「いいわ、それじゃやってみましょう」

「頼むよ」

ラムアを連れて来て事情を話した後、プレシアが自身のデバイスを操作し、どこぞに通信を送ると……一分後位に相手に繋がった。

モニタに表示されたのは、見た目は二十代後半か三十代前半位の男だった。

何というか……にやけ顔しているなあ……。
一発殴りたくなって来る顔だ。

「随分と古い端末番号を知っていると思えば……もしかやプレシア女史かね？」

「ええ、そうよ。久しぶりね、ジェイル・スカリエッティ。」

うは、こいつがジェイル・スカリエッティか。

何というか、根暗そうな顔だな。

もつとこう、覇気のある顔をして貰いたいもんだぜ。

如何にもインドア派的な顔じゃねえか。

「風の噂では死んだと聞かされていたが、生きていたのかね」

「いいえ、一度死んでいるわ」

「……？」

「ここにいるアクセルが蘇生してくれたのよ、娘共々ね」

「蘇生だって？」

ちよ、プレシアさん、行き成りそれを言うのは不味いんじゃないでしょうか？

ほら、何か俺の事を嘗め回すような目で見てるんですけど！

ぶっちゃけ、キモイ！

男にそんな目で見られたくないわっ！

「彼女はこう言っているが、本当かね？」

「……ああ、マジだよ」

「……ククク……ハハハハハハ！ これは凄い！ かのアルハザードですら成し得なかった死者蘇生を君のような若者が成したというのか！……！」

あちやゝやっぱり何か変なスイッチ入ったっぽいぞ。
正しくマッドサイエンティスト的な奴だな。

「ククク……それだけの事を成すんだ、君も普通の人間では無いだろう？」

「ああ、自己紹介してなかったな、俺は二代目拳王アクセル・ターナーだ」

「拳王だつて？ あのベル力で最も謎の多い王の？」

「そうだよ、その二代目で直系の子孫だ」

「……ハハハ、クハハハハハハハハッ！！ あの拳王の血筋が生きていたのか！！ ハハハハハハハハ！！！」

駄目だこりゃ、テンションが下がるまで待たないと、多分こつちの話聞いてくれそうもないぞ。

面白そうな奴ではあんだけど、少しイッてる感じだなあ。

本当の天才つてのは、大概こんなもんなのかね。

元が一般市民の俺にはよくわかんねえや。

「あゝそろそろ話聞いてくれない？」

「……ククク……ああ、すまないね、つい嬉しさの余りね。それで態々私に通信して来たのは、どういった理由かね？」

「あのさ、出来ればあんたと直接会いたいんだよ。ああ、勿論、場所はその場で指定して貰って構わないし。」

「……私と？」

「そうそう」

「……ククク、私が広域次元犯罪者と知っていていてかね？」

「勿論知ってるよ。レジアス中将と繋がりがある事もね。」

「ほう……それはそれは……」

レジアス中将とこいつが繋がっている理由としては、恐らく地上本部の戦力増強じゃないかと思う。

何せレジアス中将って、地上の平和の為なら親すら殺すとまで言われている人だからなあ。

ぶっちゃけ、多少の違法なら余裕ぶつちぎってやつちまうだろう。まあ、それがいい事とは言えないけど、そうしなければならぬ程に地上の平和ってのはヤバイ状況にある。

現にニュースじゃ毎日のように、魔導師崩れによる事件が報道されていたし、魔法関係の事故なんかも後を絶たない。

んで、それらを解決する為に陸士の人達は頑張っているみたいだが……圧倒的に人数が足りないらしく後手に回っているんだそう。

結構その辺りは、ミッドじゃ有名だからなあ。

実際俺も小さい頃に、魔法関係が原因の火災事故に巻き込まれているし。

「あんと会いたい色々理由はあるけど、その辺りは実際に会ってから話をさせて貰いたい」

「ククク……君はなかなか面白いね……」

「あんた程じゃないさ」

「ハハハ！ いいだろう、会おうじゃないか！ 若き拳王よー！」

「どうも、んじゃ、プレシアのデバイス宛に日時と場所の指定を送ってくれ」

「いいだろう、後ほど贈らせて貰うよ」

「ああ、それと、会って行き成りズドンッってのは無しだぜ」

「わかってるさ、私も君に興味があるからね」

「そいつはどうも、んじゃ、指定の方は頼むぜ」

「ああ、それでは」

通信が切れると同時に、辺りは静かになった。

やれやれ、予想以上にとんでもない奴みたいだ。

流石は広域次元犯罪者と認定されるだけある、いい具合にイッちゃってるっぽい。

まあでも、面白そうな奴ってのは間違いないし、こちらに引き込めれば確実に役立ちそうだ。

んじゃま、奴に会うまでにどうやって引き込むか考えないといけないんだが……どうしょ。

ぶっちゃけ、あんまり細かい事考えてないんだよねえ。

「それで、どうやってあれを引き込むのかしら？」

「引き込む手段を考える前に、奴が今現在何をしているのかの詳細が知りたいんだよなあ」

「そうねえ……確か戦闘機人や人造魔導師計画に関わっているはずよ」

「戦闘機人ねえ……それってどういうものなんだ？」

「簡単に言えば、体の内部を機械に置き換えるのよ。それにより、通常の人間よりも強力な力を持つ個体を誕生させるって方法ね。」

「ふゝん」

「人造魔導師計画は、産まれた瞬間から高い魔力値や魔力資質を持つ個体を造り出す為の技術ね。『プロジェクトF・A・T・E』もその一環ですもの。」

「なるほど……人権屋が聞いたら血相変えそうな技術だね」
「そうでしょうね」

うーん、それだけ大規模な計画だと、あいつ一人で出来るとは思えないなあ。

レジアス中将与繋がりがあっても、資金的な問題なんかはそう簡単に解決出来ないだろう。

地上本部の財政事情は、万年火の車だと言う話は有名だ。
よく寄付を募っていたりするのを覚えている。

だとすれば、他に資金源なり強力なバックがいるのは間違いないだろう。

その辺りも含めて調べて貰う方がよさそうだ。

「ラミア、ジェイル・スカリエッティの背後にいる奴を調べる事は出来る？」

『はい、可能かと』

「んじゃ頼むわ……多分レジアス中將よりも大物がいると思うんだ」

「その可能性は確かに高いわね」

「一応注意だけは怠らないでくれ、何が出てくるかわからないし」

『畏まりました、お任せください』

しかし、毎度思うけど、ラミアって本当に優秀だよなあ。

出来ない事なんてないんじゃないかと思うほどだもん。

料理も出来るわ、諜報活動も出来るわ、戦闘も出来るわで……実際俺より遥かに強いし。

今でもラミアの攻撃に耐える訓練してっけど、直撃するとマジでヤバイ。

最初の頃は本気で死に掛けたからなあ……。
今じゃ懐かしい思い出だ。

「んじゃ、奴から連絡があるまでは、今まで通りに過ごすかなあ。
つか、プレシアも運動した方がいいんじゃないか？」

「運動……苦手なのよ……」

「……太るぞ」

「うつ……言わないで頂戴……私結構太り易い体質なのよ……」

「なら苦手でも運動しとけて。別に俺と同じ事じゃなくても、軽くランニングするなりすればいいし。」

「……貴方と同じ事なんて、普通出来ないわよ」

「そうか？」

「……貴方、自分がどれだけ非常識な事してるかわかってないでしょ？」

「別にそうでも無いと思うんだけどなあ」

「ともかく、一応私も運動はしておくわ。リハビリも兼ねてね。」

「そうしとくといひさ」

さてさて、とりあえずジェル・スカリエッティと渡りは付いたから、後は奴からの連絡を待つだけだ。

上手く奴を引き込む事が出来れば、プレシアと奴の罪状取り消しの為の司法取引材料を集めて、レジアス中将に直談判だ。

場合によっては、本局やら聖王教会が煩そうだから、そっち方面の情報も集めるべきかな。

俺としては、別段本局にも聖王教会にも悪い感情は無いんだが、同時に興味も無いんだよね。

まあ、その辺は追々考えていくとして、とりあえず今後の為にも

より地力のアップを図りますかね。

せめて修行中の間に、オーバースにはならなきゃな。

うっし、頑張るぞ!!

第五話：友達（前書き）

09 / 04

擬音削除

9 / 6

加筆修正

第五話：友達

あれから一週間ほどして、ジェイル・スカリエッティから連絡が来た。

指定された場所は、ミッドからかなり離れた管理外世界。

広域次元犯罪者なんだから早々バレるような場所に拠点を構える訳が無いから、当然と言えるだろう。

そんな奴だったら、広域次元犯罪なんて出来るはずもないだろうし。

それと、ラミアから奴のバックについての調査結果が出たが……結果を聞いた時は俺もプレシアもマジで驚いた。

何せあの存在すら定かでは無い、ある意味都市伝説化している『最高評議会』がバックに付いているんだもん。

最高評議会ってあれだ、管理局の創設者達のはず。

それがバックに付いているとは……奴は相当な大物って事だろう。

だとすると、恐らく管理局でも奴の逮捕はほぼ無理と考えた方がいいだろう。

最高評議会がバックに付いているんだ、奴に関する報告なんかは握りつぶされているのが落ちだ。

てか、よくこんな情報掴めたなあと思い、聞いてみた所……ジェイル・スカリエッティの端末情報からちよっぱねて来たらしい。

あいつのラボなら、セキュリティとか半端じゃないだろうに、そこからさも当然のようにちよっぱねて来るとは……ラミアって、本気になれば一人で管理局潰せるんじゃないだろうか、最近真剣に思

うようになつて来た。

そんな訳で、明日、いよいよ奴と対面する事に。

何とかして奴を引き込みたいところなんだが……うむむ……何か取引材料でもあればいいんだが……。

というか、何故奴は広域次元犯罪なんてやってんだらう。

奴ほどの能力なら、幾等でも活躍出来る場所はあるだらうに。

例えば医療現場とかデバイスマイスターとか……他にも学者や研究者として従事する事も出来るだらう。

それなのに何故態々犯罪者なんてやってんだらう……何か理由でもあんのか？

もしかして、最高評議会がバックに付いている事が原因なんだろうか？

うーん、わからないなあ……それがわかれば突破口になりそうな気がするんだけど……。

『アクセル、何を悩んでいる』

『ああ、ジェイル・スカリエッティが何故犯罪者なんてやってんのかなあってさ』

『ふむ……確かに奴ほどの頭脳ならば活躍出来る場所は幾等でもあるな』

『だろー、なのに態々犯罪者やってるってのがどうも解せなくて』

『いつその事、本人に問い質したらどうだ？』

『……直球勝負で行く訳か……それもいいかも……』

あんま悩んでいてもしょうがないし、ここは漢らしく直球勝負で行こう。

案外話してくれるかもしれないし。

奴を引き込む事が出来れば、色々やりやすくなるのは間違いない。

最高評議会がバックに付いているような奴だから、管理局の粗も色々知っているだろうし。

……… ipp その事あれかな、俺達で部隊作ったら管理局の大掃除でもするか？

将官クラスになると、結構黒い噂があつたりする奴多いし。

テレビでも報道されてるもんなあ。

財界との癒着とか、マフィアとの繋がりとか。

まあ、こんなのはどんな組織、会社でも同じ事だろうけどさ。大きな組織や会社には黒い噂が付き纏うのが常だ。

それにだ、そういった噂があるってのはそれなりに下地があるって事だろう。

何も無い所から、そんな噂が立つ事はあんまりないだろうし。

とりあえず、奴に関しては出たとこ勝負で行くしかないだろう。後は野となれ山となれってな。

そこで次の日になり、皆でジェイル・スカリエッティに指定された管理外世界へ向かう事に。

指定された管理外世界は、砂漠だらけの世界でほとんど生き物と言えるものは存在しない世界。

ただ、砂の中に巨大なミミズみたいなのがいるらしい。それもあり凶暴な奴らしく、そいつのテリトリーには入らないようにと注意書きがされていた。

そんなに凶暴なら、修行のいい相手になるかもしれないなあ。いかんいかん……最近俺も修行の事ばかり考えるようになって来ている……少し自重しないとバトルジャンキーとかって言われかねないぞ……。

それはそうと、ジェイル・スカリエッティの使いが迎えに来てくれる筈なんだが……どうなってんだ？

指定された場所に來たのに、誰もいないぞ？

「おかしいな、誰もいないぞ」

「そうね」

「ママあゝ暑いゝ……」

「ごめんね、アリシア、もう少し我慢して頂戴」

「奴のアジトに着いたら、冷たい物でも飲ませて貰おう、ぶっちゃけ俺でもきついぜ、この暑さは……」

そうなんだよ、砂漠っただけあって無茶苦茶暑いんだ、ここ……。一応場所が場所だけに、各自外套を羽織ってはいるんだけど……。それでもかなりキツイ……。

なんというか、砂漠特有のジリジリとした暑さなんだが、これがまたかなりキツイ……。

正直な話、俺でもキツイからなあ……三歳児のアリシアには酷過ぎるぜ……。

「プレシア、奴に呼びかけた方がいいんじゃないか？」

「そうね、そうするわ……」

プレシアが通信をしようとした瞬間、ジェイル・スカリエッティから通信が入った。

何でも使いにやった者が、例のミミズのテリトリーに誤って侵入してしまい戦闘になっていると。

んで、これまた不味い事に、使いに寄越した奴の武装はまだ完全じゃないようで、このまま戦闘を続けると不味いらしい。

その為、俺たちに救援を頼みたいという事らしい。

「わあった、とりあえず向かうわ」

『すまないね、手間を掛けるよ』

「一つ貸しだぜ」

『ああ、わかっているさ』

「んじゃ、いくとしますか。プレシアはまだ戦闘は無理だろうから、後方にいてくれ。」

「ええ、わかったわ」

よもやマジで戦う事になるとはねえ。

でもまあ、丁度いいか……最近あの世界の魚じゃ修行相手としては少し不足気味だったし。

やっぱり常に刺激がないと、修行もだれちまうからな。

うつし、気合入れていくぜ!!

現場についてみると、金髪の女性が一人逃げ回っている。

あれがジェイル・スカリエッティの奴が使いに寄越した人か。

しっかし……なんつー格好してんだよ。

ほとんど、体のライン見えてるじゃねえか……全く、何考えてんのさ!

て、んな事考えてる場合じゃねえっての!

早く助けないと!

「とりあえず、助けるとしますか。ゲイン、武装形態!!」

『了解!』

俺の掛け声と共に、ゲインがリストバンドからガントレットとブ
ーツに変形。

やっばこの状態になると気が引き締まるぜ!

「うつし、んじゃ、行つて来るぜ」

「ええ、気をつけて」

「お兄ちゃん、がんばって!」

「おうよ!」

まいったわね、まさか奴らのテリトリーがここまで広がっているなんて……ドジったわ。

トーレならまだしも、純粹な戦闘型じゃない私じゃこいつらの相手はキツイわね。

ああもう、今日はドクターのお客様が来る大事な日なのに！
やっぱりトーレに行って貰うんだったわ！

「ギョオオオオ！」

「しまっ！」

「おらあ！ 『青龍鱗』 ！！！」

その時、誰かが飛び込んで来たっ！

同時に私を狙っていた奴に向けて魔法を使用した。

「ギョオオオオオ！！！」

飛び込んで来た相手が使った魔法により、一体が断末魔の叫びを上げて沈んだ……。

うそでしょ、魔法一発で倒すなんて……。

冗談じゃないわよ、そんな奴を今相手になんて出来ないわ？！

ああん、もう、どうして今日はこんなに運が悪いのよ！

「よう、ジェイル・スカリエッティに頼まれてな、助けに来たぜ！」

「あ、貴方は……」

「今日尋ねる事になってたアクセル・ターナーだよ！ 詳しい話は後だ、とりあえず奴ら倒すぜ！」

「倒すって言っても！」

「へへ、あの程度の敵に後ろを見せたらな……」

彼がそう言った瞬間、膨大な魔力が練り上げられていくのがわかった。

そして、両手が蒼く光だし……。

「二代目拳王は名乗れねえんだよ！ いくぜ、『玄武剛弾』……！」

彼の両腕のガントレットが猛烈な勢いで回転し、彼の掛け声と共に敵に向かい螺旋状に回転する砲撃が飛んだ！

み、見た事も無い魔法……恐らくはベルカ式ね……。

「ギョオオオオオオ……！」

バカみたいに強い砲撃が着弾すると、相手の胴体に風穴が開いたわ……。

トーレでも一撃で倒すの難しいっていうのに……。

な、何よ、今の砲撃！

軽くSランクはいつてるじゃないのよ！

「おらあ、休んでる暇はねえぞ！」

その後は彼の独壇場だった。

あらゆる攻撃がSランクに近い威力って……どれだけ凄いのよ、彼……。

こいつらだって、ランクで言えばAAAの魔導師に匹敵するのよ、それをああも簡単に……。

不味いわね、彼が敵に回るようになったら、かなりの強敵になり得る。

……でも逆に味方になれば、これ以上は無い位の戦力になるわね。なんとか彼をこちら側に引き込めないかしら。

ドクターの理想を実現する為にも、戦力は多いに越した事はないし。

ウーノとも相談して考えようかしら。

「止めだ！ 『舞朱雀』！！」

最後の魔法により、奴は完全に沈黙。

というか、最後の魔法……あれって一体……明らかに分身してたじゃないのよ！

何よあれ、トーレのライドインパルスよりも早いわよ！

人間に出せる速度の限界超えてるじゃないの！

やっぱり彼を敵に回すのは絶対に不味い。

私の勘がそう警鐘を鳴らしているわ……これは何としても味方に引き込むか、最悪敵対しないように仕向けないと……。

確実にドクターの計画の障害になるわ。

ああもつ、唯でさえ色々と障害が多いのに、まさかこんな障害が発生するなんて……前途多難ね、私達って……。

ふう、体の大きさの通り、かなりタフだったぜ。
まさか魂ソウルに続き、舞朱雀まで使う事になるとは。

でもまあ、タフさの割りに攻撃力的にはそうでもなかった。
Panzergeistで十分防げたし。
パンツァーガイスト

と、そういや、さっきの姉ちゃん大丈夫か？
怪我とかしてなきやいいんだが。

「おい、大丈夫か？」

「え、ええ」

「そっか、そんであんたが迎えの人でいいんだよな？」

「そうよ、ごめんなさいね、客人の貴方にこんな事をさせて」
「別に構わないさ」

うーん、何というか色っぽい姉ちゃんだな。

ミッドの友達が見たら、喜んで飛びつきそうだ。

しかし、何だかこの人、普通の人間と少し違う感じだなあ。
何というか生命エネルギーの流れが、どうも普通の人間と違う気

がする。

何でだろう？

何か特殊な訓練でもしてんのかな？

『アクセル、この女だが人間では無い』

『どういう事だ？』

『体内から機械の反応がある』

『もしかして、戦闘機人て奴か？』

『恐らく』

『だから、生命エネルギーの流れが変だったのか』

『ほう、わかるようになって来ていたか』

『なんとただけだな』

『その感性をより鋭く磨けば、更に高みに行けるだろう』

『そうだな、この辺もそろそろ気合入れて修行しなきゃ』

『うむ』

てな事を念話で会話したら、ラミア達がやって来た。
ラミアとプレシアには、やたらと心配されてしまった。

まあ、結構色々と無茶やってるからなあ、何時も心配掛けてすんません。

アリシアは俺が倒した奴らを見て凄い凄いと喜んでいるが。

やっぱりあれかねえ、アリシアは格闘大好き少女に変わってしまったようだ。

いつその事、格闘教えるべきか？

シューティングアーツとかなら、スポーツとしても栄えているしいいんじゃないのかな。

結構女の子でやってるのもいるみたいだし。

「それじゃ、そろそろ行きましょうか」

「ああ、そうだな……て、そうだ、ラミア」

『何でしょうか、アクセル様』

「俺が倒したあれだけど、食えるか？」

『お待ち下さい……問題ありません、食せます』

「んじゃ、輪切りにして持つてくべ」

「……あ、あれを食べるの？」

「当然だろう、仕留めた獲物は残さず食べる。これ、サバイバルの掟なり！ つーわけで今夜は肉だ！」

「やったあ、お肉お肉！」

「大量にあるからな、たらふく食べるよ、アリシア」

「うん！」

「ああ、何だかアリシアが変わっていくわ……」

「遅くなっていいじゃねえか」

「女の子なのよ、アリシアは！」

そうは言っけど、本人的には好きなんだからしょうがねえでしように。

まあ、アリシアがああなったのは、俺のせいっばいけど。

でもまあ、元々が活発な子だったんだろうから、好きにさせとけばいいと思うんだがなあ。

プレシアはかなりの娘バカだからなあ……やっぱ女の子っぽくなつて欲しいのかねえ。

「じゃあ、行くわ……つつ！」

「どした……て、足捻ってるな、歩けるか？」

「ちよっと、無理っばいわね……」

「んじゃま、あらよつと!」

見た目に反して軽いな、この姉ちゃん。
それに戦闘機人だし、体の中機械が詰まってるからもつと重いか
と思っただが……。

あれかな、生体部品とか使ってるのか?

まあ、いいか、さっさと運ぼう……もう暑過ぎだよ……。

「ちょ、ちよつと!」

「歩けないんじゃ仕方ないだろ、我慢してくれ」

「……わ、わかってるわよ」

「あゝずるいゝお兄ちゃん、アリシアも!」

「ああ、わかったわかった、肩に乗りな」

「うん!」

「んじゃ、案内してくれや」

「わ、わかったわ」

アリシアを肩車し、迎えの人をお姫様抱っこで抱えていざ出発!
なんだけど、ラミアとプレシアが物凄い目で睨んでるんだけど……
…何か悪い事したかな、俺?

『やれやれ、どうしてお前はそうなんだ……』

「何がだよ、ゲイン?」

『言っても無駄だから、みなまで言わんよ』

「???」

ま、いいや、とりあえず案内された方角に向かうとしよう。
いい加減暑くてたまないし。

そして、飛行する事十数分、漸くアジトに辿り着いた。
入り口では、ジェイル・スカリエッティと二名ほどの女性が待ち構えている。

「どっちも滅茶苦茶美人じゃねえか……羨ましいな、コンチクシヨウ。」

「まあ、家のラミアもプレシアも美人だけだな！」

「よう、お待たせ」

「やあ、よく来てくれたね……と、ドウエはどうしたんだい？」

「ああ、足捻ったみたいだね。歩けないみたいだったから運んで来た。」

「……重くないのかね？」

「全然、この人程度なら小鳥が止まってるようなもんだわ」

「そ、そうかい、まあ、一先ず中へ案内しよう」

「おう、お邪魔するぜ」

案内人のドウエさんを抱えたまま、アジトの中を進んでいくと壁一面によくわからない標本なんか飾ってある。

「流石はマッドサイエンティストのアジト……雰囲気あるじゃねえか。」

しかし、ジェイル・スカリエッティの奴、こんな場所で一体全

体何やってんだろつ。

プレシアの話じゃ、恐らく生態技術関係の研究らしいけど……俺にはよくわかんねえや。

んで、更に奥に進むと……今度は人間らしき物の標本が並んでいる。

幸いスプラッタな事にはなっていないが……流石にアリシアの教育上よろしくない光景だ。

しかも、並んでいる標本らしき物は明らかに一般人の物じゃない。確実に鍛えている人間のそれだ。

どっからこんな手に入れてるんだ、こいつは……。

流石は広域次元犯罪者になるだけの事はある……やっぱどっか頭ぶっ飛んでやがる。

「て、この人、ゼスト・グランガイツじゃねえか!」

「おや、知っているのかい?」

「当たり前だろう、ミッドに住んで知らない人はいねえって! 何でこの人がここにいんだ?」

「以前のアジトを襲撃して来てね、その際私の娘の一人が倒したのだよ。まあ、娘も甚大な被害を蒙ったがね。」

「マジかよ……あのゼスト・グランガイツをねえ」

死んだって話だったけど、この人程の強者がこんな場所で標本になっているだなんて、世の中わからねえもんだ。

俺も慢心せずに、もっと強くならなきゃなあ。

「ちなみにだが、彼は生きているよ」

「……マジ?」

「ああ、調整しだいでは目覚めるさ」

「へーそうなんか……」

もしも目覚める事があれば一度話してみたいもんだぜ。

何せ俺の憧れの漢の一人だもん。

無骨にも騎士道を貫き通した漢……くうやつぱかつこいいぜ！

騎士を名乗る連中が全員この人みたいな漢だったら、俺も騎士になってもいいんだけどねえ。

「さ、行こうか」

「おおっと、悪い悪い」

しかし、よくわかんないけど、ここの設備って管理局本局と大差ないんじゃないだろうか。

流星は最高評議会がバックについているだけの事はあるぜ。

余程こいつの研究ってのは重要なんだろうなあ。

一体全体何を企んでいるのやら。

「と、ここだよ、適当に座ってくれたまえ」

辿り着いた場所は、丸いテーブルの置かれた部屋だった。

つか、幾らなんでも殺風景すぎんだろうか！

もう少しあれだ、内装考えるとかしらつてのに。

せつかく周りに美人がいるってのに、勿体ねえなあ。

「悪いけど話始める前に、冷たい飲み物でもくれないか、暑くって喉がカラカラだよ」

「ああ、そうだね、ウーノ、すまないけど、彼らに飲み物を」

「はい、ドクター」

「そういや、あんた以外にここには何人いるんだ？」

「そうだね、先ほどのウーノ、それから君らの案内役のドゥーエ、それとトーレ、クアットロ、それとチンクかな」

「ふーん、思ったよりも結構少ないんだな」

「今はまだ調整中でね、何れ増える予定さ」

「そうなんか」

調整中って事は、ここにいるのは全員が戦闘機人て事か。

んでもまあ、戦闘機人といったって、単純に体の中が機械なだけの人間だろう。

さっきのドゥーエだっけ？

あれも足捻って歩けない状態になっていたし、弱点としては人間と変わらないみたいだし。

何よりもさ、やっぱり体の中が機械だろうと心がありや人間なのよ。現に俺もラミアやゲインの事を、デバイスだとは思ってないし。

「どうぞ」

「あんがとさん」

うーん、やっぱりウーノさん美人だ！

こう何なのか、クールさがにじみ出ている！

こういう知的美人てやっぱり漢の子としては憧れるね！

ラミアもプレシアも美人だけど、ウーノさんはまた違った美人だぜ。

「あの、何か？」

「ああ、美人さんだな〜て」

「……！ か、からかわないで下さい！」

「いや、マジで美人だって、ウーノさんもドウエさんも」

「おいおい、君は私の娘を口説きに來たのかい？」

「別に口説いてないってば、素直な感想を言っただよ」

『アクセルにその手の話をして無駄だ、一向に理解しようとせんのだからな』

「何だよそれ〜それじゃ俺がバカみたいじゃんか」

『……自覚無しか、全く、そんな所まで先代に似なくてもいいだろ
うが』

「え〜でもさ、マジで美人じゃね、この二人」

と、言った瞬間、腕に猛烈な痛みが！

隣を見ると、プレシアが物凄い形相で俺の腕を抓ってる！

その奥では、ラミアまで怪しい眼をしてる！

俺、何かしたっけ？！

「何すんだよ、プレシア！」

「ふんっ！」

『アクセル様、あまりお戯れは感心いたしませんよ……』

「ラ、ラミアまで何怒ってるのさ」

「……やれやれ、プレシア女史も大変だね」

「ほんとよ、全く……」

「……」

何皆して怒ってるんだよ。

別に俺、変な事言ってるじゃないじゃん。

まあ、いいや、さつさとジェイル・スカリエッティと話をしよう。

お為ごかしはせずに、直球でいくぜ！

「それで、君は何故私に会いたかったのかね？」

「その前に、あんたの呼び方、ジェイルでいいか？」

「ああ、構わないよ」

「じゃあ、俺の事もアクセルって呼んでくれ。んでだ、俺があんたに会いたかった理由は幾つかあんだけど、その前に聞きたい事がある。」

「何かね？」

「ジェイルは何で犯罪者なんてやってんの？」

「何でと言われてもね……それが私の存在意義だからさ」

「????」

犯罪者になる事が存在意義って……どういう事だ？

やっぱ最高評議会が絡んでるのか？

『アクセル様』

「ん？」

『この男は、純粹に人から産まれた存在ではありません』

「……へ？」

『恐らくはクローン体です』

「クローン？」

『はい』

クローンてあれか、ある特定の細胞から全く同じ細胞を作り出すっていうあれか？

確か食品とかで、クローン技術で作り出された動物の肉とか野菜とかがあったけど、あれと同じ事か。

という事は、こいつも誰かに作り出されたって事になるんだろうけど……やっぱ可能性あるとしたら最高評議会だよなあ。

うむむ、まさかそんな事までしていたとは……やっぱ最高評議会ってまともじゃないっばいな。

「よくわかったね、その通りだよ」

「でもさ、だからって何で犯罪者でいる事が存在意義なの？」

「……私はある目的の為に作り出されたからさ」

目的かあ……どんな目的で、誰の目的なんだろう？

やっぱ最高評議会絡みかな？

さつき見た人の標本といい、ジェイルが研究している生態技術関係といい、一体最高評議会の連中は何を考えているんだ？

そもそも最高評議会って何者なんだろう。

世間じゃ都市伝説化している位だし、マジでまともな人間とは思えないしなあ。

うーん、その辺りも調べておくべきだったなあ。

「でもさ、ジェイルが産まれた理由がそれだとしても、ジェイル自身の意思はどうなのさ」

「私自身の意志？」

「そそそ、他にやりたい事とかないのか？」

「……そうだねえ……世間をあつと言わせるような事をしてみたいねえ……」

「あつと言わせるねえ……良い悪いは置いといて、世間に認められたいって事？」

「……そうだね、そうかもしれないね……」

何だか凄く悲しそうな顔で笑うんだな、ジェイルの奴。

多分この悲しそうな笑顔が、こいつの心情を語っているんだろう。

ある意味じゃ諦めているのかもなあ、自分達が世間に受け入れられる事を。

確かに差別や偏見てのは何処に行ってもあるし、苛めなんてのもあるから、ジェイルが諦めるのもわからなくは無い。

だけどさ、やっぱり諦めちゃそこで終わりなんだと思う。

諦めずに努力を続けるからこそ、認められる事だってあるだろうさ。

現にレジアス中将だって、魔力が無いのに中将までいったんだから、やってやれない事は無いはずだ！

やっぱり人間どんな状況でだって、諦めずに足掻き続けるべきだろう。

うつし、決めた！

やっぱりジェイルを引き込む、つか、こいつほっとけないよ！

「なあ、ジェイル」

「……何かね？」

「俺みたいな小僧が偉そうな事は言えないけど、やっぱりさ諦めちゃ駄目だと思うんだよ。確かにジェイルの言う通り、人間てのは自分と少しでも違う奴を差別したり偏見の目で見たりするけど、皆が皆そうじゃないと思うんだ。中にはジェイル達の事を認めてくれる人だっていると思うぜ。現に俺はジェイル達の事を、別に偏見を持つて見たりはしないしさ。」

「そうだね、確かに君のように偏見を持たない人間もいる。けどね、

私達は既に犯罪者なんだよ。」

「だからさ、それを覆そうぜ、俺達皆でさ」

「……どういう事かね？」

「実はさ……」

プレシアから出された案である、部隊を作るという事について俺の意見を混ぜながらジェイルに説明。

聞いている最中、ジェイルは結構真剣に聞いてくれている……呆れてる部分もあるけど。

まあ、普通は誰も考えないもんな、こんな方法。

部隊作るまでならまだしも、その部隊で管理局の掃除をしようだなんてさ。

何しろ管理局ってのは、かなり大きい組織だからなあ、下手に手を出せばこつちが潰される。

かと言って手をこまねいていれば、一向に掃除は進まない。

ならば、誰かがやらきゃならないだろう。

その為には俺達みたいなアウトローが必要なんだと思う。

「どうよ」

「……ククク、管理局の変革か……私達が考えている事よりも面白いかもしれない。誰も成し得なかった管理局の変革を成し遂げたとすれば……。」

「歴史に名が残るだろうぜ、良い方向で変革出来れば世間の連中も認めざるを得ないだろう？」

「そうだね……確かにそうだね……」

「だからさ、一緒にやろうぜ、俺達でさ！」

「……少し考えさせてくれないか」

「ああ、今すぐ答え出せなんて言わないさ、じっくり考えて答えを出してくれ」

「ああ、そうさせて貰おう。暫くの間はここで暮らしてくれたまえ。」

「お、悪いな、んじゃ暫くの間は厄介になるぜ」

「ああ」

こうして、ジェイル達との共同生活が始まり、数週間が経過した。最初の頃は、ジェイル以外は何というか硬い感じだったけど、徐々にではあるが打ち解けて来ている。

三番目の娘であるトーレとはよく一緒に修行しているし、四番目の娘であるチンクもよく修行に混じっている。

特にトーレは戦闘スタイルが似ている事もあってか、よく組み手なんかをしたりしている。

チンクの方は、戦闘スタイルは似てないけど、それでも割りときよく一緒に訓練したりする。

まあ、チンクにはアリシアも結構懐いているってのもあんだけどね。

二番目の娘であるドゥーエは、レジアスの秘書として進入しているらしく、あまりアジトにはいる事は無いんだがたまに帰って来る

と結構よく話す。

何というか、時折ラミアと同じで獲物を狙う目になるのが少し怖いけど、概ね関係は良好だ。

それにドゥーエは案外面倒見がいいのか、よくアリシアの面倒を見てくれる。

その為か、アリシアが俺達以外で一番懐いているのはドゥーエだったりする。

一番目のウーノは、プレシアやラミアとよく話しているのを見かける。

内容を聞いてもよくわかんないけど……やっぱ女の話はよくわからない。

クアットロは……性格があれだけど、結構面白い奴ではある。時折からかって遊んでたりするけど、少し前より顔が柔らかくなった感じだ。

俺はやっぱり漢同士って事で、ジェイルとはよく一緒に話をする事が多い。

特にプレシアとアリシアを蘇生した生命エネルギーの事や、俺が使う魂^{ソウル}については非常に興味があるらしく結構データを取っている。

また、ジェイルはゲインともよく話すみたいで、古代ベルカ時代の事を聞いて喜びに打ち震えている。

やっぱあいつ、犯罪者ってよりも、根っからの研究者なんだよ。

古代ベルカの話の聞いている時なんて、もう子供みたいに喜んでるもん。

あれがきつとジェイルの素なんだろうなあ。

やっぱりあいつはこのまま犯罪者でいさせるべきじゃない。
絶対にこっちに来るべきだと思うぜ。

「アクセル、ちょっといいかい」

「どつたの？」

「……正直、今の私は迷ってるんだ、君と共に行くかどうかを」

「そりゃそうだろうなあ、今までの人生観が全部変わるわけだし」

「ああ、その通りだ。それに、娘達の事もある。」

「まあねえ」

「だからもう一度聞きたい、君は本当に私達を必要とするのかを」

そうだよなあ、結局今までジェイル達を本気で必要としている連中なんていなかっただろう。

どうせ死んだところで替えが利く程度にしか思われていなかっただろうし。

でもまあ、俺はジェイルだからこそ一緒に来て欲しいんだ。
ここ数週間、一緒に過ごしてわかったが、ジェイルは悪人じゃない。

いや、ジェイル以外のウーノ達だって、悪人では無い。

そりゃクアットロとかは性格あれだけど、それでも根っからの悪人じゃないと思う。

ただ、周りにあいつらの事を理解してくれる奴がいなかったただけなんだ。

要はあいつらには……友達が必要なんだ。

苦楽を共にし、分かり合える友達が必要なんだよ。

だからこそ、あいつは俺に自分を必要とするのかをもう一度聞きに来たんだろう。

「んあの聞かれるまでもないぜ。俺はジェイル達を必要としてる。勿論能力もそうだけど、それだけじゃない。俺はジェイル達の友達でいたいんだ。」

「……友達……私達がかい？」

「そうだよ。だって一緒に笑って一緒に飯食って過ごしたじゃないか。もう十分友達だよ。」

「……ククク……ハハハハハ……そうか、友達か」

「そそそ、ジェイルが欲しかったのって、きっと友達なんだと思うぜ」

「……かもしれない、いや、きっとそうなんだろうね」

「だからさ、俺はジェイルの友達でいたいんだよ」

「……ありがとう、君に会えてよかったよ……」

「にひひ、そうだろ」

「本当に君は面白い、いいだろう、君と共に行く」

「マジか！ やっほい！」

それから全員を集め、ジェイルが俺達と一緒に来る事を決めたと説明した所、ウーノ以下全員も一緒に来るという事になった。

いや、よかったぜ、もう、半分どうやって説得したもんかと内心じゃドキドキもんだったから。

正直な話、説得する材料とかあんまり無かったし、難しい事を考えるのは苦手なもんだからさ。

もうほんと、どうしたもんかと。

でもまあこれで一步前進で事だ。

ジェイルがいれば、色々動きやすくなるし、ウーノ達も非常に優

秀だ。

つか、ぶっちゃけ、今のメンバーだけでも地上本部としては相当欲しがると思うんだよねえ。

何せプレシアはSS+、ラミアはSSS+、トーレは魔導師換算でS+だから……何とオーバーSランクが三人だ。

それに今の俺はトーレ達との訓練や、ジェイルが編み出してくれた更なる魔力増強の為の訓練によりAAA-までいつてる。
チンクはAA-相当だし、ドゥーエA相当という実力だ。

更に加えればウーノとクアットロは、後方支援としては破格の能力を持っているしジェイル自身も凄い頭脳だもん。

これだけのメンバーだからなあ、絶対欲しがるだろ。

うっし、そんじゃ、皆を集めて早速会議だ！

楽しくなってきた！

「さてと、皆揃ったし、そろそろ今後の事を決めたいと思う」
「そうだね」

「先ず最初に、どうやって司法取引に持っていくかだけど」

「それについては、レジアス中將に直談判が一番早いと思うよ」

「やっぱそうなるか……となると、そっち方面はジェイルに任せて

いいか？」

「ああ、段取りは私の方で調整しよう」

「OK、んじゃ次に戦力の増強だけど、クアットロ、他の姉妹はどうよ」

「うーん、セインちゃんとディエチちゃんかしらねえ……他の子はまだ無理よお」

「そっかあ……」

うーん、もう少し戦力が欲しい所なんだけど……どうしようかなあ。

もったこう、実績のある人間が欲しいんだけど……うちの間じやんなのいないしなあ。

「ねえ、スカリエッティ」

「どうしたのかね、プレシア女史」

「あの標本になっていた人達を回復させる事は出来ないかしら？」

「……あ！ そうだよジェイル、あのゼスト・グランガイツを復活させれば、一気に問題解決出来るんじゃないか！？」

「確かにそうだね……ゼスト・グランガイツはレジアス中将の親友だったようだし。それに彼の部下も結構な実力者達だ。調整の方もプレシア女史の協力でかなり進んでいるからね、近い内に覚醒させる事が出来るだろう。」

「うっし、ならゼスト・グランガイツじゃなくて、他の人達も起こしてしまおう！」

「全員戦力に加えるのかい？」

「そそそ、こうなったらもう自重せずにド派手にやっちゃまおうぜ！」

「ククク……面白いね、きっとレジアス中将はひっくり返るだろうさ」

こうして戦力増強と実績のある人の勧誘という二つの問題が一挙

に解決。

まあ、ゼスト・グランガイツを覚醒させた後は、どうやってこっちに引き込むかだけど、その辺はプレシア達が考えるらしい。

でもまあ、あの人の場合、伝え聞いている通りの性格だったら案外簡単にいけんじやないのかなと思う。

何せ聞いている話だと、寡黙、実直、騎士としての誇りに殉じるってな感じの人らしい。

それにあの人はどうやらレジアス中将与親友だったらしく、死ぬ間際にはレジアス中將が裏側で暗躍している事に色々と気がついていたらしい。

それにより、最高評議会の罠に掛かり、部隊は全滅……あの人身も部下を庇いチンクに負け、そのまま死亡したんだそうだ。

ならばこそ、あの人の力を借りてレジアス中將を正しい道に戻すべきだろう。

レジアス中將は黒い事をしてはいけない人だ。

あの人は地上の代理人であり、地上本部の皆が慕う人。

だからこそ、決して黒い事に手を出してはいけない。

裏の事については、俺達が処理すりゃいいんだ。

まあ、俺もアウトローって訳じゃねえけど、それに近い状態ではあるし、ある意味俺はやれる事は全部やってしまっって性質だしな。

うっし、なんとしてもゼスト・グランガイツやその他の人達をこっちに引き込んでやろう。

その上で、レジアス中將を正しい道に戻して、俺達の部隊を作り管理局を皆で変えていくんだ！

おっしゃあ！

気合の入る目標が出来たぜ！！

んで、今日はゼスト・グランガイツ以下、元ゼスト隊の面々を叩き起こす日だ。

何でも今まで調整が難航していたのは、ゼスト隊の面々の負傷が激しかった為らしい。

それをプレシアが完成させたプロジェクトF・A・T・Eの技術を応用する事で、負傷していた部分の治療や修復が全て滞りなく完了出来たそうだ。

これにより、いよいよゼスト隊の面々を叩き起こす事が出来るらしい。

といっても、今まで動いていなかったのも、直ぐに戦闘等の激しい運動は無理だろうという事。

プレシアやアリシアの時と同様に、リハビリは必要だという事だ。

当然と言えば当然だろう。

幾ら歴戦の猛者と言えども、長い間動いていなかったんだから当然と言えば当然だ。

「さて、それではゼスト・グランガイツを覚醒させるよ」

「ああ、トーレ、チンク、一応戦闘準備だけはしといてくれよ」

「わかってる」

「姉は問題無い」

「んじゃ、ジェイル、頼むぜ」

「ああ」

ジェイルがコンソールを操作すると、辺りの機械が作動を始めた。同時にゼスト・グランガイツが入っているカプセル内部でゴポゴポと音が鳴り始めた。

恐らくは生命維持とかその辺が動いてるんだろう。そんな風に俺が考えている間も、ジェイルはコンソールを操作しており、調整が進む。

十分ほどして、調整が済んだようでジェイルのコンソールを操作する手が止まった。

それと同時にカプセルが開き……中からゼスト・グランガイツが出て来た。

……しかし、当たり前と言えば当たり前なんだけど、ゼスト・グランガイツが裸なもんだからプレシアは目を逸らしてる。

まあ、当然だよな。

しかし、見た感じこれといって外傷は無さそうだ。

流石は稀代の天才ジェイルとプレシアの技術で修復されてんだから、外傷なんてある訳ないよな。

「……こ、ここは……一体……き、貴様は!？」

「あゝ動くなつて、まだ覚醒したばっかなんだから」

「き、君は……」

「とりあえず、話すのは後、先ずは体に異常が無いかチェックするのが先だ。ジェイル、頼むぜ。」

「ああ」

その後ジェイルのバイタルチェックにより、異常無しと確認された。

まあ、異常なんてあつたらそもそも覚醒出来ないらしいんだけど。

その後も細かいチェックを済ませ、服を着させて、会議室へ。

ここでゼスト・グランガイツに、色々と話さなきゃならない事がある。

「んじゃ、改めまして、俺はアクセル・ターナー、二代目拳王を継いだ者だ」

「……ベル力を統一した唯一の王である、あの拳王か？」

「そそそ、一応証拠は俺の相棒のソウルゲインとラミアな」

『お初にお目にかかる、騎士ゼスト、私はソウルゲイン、初代拳王アクセルより受け継がれる拳王の為のデバイスだ』

『同じく拳王様にお仕えするユニゾンデバイス、ラミア』

「……本当なのか」

「ああ、一応聖王協会にでも確認取ればわかると思うぜ」

「その二代目拳王が何故犯罪者と共にいるのだ」

「あゝそれには色々深い事情があつてね。詳しく話すとだな、あんたの親友であるレジアス中將にも関わりがあんだよ。」

「……レジアスに？」

「そうだ」

ゼストの旦那に、レジアス中將がジェイルや最高評議会と繋がりがあつた事、調べた結果、他にも幾つかの違法行為に手を染めている

事を話した。

それを聞いている最中、ゼストの旦那は苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

共に正義を語った親友が、堕ちるところまで堕ちてると聞かされればしょうがないだろう。

だけど、どんなに悲しくても事実は事実……受け入れて貰うしかない。

それと、ジェイルが今は改心し、地上の為に働こうとしていると聞かせた。

今のジェイルは、もう犯罪を犯す気なんて更々無いらし……とはいえ、なかなか納得してくれなかったけど、ジェイルの一言が利いた。

『私を信用出来なくてもいい、ただ、アクセルの言葉だけは信用して欲しい……もしどうしても私を信用できないなら、この場で私を撃つてくれて構わないよ……』

あんな気合の入った目でんな事言われちゃ、流石にゼスト・グランガイツと言えども言い返せないようだ。

つか、ジェイルの奴、めっちゃ漢してんじゃないか！

かつこいいぞ、こんちくしょう！

流石は俺の友達だ！

「しかし……レジアスがそんな事を……」

「残念だけど事実だ。だからこそ俺はあんたの力を借りたい。」

「私の？」

「そうだ、レジアス中將を正しい道に戻す事が出来るのは……親友

であるあんたを置いて他に無いはずだ」

「……しかし、私は既に死んだ身……亡霊が幾ら騒いだとしても……」

「だからこそだろ、このまま行けばレジアス中將は戻れない所まで行っちまう。そうさせない為にもあんたの声を届ける事が必要なんだよ。」

「……私の……声を届けるだと……」

「そう」

そして更に俺達が考えている部隊構想を話して聞かせた。

俺達が考えているのは、先ず管理局上層部や聖王協会の裏側に関する情報等を元に、レジアス中將に司法取引を持ちかける。

司法取引の内容は、犯罪者に関する情報提供、戦力向上の為の技術提供、それと俺達全員が地上本部に所属する事。

万年人員不足で予算も火の車状態である地上本部で、ぶっちゃけプレシアやジェイルの提供する技術は喉から手が出るほど欲しいはず。

既にプレシアとジェイルは、低ランク魔導師向けの装備の開発を進めている。

これまた凄い装備になりそうなんだよね。

んで、司法取引が認められれば、俺達全員が所属する部隊を設立し、地上の治安維持の為に働く事。

この際、ジェイルとプレシアに関しては当面の間は社会奉仕という事で、一切の給与は無し。

勿論この部隊の中には、ゼストの旦那や元ゼスト隊の面々、それとウーノ達ナンバーズも含まれる。

ぶつちやけ、本局でも類を見ないほどの戦力になるだろう。

これらを実現する為にも、ゼストの旦那の声は必要なんだ。

レジアス中将を正しい道に戻して、地上の平和を守る為にもな！

「しかし、果たしてレジアスは私の話を聞くだろうか……」

「他の奴なら駄目だろうけど、あんたの声なら届くと思うぜ。共に正義を語ったあんたの声ならな！」

「……！」

「だからよ、俺らと一緒にやろうぜ！」

「……そう、だな……レジアスが道を逸れてしまったのなら、それを正すのは私の役目なのかもしれん……いいだろう、私も共に行くう！」

「おっしやあ！」

これでレジアス中将の説得がよりやり易くなった！

ゼストの旦那にレジアス中将を正しい道に戻して貰い、その後に皆で部隊を設立、俺達全員で地上の事件を解決しまくる。

それでもって、地上本部の戦力底上げも行くと……そうしてけば、きつと何時かはジェイル達も認められるだろうし、地上も少しは平和になって来るだろう。

まあ、俺はまだまだ修行中の身ではあるから、あまり偉そうな事言えないけど、出来る限りの事をするぜ！

うつしやあ、気合入って来たぜ！

守る為にも、更に更に頑張ったるぜ！

第六話：正義

ゼストの旦那を引き入れて、ジエイルのアジトで過ごし始めてからもう一年が経過。

俺の修行も大分進み、魔力値はAAAまで来ている。

しかし、AAA以降はかなり伸びが悪くなって来た。

やっぱりAAA以降の壁は厚いんだねえ……遣り甲斐があつていいけどな！

それと<シャドー>の強さも七段階目まで来ている……が、しかし、七段階目の先代はもう人間の強さのレベルを凌駕してる……毎回ボロボロだよ。

おかげで顔がマジ変形しかけた……ラミアやプレシアがいなかったら洒落にならんかったぜ。

その他の基礎的な修行等も勿論続けている。

おかげでタフさには更に磨きが掛かり、今ではゼストの旦那の一撃にも耐えられる！

そのゼストの旦那だが、覚醒して以降は物凄い勢いでリハビリに励んでいる。

失った勘を取り戻す為と、例のミミスともガチでやりあったりしている……流石は騎士ゼストだぜ！

その旦那とも最近は仲良くなり、よく一緒に組み手をしている。

旦那の攻撃は先代に比べれば痛くは無いんだが、やっぱり経験の差が攻撃の繰り出し方とかが巧いんだこれが。

おかげで結構ボコボコにされている。

まあ、俺としても生きた人間と組み手するのは久しぶりの事だから、凄く勉強になるんだけどな。

それと、この一年間に元ゼスト隊のメンバーである、メガーヌ・アルピーノとその娘であるルーテシアが俺達のメンバーに加わった。メガーヌさんは最初、旦那と同様にこちらを警戒していたが、旦那と俺の説得により戦力に加わってくれた。

というか、メガーヌさん……旦那に惚れてるな、ありやあ。

だってさ、俺やジェイルを見る目とは明らかに違うもん、旦那を見るときが目がさ。

旦那がカッコいいのは当然だろう、何せ地上本部における伝説的な騎士だし、俺が憧れる漢だからな！

つか、ルーテシアは旦那とメガーヌさんの間に出来た子なんじゃないだろうか。

……その辺聞くのは野暮ってもんだし、何時か話してくれるまでは聞かないでおこう。

それからルーテシアだが、結構大人しい子なんだけど、何故かはわからんがアリシアと同じで俺によく懐く。

俺も子供好きだし別に懐かれて嫌な気持ちは無い。

つか、妹が増えたみたいで嬉しいし。

でも、よくアリシアとルーテシアはどっちが一緒に俺と寝るかで喧嘩してたりするけど。

メガーヌさんもプレシアもそれを見ていつもハラハラしてっけど、別に子供の喧嘩なんだからほっときゃいいのと思う。

まあ、大概の場合、両者KOで終わるんだけど。
その後は二人共、俺と一緒に寝るのが常だ。

ゼスト隊の面々とはそんな感じ。

最初はどうなるかとも思ったが、今では結構和気藹々としている。

次いで、当初の予定通りにセインとディエチの調整が終わり仲間に加わった。

セインは元気が有り余ってる奴で、よく悪戯をしてはウーノに叱られている。

変わってディエチは何というか大人しい奴で、よくチンクと一緒にいるのを見かける。

……チンクと一緒にいるとどっちが姉だかわかんないけど。

二人ともなぜか俺の事を、『兄ちゃん』『兄様』と呼ぶ……何故だ……。

クアットロが言うには、以降の妹達からは同じように呼ばれるだろうとの事。

……俺ってなんかしたっけ？

別にこれといって兄っぽい事をしたつもりはないんだがなあ……謎だ……。

そんな二人だが、やっぱり色々と特殊技能を持っている。

そのどっちも使い様によっては物凄い力を発揮する物だ。

セインの『ディープダイバー』は、無機物であれば潜航し潜り抜ける事が出来る。

最初にやられた時はマジで焦った。

いきなり股の下から顔だしやがるんだもんなあ……。後でボコボコにしておいたけど！

ディエチは固有武装の関係上、完璧に固定砲台化している。何せ一種のカノン砲だもんなあれ……。

しかも、砲撃としてはSランククラスだから尚ヤバイ。

直撃食らうと滅茶苦茶痛いんだこれが……とは言え、あの砲撃に耐えられる体があれば相当タフになるだろうという事で、時折ではあるが修行に付き合って貰って固有武装である『イメースカノン』をぶっ放して貰ってる。

おかげでよりタフさに磨きが掛かって来ている。

……皆には呆れられてるけど。

んで、既存のナンバーズも最近では随分変わったと思う。出会った頃は全員同じような服装だったが、今では服装にも個性が出始めている。

ウーノは何と言うか、働くお姉さんの感じだし、ドゥーエは結構派手目の服装。

トーレは動きやすさ重視の格好で、クアットロは……何というか似合ってるんだか似合っていないんだかよくわからんが所謂ゴスロリという服装をしている。

んでもって、チンクはアリシアやルーテシアとお揃いの服を着ている事が多い。

寝巻きもお揃いで、動物のプリントがされたのを着ている。

うん、チンク、よく似合ってる、兄は嬉しいぞ。
なんて事を言うと、ランブルデトネイターを投げて来るもんだから油断が出来ないのだ。

皆それぞれ結構性格も変わって来ている感じがする。
ウーノは仕事一筋だったけど、結構ラミアやプレシアと女同士の会話を楽しんでいる。

最近ではそれにメガーヌさんも加わるもんだから、もうね、終わりが見えないんだ。
おかげで漢連中である、俺やゼスト、それにジェイルは辟易してる。

ドゥーエはなんかこう、吹っ切れた感じかな？
元々明るかったんだろうけど、それに輪を掛けて明るくなって来ている。

時折俺の事からかって来るけど、それでもまあ悪い気はしない。
相変わらず時折獲物を狙う目になるのが怖いけど。

トーレは相変わらずだが、それでも最初の頃に比べればかなり打ち解けてきているだろう。

最近では訓練以外でも話すようになって来ている。

クアットロも最初の頃に比べれば、少しはマシになって来た。
が、しかし、あの性格だけは直らないようで……何度トーレと一緒に張り倒したかわかりやしない。

悪い奴じゃねえし面白い奴なのは間違いないけど、あの性格はね

え……。

マジでどうにかしないと、将来心配でしょうがないよ。

チンクはあれだ、真面目だし姉としても威厳があるんだが……物
凄い少女趣味なんだ。

別に悪い事じゃないしいんだけど……あの部屋はどんなのよと
思う。

流石に俺もジェイルも引いた……もう見る間にファンシーになっ
ていくあの部屋に……。

アリシアとルーテシアは喜んでるけど。

そんな感じでナンバーズとも過ごしていて、ジェイルとも今では
かなり打ち解けている。

よく俺や旦那と漢同士で話をするし、酒を飲んだりする。

俺はまだ年齢的に酒は飲めないからあれだけど、それでも三人で
一緒に楽しんでいる。

最近では部隊を設立する事が出来たら、どういった事をしようか
等の話で盛り上がっているんだ。

それに、ジェイルにしろ旦那にしろ、やっぱり人生的には先輩に当
たるから色々と為になる話を聞く事が出来る。

特に旦那の騎士としての生き様には……漢を感じずにはいられな
い。

流石は地上本部でも伝説とまで言われた騎士だ。
やっぱり憧れた人物の話の聞けるのは頗る嬉しい。

んで、この一年皆との親睦を深めていただけでは無い。

違法組織の情報集めや、管理局内での不正疑惑の情報集め、聖王教会の裏側についての情報集め等々、司法取引に使えそうな材料を集めている。

管理局や聖王教会も、日夜平和を守る為に働いている人が多いのは先刻承知。

だが、その中には、利権を貪り守るべき対象の人々を食い物にしている輩がいるのもまた事実。

組織が大きくなれば、そういった輩が出て来るのはある意味仕方が無い事と思う。

でも、やっぱり、管理局はそれじゃいけないと思う。

管理局や聖王教会は多くの人達の協力の下、次元世界の平和を託されている組織だ。

そんな組織で不正や癒着なんて事があってはならない。

全てを正す事は不可能であっても、出来る限りそれらを排除すべきだろう。

勿論、俺達だけで出来る事じゃない、管理局にいる全ての人が協力し事に当たるべきだと思う。

まあ、俺達はそのきっかけになればいい。

俺達の世代で変わらなくとも、何れ管理局がより良い方向に進んでくれればそれでいい。

その為の部隊設立の計画だしね。

その点に関しては、今この場に居る全員が理解している。

それと、レジアス中將についてだが、先ごろジェイルが連絡を取

り一週間後に会談する事に決定した。
勿論秘密裏ではあるので、場所なんかはこつちで指定させて貰っている。

流石に今の段階でレジアス中将とジェイルの関係が知れ渡るのは不味い。

司法取引が成立した後ならまだしも、今はまだジェイルは広域次元犯罪者でしかないから。

とはいえ、今のジェイルを見たら誰もが首を傾げるだろう。
それ位ジェイルは変わった、勿論良い意味でだけど。

「しかし、遂にレジアス中将とご対面か」

「なかなか証拠集めなんかに時間が掛かったからね」

「ああ、そうだな、だがここでレジアスを説得出来れば」

「司法取引も成立させ易いだろうし、地上本部にも強力な部隊が誕生する」

「そうなれば、地上本部側としても利益がある……だが……」

「問題は本局と聖王教会だよねえ……絶対難癖付けて来るでしょ」

「そうだねえ、まあ、聖王教会を黙らせる情報はあるんだがね」

「ああ、例の聖王のクローンの事？」

「そうだよ、あれは聖王教会の司祭が起こした不始末だからね」

「でも、聖王のクローンで、何処で作られているかはわからないんだよね？」

「ああ、私とは違うグループが関与しているらしいが……一応大体の眼星は付いているから、何れはわかると思うよ」

「そっか」

ジェイルから提供された情報の中に、なんとあの聖王女オリヴィエのクローンを作るといふ計画があった。

その計画は、やはり最高評議会の指揮の下、ジェイルとはまた別のグループが進行しているらしい。

流石のジェイルも他のグループについての詳しい情報は持っていないらしく、なかなか情報が集まっていないのが現状だ。

何せ山程存在するらしいから、最高評議会の息が掛かった違法グループは。

んで、更にジェイルから提供された情報によると、その複数いるグループの中にどうやら古代兵器を研究しているグループが存在するらしい。

この古代兵器の中には、生物兵器や質量兵器等が含まれるようで、考えようによってはこのグループが一番危険かもしれない。

今の魔法技術は、質量兵器に対しては対策が甘い部分がある。プロテクションやバリアジャケットも、一応は質量兵器を防ぐ事は出来るがそれも完全じゃない。

なのでジェイルとプレシアには、各人のデバイスや装備に質量兵器への対策も施して貰っている。

勿論、ゲインとラミアも同様に改良されている。

あの二人の場合、既に個体として完成しているのであんまり弄り過ぎると逆に破損してしまう危険性があるので、あまり突っ込んだ改良や改造は出来ないんだが。

それでも、それぞれの強度やバリアジャケットの強度、魔力の効率化等は出来ている。

マイナーチェンジ的な感じになるんだろう。

それでも戦力がアップする事には変わりないので有り難い限りだ。

「さてと、んじゃ今日も修行に励むか」

「好きだねえ、アクセルも」

「まあ、継続は力なりってね」

「ふむ、なら私も付き合おう」

「んじゃ旦那、組み手でもすつか？」

「ふ、いいだろう、手加減はせんぞ」

「そりゃこっちの台詞だつての」

こんな感じでよく旦那とは組み手をするんだが……何時の間にやらトーレやチンクも混じってるんだよねえ。

果ては皆揃って観戦しだすしさ……お前ら仕事しろと。

まあ、俺は基本的に前衛で戦うしか能が無いから、諜報活動なんかは専門家であるドゥーエなんかに任せている。

正直、俺は細かい事が苦手だから、下手に手を出しても足を引く張る結果にしかないだろうし。

とはいえ、その辺りの技術なんかについても座学や実践で学んでいる。

苦手だからといって放棄する訳にはいかないから。

そんなこんなで、あっという間に一週間が過ぎ、遂にレジアス中

将との会談の日となった。

実の所、レジアス中將には俺やゼストの旦那の事は伝えていない。

変な勘ぐりされて、妙な事されても余計にややこしくなるだけだから。

こういった交渉事については、ジェイルは俺なんかよりずっと心得ているから任せて安心なんだよね。

んで、会談の段取りとしては、先ずジェイルとレジアス中將が話しをして、その最中に俺達が会談場に乗り込む予定。
突然乗り込む事で、相手の意表を突く作戦だ。

旦那が乗り込めば、レジアス中將から何らかの反応があるのは間違いない。

多分、レジアス中將は腰抜かすんじゃないかね。

その後俺達も交えて、司法取引や部隊設立についての交渉を行う。
交渉用のカードとしては、管理局や聖王教会の不正に関する情報だけでなく、犯罪組織や違法研究施設に関する情報も集めてある。

段取りとしてはこんな感じだな。
後は相手側がどう出るかだが……まあなるようになるっしょ。

『アクセル、そろそろレジアス中將が来る頃だから、ゼストと一緒に待機しておいてくれ』

『あいよージェイルも巧くやってくれよ』
『任せておきたまえ』

ここが俺達にとっての勝負所だ。
何が何でも成功させなきゃ！

わしが戦力拡充の為に手を結んでいる広域次元犯罪者であるジェイル・スカリエッティより、会談の申し入れがあり、わしは今会談の為に指定された場所へ向かっている。

本来なら向かうべきでは無いのだが……奴が出して来た本局の不正に関する情報に興味があり、こうして態々足を運ぶ事にした。

あの情報が確かなら、いけ好かぬ本局の鼻を明かしてやる事が出来るだろう。

加えて、本局からの介入を阻止出来るかもしれん。

そうすれば、地上の安全も今よりはマシになるであろう。

わしは地上の安全と平和の為に、悪魔にすら魂を売り渡したのだから。

「やあ、レジアス中将、すまないね、態々呼び出してしまって」

「ふん、本来なら来るべきでは無いのだがな」

「やはり、あの情報が気になるかい」

「……そうだ」

ジェイル・スカリエッティが示した情報は、わしにとってはかなりの価値を持つ。

しかし、一体この男は何処であの情報を手に入れたのだ。

あの情報の内容からすれば、管理局のサーバーを直接調べなければ入手は出来ないはず。

幾等この男であっても、本局のサーバーを調べるのは不可能なはず……一体どうやったのか気になるところではあるが……。

「あの情報は別に渡しても構わないよ、元々君にご足労願う為の饒別のようなものだし」

「……何？」

「レジアス中将、悪いが私は君や最高評議会の計画からは手を引かせて貰うよ」

「何だと、貴様、それはどういう！」

「私もね、変わったんだよ、ある漢のおかげでね……まあ、悪い気はしないのだがね、ククク……」

この男を変えただと？

そのような輩がいると言うのか。

俄かには信じられん。

この人を人とも思わぬ鬼畜を変える等、一体どのような魔法を使ったというのだ。

「ククク……一応この場に彼も来ているよ。それともう一人もね。」

「ほう……是非会って見たいものだな、貴様を変えた漢とやりに」

「そうかい、それじゃ……『アクセル、レジアス中将が呼びだよ、こっちに来てくれるかい』」

ふん、面白い、どのような漢が見極めてやろう。

もしも駒として使えそうなら、こちらに引き込むのもいいかもしれん。

地上本部は、今でも戦力不足で喘いでいる。
少しでも戦力を整えなければ、地上の平和を守る事は出来ん。

会談が始まってから数十分後、ジェイルからお呼びが掛かった。
そんなじゃま、行くとしますか。

「旦那、行こうか」

「ああ、友を正しき道に戻す為にもな」
「だね」

さてと、いよいよレジアス中將とご対面か……ここですくじる訳
にはいかないからな、バシッと決めなきゃ！
うっし、気合入れていくぜ！

「ジェイル、俺だ、入るぜ」

「ああ、入って来てくれたまえ」
「失礼しますよっと」

俺と旦那が入った途端、レジアス中将の顔が一瞬にして変わった。まるで百面相のようにくると表情が変わっている。

「ぜ、ゼスト……」

「久しぶりだな、レジアス……我が友よ」

旦那がレジアス中将の名前を呟いた途端、レジアス中将の顔は驚愕一色に染まった。

そりゃそうだな、世間的には死んでいると言われている自分の親友が目の前にいるんだから。

腰抜かさないだけだったもんだと思う。

流石のレジアス中将でもそりゃ驚くわ。

「レジアス中将、驚くのも無理は無いが、話は彼に自己紹介をして貰ってからにしよう」

「う、うむ……」

「お初にお目に掛かります、レジアス中将。俺はアクセル・ターナー、二代目拳王を襲名した者です。」

「……拳王だと、あのベルカの統一王のか？」

「そうです、一応聖王教会も認めています。まあ、公にはされていないようですけど。」

そうなんだよねえ、どうも聖王教会の連中、俺の事については緘口令を敷いているらしくて世に出回っていないんだ。

当然と言えば当然なんだけどね、何せ聖王家を一度はボコボコにした相手である拳王の血筋が生き残っていたなんて知れたら、色々

と厄介な問題になるだろう。

聖王教会に反発する組織なんかは、下手をすれば俺を祭り上げかねない。

まあ、そんな連中に組するつもりは毛頭ないけどね。

「……その二代目拳王が、何故ジェイル・スカリエッティ等という犯罪者と共にいるのだ」

「そうですね、最初はある目的の為だったんです」

「目的だと？」

「そうです」

レジラス中将に俺がジェイルに近づいた当初の目的、そしてその後のジェイル達との共同生活の中で友となり、当初の目的にジェイルの解放も含められた事を話した。

その中で元ゼスト隊の何人かを覚醒させた事も話、レジラス中将が関わっている違法事件についても調べが付いている事を話した。

その内容を聞いている最中、レジラス中将は神妙な面持ちだった。そりゃそうだよなあ、自分が関わった悪事が全て露見する訳だし

……そうなりゃ幾等中将と言えども無事じゃ済まないだろう。

「そういう訳で俺はレジラス中将、貴方と司法取引を結びたい」

「司法取引だと」

「そうです、取引の内容はプレシア・テストロッサ、並びに、ジェイル・スカリエッティ達の無罪。その為にこちらから提供するものは、レジラス中将が関わった違法事件に関する記録の破棄、管理局の一部高官や聖王教会が関わっていると思われる不正に関する情報、犯罪組織や違法研究施設等の情報……それとプレシアやジェイル、それにゼストも含め俺達全員が地上本部の一部隊として戦力に加わる

事、以上です。」

「むう……」

やっぱりこれだけじゃまだ押しが足りないか。
だとすれば、やっぱりここは旦那の出番かね。

「レジアス」

「……何だ」

「俺はお前と共に語り合った正義を未だ忘れてはいない。お前と共に語り合った正義は、違法な方法で成し遂げるものではないはずだ。」

「……」

「共に誓い合ったはずだ、俺達の手でこの地上の平和を守ろうと」

「……わかつている、わしとてそうしたいのは山々だが、今の地上本部の力ではそれを成す事は出来ん。しかし、わしは地上の平和を守らねばならん。だからこそ、例え今は違法であろうとも戦闘機人技術や人造魔導師計画に手を染めるしかなかったのだ。」

「……なんとも凄い人だ。」

地上の平和を守る為なら、マジで悪魔に魂売るつもりなんだなあ。

でもさ、やっぱり平和を守るなら違法や悪事に手を染めちゃ駄目なんだと思う。

青臭い意見だけど、やっぱり正しい方法で守らなきゃ、平和なんてのは意味が無いんだと思う。

違法や悪事で築き上げた平和なんて、何れは瓦解してしまうだろう。

正しい方法で、皆で守ってこそ、平和ってのは維持出来るんだと思うんだよね。

「だが、犠牲の上に成り立つ平和は脆い。何れは瓦解してしまうだろう。」

「……わかっている……だが、わしには……」

「レジアス、お前は常に正しき道を歩むべきなのだ。お前を慕う者達、お前を信じる者達の為にも。」

「……かもしれん、だがわしがした事は許される事では無い。今更正しい道に戻る事は……。」

「まだ遅くなんてないはずです。自らの罪を認める事が出来るなら、幾等でもやり直せるはずです。プレシアやジェイルのように。」

「……」

「レジアス、俺達も協力する。もう一度やり直そう、俺達が夢見た平和な世界を築く為にも。」

「……少し、考えさせてくれ……」

「はい、ですが、なるべく早く結論を出してください」

「わかっている」

もう一押しって感じではある。

でもまあ、ここで無理強いしてもしょうがない。

後はレジアス中將がどう考えるかだ。

ここは、レジアス中將の心意気を信じるしかないだろう。

会談から既に一ヶ月が経過。
その間もレジアス中將は、通信ではあるが旦那と話をしているようだ。

だが、未だに結論は出ていない。
違法に手を染めてしまった自分が正しい道へ戻る事が出来るのかどうか、未だに踏ん切りが付かないなんだろう。

まあ、それも仕方ないと言えば仕方ないんだろう。
すぐさま考えを変えて割り切るなんて、出来る事じゃないだろう。
でも、俺も勘によれば、レジアス中將は多分取引に応じるはずだ。
何となくだけど、そんな感じがするんだよね。

あの人も旦那と同じで、結構熱血タイプの人みたいだから、恐らくは旦那の説得で心が動くはずだ。

それに、今回の取引に応じれば違法に手を染める必要も無くなる。

何せオーバーSが四人に、AAAランクが一人とその他諸々の戦力が手に入るんだ。

正直、オーバーSランクなんて早々いるもんじゃないから、レジアス中將的には喉から手が出るほど欲しいはず。

とはいえ、それもあの人の心持次第なんだけど。
上手くいくといいんだがなあ……。

「アクセル、レジアスから返答があったぞ」

「で、どうだった？」

「司法取引を結ぶそうだ」

「おお、マジか！」

「ああ、これがその詳細だ」
「どらどら……」

旦那から渡された資料の内容を読むと、ジェイル・スカリエッティ、並びに、戦闘機人は地上本部にて社会奉仕として最低十年間勤務。

プレシア・テストロッサに関しては、既に被疑者死亡となっており直接の刑罰は科される事は無い。

しかし、起こした事件の重大さから、こちら最低三年間の社会奉仕義務を課す。

その代りに、各人の罪状の取り消しを行う。

勿論、提供すべき情報とかは全て提供するようにという内容も含まれている。

後、俺や旦那の地上本部での勤務についても了承するとされている。

旦那については、死亡扱いだったのを重症による戦線離脱とし、階級も元の階級と同じ一等空佐とするとある。

俺については特に実績は無いが、今回の事を考慮して二等陸尉として事らしい。

細かい内容については、後日改めて会談し決めようという事も記載されている。

いやはや、レジアス中將も随分と思い切った内容を出して来るもんだなあ。

いいいかな、俺なんかが行き成り尉官待遇なんてさ。

三等陸士位は覚悟してたんだけどねえ。

貰えるものは貰っておくに限るから、別に気にする必要は無いか。しかし、ジェイル達は十年間の社会奉仕義務か……無給で十年はきつついなあ。

生活面とかもあるだろうから、その辺は俺らでカバーすればいいだろうけど、モチベーションの問題もあるからなあ。

何かしら考えておくべきだな。

ともあれ、これで俺達のやるべき事への第一歩が踏み出せた。後は実績を重ねて行き、地上の平和を守りつつ、管理局を内側から変えていく。

言うだけなら容易いけど、かなり厳しい戦いになるだろう。でも、負ける訳にはいかない、全力全開でやったるぜ！

第七話：始動（前書き）

09/02 タイトル修正

第七話：始動

レジアス中将与俺達の間での司法取引に關しての密約が成立し、早半年が経過……俺ももうすぐ十八歳になる。

この半年の間、レジアス中將や俺達はそりやもうクソ忙しい状況が続いていた。

部隊設立の準備や關係各所への根回し、それに司法取引の内容について本局への理解を求める為の出頭など、もう色々とあり過ぎて正直頭が回らない。

んでも、流石はレジアス中將というべきか、關係各所への根回しや司法取引についての本局への説明についてはきっちりやってくれた。

おかげで、司法取引については正式に成立する事となり、晴れてプレシアとジェイル達の罪状は消される事となった。

勿論、社会奉仕義務等がある以上、完全に消えたとは言えないけど、それでも表を歩く分には問題は無くなった訳だ。

これでプレシアは、もう一人の娘であるフェイトに会う事が出来る。

まだ本人的には心の準備が出来ていないようなので、今すぐにといい訳では無いが何れは会う事になるだろう。

しかし、ジェイル達は十年の無償奉仕だから流石にモチベーションの問題もあるなあとと思いレジアス中將に相談したところ、レジアス中將は自分の給料を半分カットしてそれをジェイル達の報奨にする予定らしい。

何でも自分も少なからずジェイルの片棒を担いでいるのだから、

この程度は当然だとの事。

やっぱ漢だねえ、レジアス中将は。
なかなか出来るこっちゃねえぜ。

そのレジアス中将だが、ここ半年の間になんとか憑き物が落ちた
みたいだ。

そのおかげか、相変わらず強持てのおっさんだけど、以前に比べ
て大分親しみ易くなったと専らの評判。

そうそう、レジアス中将の秘書で娘のオーリスさんとも結構仲良
くやってる。

見たまんまの才女って感じの人で、今回の司法取引についての根
回しや調整等を色々とやってくれているらしい。

オーリスさんも、結構キツそうに見えるんだけど、根っこの部分
じゃ凄く優しい人だ。

アリシアやルーテシアも結構懐いてる……何だかんだで面倒見い
いんだよね。

んで、肝心の部隊の設立だけど、これから本格的に動き出す。

その中で現状では課長及び総部隊長をゼストの旦那が務めるとい
う事が決定している。

これはゼスト隊を率いていた経験と実績もあり、地上本部では旦那
の名前はかなり売れているからだ。

やっぱある程度実績のある人がトップにいた方が、何かとやり易
いから。

なお、細かい部隊構成等はまだ決まっていないが、とりあえず分

隊制を取る事になっている。

各分隊等については、これからの課題といった所だ。

実際に部隊が本格的に稼動するには、後三ヶ月はかかるそうだ。

隊舎に関しては以前にゼスト隊が使っていた所をそのまま使うが、設備に関しては戦闘機人のメンテナンス設備もある為、結構納入が遅れそうらしい。

そりゃそうだよな、あの設備ってかなり特殊な設備らしいし。

まあ、その辺についてはジェイルが頑張って色々と改良しているらしく、よりコンパクトでかつ高性能な設備を作っている。

というか、ジェイルの奴、逆に創作意欲を刺激されたのか嬉々として設備の開発に取り組んでいる。

この間も官給品のデバイスを改良したらしくて、テストとして支給した部隊から賞賛の声が上がっているらしい。

もうね、マジで開発中のあいつは活き活きとしているよ。

設備に関してもそうだけど、低ランクの部隊員が使う用の装備を開発中らしくて物凄い勢いで開発しまくっているらしい。

んでだ、そんな中で俺は何をしているかと言えば……修行してるんだよ。

ぶっちゃけ、今の段階ではもう俺に出来る事が無い。

地上本部への登録手続きとかは既に終わっているし、司法取引の方も正式に成立した今となつては後は上層部での調整だけなんだよ。なので、俺のような現場で体張るメンバーはぶっちゃけする事無い……なので、トーレやチンク達と一緒に修行の毎日なのだ。

こんな状況ではあるんだが、あまりにもする事が無いので、とある管理外世界へ修行に行った。

その時に偶然にも違法研究施設を見つけたので、レジラス中將に報告し修行メンバーと一緒に潰しておいた。

その違法研究施設はどうやら古代のロストログア等について研究していたらしく、結構ヤバイ代物も保有していたのでガッツリと回収しておいた。

だが、その中に……なんとまあ、古代ベルカの融合騎がいたんだ。

いやはや、驚いたのなんのって……まさかラミア以外のユニゾンデバイスに巡り合うとはねえ。

しかしこの融合騎、かなり荒っぽい事をされていたらしく、相当ヤバイ状態だったので速攻連れて帰ってジェイルに治療を頼んだ。

まあ、最初はビビってたよ、なんせジェイルの奴、融合騎と聞いた瞬間に鼻息荒くして治療し出すんだもん。

ありや誰だつて引くわ。

でもまあ、その治療の甲斐あってか、今ではすっかり元気になった。

ただ、名前が無かったようなので、皆で相談し『アギト』という名前を贈った。

本人も頗る気に入っているらしい。

よかったよかった。

「なあ、アクセル、あたしのロードになつてくれよ〜」

「だから、俺にはラミアがいるって言ってるだろう」

「でもさあ〜」

「それに俺とお前とは融合相性が良くないのは調べが付いてるじゃないか」

「うう〜」

「それにさ、上手くは言えないが、お前に相応しいロードは何れ現れると思うんだ」

「それって、アクセルの勘か？」

「ま、そんなところ。まあ、それまでは家のお嬢達の護衛を頼むよ。」

「わかった、でも、あたしは諦めないからな！」

「はいはい」

てな感じで、アギトは俺にロードに成ってくれとしつこく頼んで来る。

別にロードになるのはいいいんだが、俺とアギトの融合相性はあんまり良くないからなあ。

これも俺のリンカーコアが特殊な事に起因するらしい。

家の部隊じゃ、一番融合相性がいいのは旦那なので、正式なロードが見つかるまでは主にアリシアやルーの護衛をしながら、必要に応じて旦那と行動して貰う事になっている。

何せ旦那はあれだ、総責任者であるにも関わらず前線にも出る人だからなあ……使える戦力は多い方がいいだろう。

まあ、旦那の実力ならあまり心配する必要も無いと思うけど、油断は禁物だ。

そんな感じで、正式稼動までは俺達実働部隊は修行に明け暮れる事に。

ああ、そうそう、この半年の間にナンバーズの姉妹で、ノーヴェとウェンディという二人が新たに目覚めた。

本来ならナンバーズの覚醒はもつと遅くなりそうだったんだけど、ラミアとプレシアの協力により調整がかなり早まっている。その結果、残りの姉妹も前倒しで覚醒を果たす事になる。

んで、このノーヴェとウエンディだが、これまた個性的というか何と云うか。

先ずノーヴェだが、俺と同じで純粋な格闘タイプのようなのだ。

使うのは型からすると、シューティングアーツに近いようだ。格闘を使う事から、主に俺がトレーニングの相手を務めている。

目覚めた当初は、何と云うか常にイライラしている感じで周りに当り散らす事があり、ある時アリシアを泣かせたもんだから……コボコにしておいた。

強い者が弱い者を泣かすような真似をしちゃいけないからな！

コボコにした結果、今では俺の事を通常は『兄貴』と呼びトレーニングの際は『師匠』と呼ぶようになっていた。

今では最初の頃のイライラ感は無くなり、結構周りとも打ち解けているようだ。

とはいえ、クアットロやドゥーエは苦手らしく、また、教育担当でもあるチンク相手には強く出れないらしい。

まあ、なかなか筋はいいので、これから期待出来る奴ではある。

次にウエンディだが、こいつがまたセインと似たような奴で……もう手を焼いてるんだ。

明るいのはいいい事なんだが……流石に『にいにい』はねえだろ。

しかも、セインと一緒にになって悪戯しやがるし……おかげでアリ

シアが悪戯覚えちまつたじゃねえか！

だもんで、こいつもトーレと一緒にボコボコにしておいた、教育上の愛の鞭である。

ノーヴェは固有技能や固有武装の関係上、所属するのは前線に出張る部隊になるだろう。

ウェンディも固有武装の関係上、後方よりも前線に出るタイプだ。

まあ、とりあえず、こいつらには先ずは社会生活を営む上での常識を叩き込まねばならない。

ので、社会一般常識などは専門の講師を呼んで教えて貰っている。

……悪い事したら、速攻俺とトーレの肉体言語によるお仕置きが待っているので、あまり悪さはしない。

多少の悪戯程度なら構わないが……時折ウーノがぶち切れているのがねえ……。

そんな感じで、戦力の方も順調に揃い始めている。

このまま行けば正式稼動も問題は無いだろう。

唯一つだけ気になる事があるとすれば……最高評議会だ。

今回の事は既に管理局全体に知れ渡っているのに、奴らからは一向にアクションが無い。

レジাস中將が問い合わせを続けているようなんだけど、一向に繋がらないらしいんだ。

一体どうなってるんだろう？

ジェイルにも聞いてみたが、ジェイル自身もわからないらしい。専用回線も繋がらず、連絡を取る事が出来ないんだと。

……まあ、いないならいいで別にいいけどさ。
どうせ、あいつら邪魔なだけだし。

ジェイルから奴らの正体について聞いたけど……マジでびっくりしたよ。

なんせ最高評議会の正体は……脳みそなんだもんよ！

何処の漫画の話だと思ったけど、事実あいつらは旧暦の時代から生き続けている存在らしい。

んで、自分らの手で守られてこそ、次元世界の平和は守られるという考えを持つらしいんだけど……その為にはどんな事でも許されるという考えを持つらしい。

なんだかなあ……脳みそだけで生きてるから人間的な考え方が出来なくなってるのかねえ。

でもまあ、干渉して来ないなら来ないで放置でいいだろう、邪魔して来たら全員でボコボコにすりゃいいし。

んでまあ、部隊の正式稼動にはまだ時間があるんだが、せっかくミッドに戻って来ているので久々に実家に顔出しておこうと思う。
長らく顔出してないからなあ……多分母さん怒っているだろう。

あれでも結構怒ると怖いんだ。

何度晩飯抜きにされた事が……今思い出だけでも振るえが来るぜ。

「お兄ちゃん、どうしたの」

「ああ、久しぶりに実家に顔出そうかなって」

「お兄ちゃんのお家？」

「そそそ」

「アリシアも行く〜！」

「そだな、どうせ暇だし行くか」

さてと、何かお土産でも……といっても、特にこれと言った物は無いしなあ。

う〜ん、どうしよつかねえ。

「あら、アクセル、何処か行くのかしら？」

「ああ、実家に顔だそうと思ってさ」

「実家ですって?!」

「うん、暇だったからね。最近あんま連絡してなかったしさ。」

「アリシアも行くの〜！」

「そ、そう、アリシアが行くなら……私も行こうかしら」

「仕事あんじゃねえの？」

「だ、大丈夫、全部終わらせてるから！」

「そうか、なら一緒に行くか」

「え、ええ、じゃあ直ぐに準備するから待ってて頂戴！」

「あいよ〜」

何をあんなに意気込んでいるんだ？
たかが、実家に顔出すだけなのに。

しかし、実家か？本当に久しぶりだなあ。

本来ならまだ戻るのは先の予定だったけど、まあ、今の状況じゃ仕方が無い。

本当ならもつと色々な世界を旅して修行したかったけど。

でもまあ、あれだ、修行相手としては旦那やトーレもいるし、いざとなったらラミアに頼んで管理外世界に連れてって貰えばいい。

そう考えると、今の環境って修行するにはかなりいい環境なんじゃないだろうか？

旦那のような歴戦の猛者とも組み手出来るし、トーレ達みたいな特徴のある戦い方をする奴らとも組み手出来るしさ。

うん、やっぱり修行環境としては申し分ない環境だわ。

基礎的な修行は何処でも出来るし、案外よかったかもしれないなあ。

まあ、サバイバルが無くなるのは少々勿体無い気もするけど。
やっぱ、獲物の取り合いというある種の生存競争は、いい刺激になるからなあ。

「お、お待ちせ！」

「ああ、んじゃ、行くか」

「あら、アクセルさん、何処に行くのかしら？」

「ウーノか、実家に顔出して来る」

「実家？ アクセルさんの？」

「そだよ」

「……！ わ、私も行きます！ 待ってて下さい」

「て、おい……行っちゃったよ……何をそんなに慌てるんだ？
たかが実家に顔出すだけなのに……どしたんだろうな？」

『……はあ、本当にわからんのかお前は』

「何が？」

『やれやれ、これでは女性陣は苦勞する……』

「????」

その後ウーノだけでは無く、ラミアとドゥーエまでも合流し、漸く実家に向けて出発。

しかし、プレシア達はやたら気合入ってるけど……何でだろう？

別に実家に顔出して少しのんびりするだけなんだけどねえ。

これといって特別な物も無いし、そこまで気合入れる程じゃないと思うんだが……。

でもまあ、こういう事を言つとまたゲインに色々言われそうな気がするんだよねえ。

つか、いい加減ゲインもはっきり言ってくればいいのにさ。

やれやれ、やっと実家に着いたぜ。

つつても連絡してないから、驚くかもしれないなあ。

多分母さんはいるだろうけど、父さんいるかな？

この時間だと、仕事行ってると思うんだが……ま、いいか、とりあえず入ろつと。

「ただいま」と

「ア、アクセル！」

「お、母さん、ただいま、久しぶり」

「ただいまじゃないわよ、もう、連絡もしないで！」

「あはは、ごめんごめん、色々あってすっかり忘れてた」

「本当にもう、この子は！」

母さんも変わらないなあ、昔のまんまだわ。

やっぱりこう、家族が変わらずにいてくれるってのはいい事だねえ。

なんというか、こう、落ち着けると言うべきか何と言うべきか。
とりあえず、家人ってのんびりしよつと。

「アクセル、後ろの方々は？」

「ああ、そうそう、俺の部隊の仲間」

「部隊？ 管理局に入ったの？」

「そそそ、地上本部に所属する事になったよ」

「そうだったの、あ、自己紹介もしたいから中に入って頂戴」

母さんの勧めるままに、皆して家に入ったが、皆やたらと硬い気がするんだけど。

そんな緊張しなくてもいいだろうに、別に普通の家なんだからさ。

でもあれだなあ、やっぱり実家は落ち着くなあ。

今まであくせくしてたから、余計に落ち着くわ。

当分の間、実家で過ごそうかな？

……いかにいかに、それじゃ修行にならないじゃないか。

やっぱり住み慣れた我が家の誘惑というのは、結構凄いものがある。危うく負けてしまふところだったぜ。

《リビング》

リビングに着いた途端、アリシアは物珍しそうに色々触っている。そりゃそうか、目覚めてからこっち、サバイバルと研究所暮らしだったもんなあ。

普通の家に住んだ事なんて、ほとんど無いらしいし。まあ、そのアリシアも、後で母さんの着せ替え人形にされる事だろう。

何せ母さんてば、女の子欲しがってたから。アリシアなんて、格好の餌食だ。

つか、他の皆は母さんと挨拶しているのか。別にそこまで畏まった事する必要は無いんじゃないかね？

「アクセルったら、何時の間にこんなに女性を引き連れて来るようになったのかしらね」

「えゝ別に普通じゃない、だって友達だし」

「……はあ、そういう所はお父さんによく似てるわね」
「へ？」

「ちゃんと責任は取りなさいね」

「……よくわかんないけど、わかった」

「それじゃ、母さんは夕食の仕度があるからゆっくりしてなさい。今日は食べて行くんでしょ？」

「あゝそだね、久しぶりに食べて行くかな」

「それじゃ、お客様の分も用意するわ」

「あ、あの、私達は」

「いいから食っていけて、結構美味いからさ」

「い、いいのかしら？」

「大丈夫だろ、後でジェイル達には俺から言っておくよ」

「そ、そう……じゃあ、お言葉に甘えてご馳走になっていくわ」

そうして久しぶりに実家での夕食を堪能。

途中で父さんも帰って来たのだが、一言『おかえり』だけだった。

なんとも素っ気無い感じではあるけど、父さんは俺の事を信用してくれてるからこそ、あれだけで済ませたんだろう。

うん、あれで十分だ。

ただ、父さんは俺が連れて来たプレシア達を見て驚いている。

そりゃまあ、全員美人だし、驚くのも無理は無い。

にしては驚きすぎじゃね？

管理局は美人揃いなのは有名なんだから、そこまで驚かなくてもいいでしょうに。

つか、父さんも母さんも、なしてアリシアを孫扱いしてんのさ。

別に俺とプレシアは結婚してないぞ？

どっちかって言えば、アリシアは妹分なんだけどねえ……全くこ
ういう所は父さんも母さんも変わらないなあ。

その方が俺としても嬉しいけどね。

その後、皆で夕食を食べて、俺達はまた本部に戻る事に。
夕食の最中、修行の旅の話で結構盛り上がった。

特にあの惑星で戦ったテストの相手との死闘には、アリシアは大
興奮。

まあ、母さんは心配そうだったけど。

父さんは、ラミアと温泉に一緒に入った話としたときに……何だ
か恨めしそうな目で見てたよ。

……母さんに叩かれてたけどな！

一応今後暫くは地上本部勤務であると伝え、可能な範囲で戻ると
も伝えてある。

とはいえ、これから忙しくなるから当面の間は実家に戻るのは無
理っぽい、何せ部隊の本格始動はこれからだし。

落ち着けば多少は時間も取れるだろうから、実家に戻る事も出来
るんだろうけど、果たして俺達の部隊に落ち着く暇なんてあるんだ
ろうか？

滅茶苦茶忙しい部隊になりそうな気がするが……望むところだぜ！

その後修行を続けながら部隊の本格稼働の為の準備に奔走され、あつという間に三ヶ月が経過してしまった。

隊舎や設備等も一通りは整い、後は部隊名と各自の役割を決めればいよいよ稼働出来る段階まで漕ぎ着けた。

本来部隊を新設する場合、もっと時間が掛かるものなんだが、本来しなければならぬかなりの手順をすっ飛ばしている。

何でもレジアス中將が早く稼働させたいからと結構無茶したらしい……後でオーリスさんが地獄見るらしいけど、大丈夫なんかな。

まあ、あれだ、とりあえず部隊名を決めるとしよう。

……オーリスさんには後で何か礼をしとこつと。

しかし、皆で色々悩んだんだけど、なかなかいい部隊名が思いつかなくて。

昔の旦那が指揮していた部隊と同じ名前じゃ、何だか新しい部隊って感じがしないし……うむむ……。

「何かいい名前無いかなあ」

「そうねえ……」

「やっぱり部隊名は大事よね」

「ゲイン、なんかいいの無いか？」

『そうだな、先代が一時期率いていた部隊があつたな』

「その部隊名は？」

『シャドウミラーだ』

「へーなんかカッコイイな、意味はどんな感じなのさ？」

『常に影となり平和を守り、鏡のように世界全てを映し出すという意味らしい』

「ほうほう、俺達にはあってんじゃない？」

「そうね、私達の任務上、結構裏方に回る事も多いでしょうし」

「そうだな、私は構わんと思うぞ」

「んじゃ決定、俺達の部隊は『シャドウミラー』だ！」

うん、やっぱりいいね！

俺達って、表に出る事もあるけど、やっぱり裏方に回る事が多くなる。

何せ所属しているメンバーは、大概の場合脛に傷があるから、場合によっては表に出られない事もある。

そんな部隊にとって、あの名前はなかなかいいと思う……少しばかりかつこ付け過ぎな気もするけど。

とまあ、部隊名は決定したので続けて各自の役割とコールサインだ。

役割については、残りのナンバーズ姉妹の事も含めて決める必要性がある。

「役割については……どうするか」

「分隊制を取る事は決まっているからな、それに各自の能力を合わせて決めるべきだろう」

「ふむ、俺とラミアは同じ分隊の方がいいだろうねえ」

「そうだな」

その後も色々議論を重ねた結果、各自の役割、分隊名、コールサインが決定した。

改めて考えてみると、物凄い部隊かもしれない。

こんな部隊に襲われたら、犯罪者も裸足で逃げ出すだろう。というか、戦う前から降参されるんじゃない？

ま、あれだね、俺達みたいな部隊が戦わないのはそれに越した事は無いんだろう。

俺達のように強力な部隊は、抑止力になればそれでいい。

「後は辞令を待つだけか」

『そうですね、アクセル様』

「しかし、今考えてみるとあれだね、随分とやる事多いよなあ」
『確かに、一部隊としては過剰戦力もいい所だろう』

「だよなあ……自重しなかった結果とはいえ……やり過ぎたかも」

『しかし、ミッドチルダの犯罪状況等を見たが、これ位の戦力は必要だろう』

『ええ、通常の陸士部隊だけでは、正直対処出来る状況ではありません』

「だねえ……まさかここまで酷いとは思わなかったよ。陸士の人達ってやつは凄いなあ。」

『問題も多いがな、管轄における縄張り争いなど』

「ああ、そりゃ問題だよな。縄張り争いの結果、出勤が遅れるなんて事もあったみたいだし……それじゃ本末転倒だよなあ。」

『その辺りの解消も期待されているようですね』

「みたいだね」

陸士部隊間の縄張り意識はそう簡単に変えられるもんじゃなさそうな気がする。

こういった問題って、トップを挿げ替えて一から考え直さないと駄目なんじゃないだろうか。

つっても、陸士部隊はそれぞれ人数がギリギリの状態で遣り繰りしているから、例え縄張り意識が消えても管轄を超えるのはなかなか難しい。

そういった状況もあるから、俺達には管轄を超えた捜査権限が与えられる事になっている。

何せ人数は他の陸士部隊より少ないけど、各自の能力が高いから単独行動も取り易い。

特にドゥーエやセイン、チンクなんかは単独行動には慣れている。

基本的にはあれだろう、捜査情報を元に俺とラミアとトーレの分隊で特攻掛けて一時制圧。

その後に旦那の主力分隊で完全制圧って感じになるんだろうなあ。

この辺の動き方は、今後色々な事件を担当する中でノウハウを蓄積していくのがいいだろう。

何せ初めての試みが多いから、ノウハウが全くと言っていい程ないんだよね、俺達の部隊って。

「まだまだ学ぶべき事は多いか」

『当然だ、アクセルはまだまだ鍛えねばいかんからな』

「わあってるよ、俺だってまだまだ未熟って自覚はあるさ」

『今のままでもある程度は戦えるだろうが、まだまだ経験が足りない』

い』

「そつだよなあ、もつと経験積まないと」

『部隊が稼動を始めたら、管理外世界での修行は出来そうもありませんね』

「それに関しては仕方ないさ。まあ、家には旦那とかトーレもいるから修行相手には事欠かないけど。」

『うむ、何れは集団戦闘の訓練もすべきだろう』
「だね」

残りのナンバーズ姉妹が全員揃ったら、集団戦闘訓練もしてみたいな。

俺達って個人個人は強いけど、連携が弱いからなあ。

やっぱり部隊として動く以上、連携は大事だろうから訓練の一環として入れておくべきだ。

後々訓練内容を決めるときに、旦那とも相談しておこう。

そしていよいよ俺達に辞令が発布される日がやって来た。
これから俺達も本格的に部隊として動く事になる。

正直不安が無い訳では無いんだが、これだけのメンバーが揃ってるんだからやれるだろう。

当面の間は地道な捜査活動や治安維持活動をしなから、廃棄区画

の調査などもししていく事に。

細かい実績を積み重ねて有効性を証明出来れば、担当する事件の規模なんかも変わってくる。

なので、全員一様に気合入ってる。

おっしやあ！

俺も気合入れてやったるぜい！

EX話：部隊設定（前書き）

09/02 一部修正

09/04 分隊を一部修正

EX話：部隊設定

名称：シャドウミラー

総責任者：ゼスト・グランガイツ

所属：地上本部

直属上司：レジアス・ゲイズ

部隊人数：十七名

状況により増加する予定あり

部隊構成：アサルト分隊・アサルト1：アクセル・ターナー

アサルト2：ラミア

アサルト3：トーレ

イツ

ストライカー分隊・ストライカー1：ゼスト・グランガ

ーノ

ストライカー2：メガーヌ・アルピ

ーノ

ストライカー3：プレシア・テスト

ロツサ

ストライカー4：セツテ

ストライカー5：ノーヴェ

ストライカー6：ウエンディ

ストライカー7：ディード

ストライカー8：ディエチ

ゴースト分隊・ゴースト1：ドゥーエ

ゴースト2：チンク

ゴースト3：セイン

ゴースト4：オットー

後方支援部隊 - ジェイル・スカリエツィ

ウーノ

クアットロ

マスコット：アリシア・テストロッサ

ルーテシア・アルピーノ

護衛：融合騎アギト

部隊役割：アサルト分隊〓高火力による一点突破を主とする先行突撃部隊

ストライカー分隊〓最大人数を誇る主力部隊

ゴースト分隊〓潜入等の特殊任務を主に担当
後方支援部隊〓指揮、情報分析、装備開発等

部隊隊舎住所：ミッドチルダ郊外の森林地帯との境

設立目的：地上の治安維持

大規模組織犯罪対策

高ランク魔導師犯罪対策

廃棄区画の調査

装備：各自が持つデバイス

陸士部隊用制服

輸送用ヘリ

装甲車

ほぼ全員が固有の武装やデバイスを所持している為、官給

品の必要性が無く予算が浮く

予算：通常の陸士部隊と同じ額

保有権限：陸士部隊の一時的な指揮権限

管轄を超えた捜査権限

<概略>

二代目拳王、アクセル・ターナーにより発案された地上本部所属部隊。

所属するメンバーは、二代目拳王アクセル・ターナー、アクセルのデバイスであるラミア、ゼスト・グランガイツやメガーヌ・アルピーノ、元広域次元犯罪者のジェイル・スカリエッティとその配下十数名、一部では有名な大魔導師、プレシア・スタロツサ等。

本局からはあまりの過剰戦力の為、解散を求められているが、後見人であるレジアス中将が一貫して解散を拒否している。

これは、地上本部戦力では、大規模組織犯罪や高ランク魔導師による犯罪に年々対処出来なくなっているという理由からである。

なお、聖王教会としては、二代目拳王であるアクセル・ターナーが地上本部に所属している事を認めておらず、聖王教会に所属するよう強く求めている。

当の本人は聖王教会に所属する気が一切無い為、聖王教会からの再三の出頭要請にも応じる気配が無い。

しかし、治安維持や組織犯罪には十二分な成果を挙げており、地上に住む人々には受け入れられている。

レジアス中将としては、この部隊を契機として地上部隊間の縄張り争いを解消したいと考えている。

その為に管轄を超えた捜査権限が与えられている。

良くも悪くも常識から懸け離れた部隊である。

第八話：胎動

一週間前に辞令が降り漸く部隊が稼動し始め、さあこれからつて時に司法取引についてとある三人から説明を求めると申し入れがあった。

その相手は『高町なのは』『フェイト・テストロッサ・ハラウン』『八神はやて』の三人。

この三人は、例の<ジュエルシード事件>と<闇の書事件>の中心人物達。

そして、今では管理局本局内部でもかなり有名になっているらしい。

『高町なのは』はエースオブエースと呼ばれ、本局所属の教導隊に属していて色々な部隊を回っているらしい。

犯罪者からは『管理局の白い魔王』とも呼ばれ、悪党には一切の情け容赦ない砲撃をぶつ放す事で恐れられている。

……ぶっちゃけ、こいつのが極悪人なんじゃねと思う。

こいつが犯罪者逮捕に向かった後つて……資料によると結構被害大きい……何考えてんだ、街を壊すつもりか？

『フェイト・テストロッサ・ハラウン』は、言わずもがなプレシアのもう一人の娘であり、現在はハラウン家の養女となっている。

現在は執務官であり、色々な事件を捜査しているようで……特にジェイルをしきりに追っていたらしい。

その最中追い続けている相手が司法取引により無罪となったのだ

から、恐らくは驚いた事だろう。
しかも、その司法取引には自分の母親の名前まで載ってるんだからねえ。

恐らくはその両方の事があって、今回問い合わせて来たんだろう。まあ、来ると思ってたし、別段驚く事でも無いんだがね。

最後の一人『八神はやて』は、＜闇の書事件＞で現夜天の書の主となり管理局へ加わった。

闇の書事件では、結構多くの被害者が出ている。

贖罪の為にと管理局へ入局し頑張っているらしい。

その点は凄いと想うが……今でも被害者の中には後遺症に悩まされている人がいるとか。

しかも、本人達にはその情報は知らされていないらしい。
何だかねえ……ジエイルの件よりずっと性質悪い気がするんだけど。

まあ、本人は罪を認めて色々と頑張っているようなんだけど……
どうもなあ、やってる事見ると何だか急ぎ過ぎてないかと思う。
まるで何かに怯えているような感じすら受ける。

んでまあ、この三人から面会を求められたので隊舎にて待機中なのだ。

約束の時間までは結構あるんで、それまで暇なんだよねえ。

「お兄ちゃん、アリシアのお姉ちゃんが来るってほんと？」

「ああ、マジだマジ」

「やったあ！」

本来はアリシアが姉なんだが……どう考えても年が離れすぎている。

ので、アリシアには、フェイトは姉だと教えてある。

プレシアもこれについては了承している。

んが、今日はプレシアは隊舎の奥に引っ込んで隠れてしまった。

まだ、フェイトに会う決心が付かないらしい。

……いい加減腹括れつてのになあ。

ジェイルも今にはここにはいない。

プロジェクトF・A・T・Eの事もあるし、自分がいると面倒が起きるだろうからと、今はレジアスのおっさんのところに避難している。

別に隠れる必要なんて無いと思うんだけど。

司法取引その物は正式な手続きに則った物だし、それに見合うだけの物は用意したんだ。

あ、そうそう、レジアスのおっさんに渡した例の管理局一部上層部や聖王教会の不正の証拠により、上層部にメスが入ったようだ。

近い内に立憲され、法の下に裁きを受ける事になるらしい。

この事態によって海の方じゃ上を下への大騒ぎと言う事で、レジアスのおっさんは頗る上機嫌。

おかげでまた飲みに連れて行かれ、えらい苦労したぜ。

これで多少は管理局も風通しが良くなるといいんだけど。
何せ腹黒いの多いからなあ……特に海には。

『アクセル様、例の三人が到着したようです……ただ、予定より人数が多いようです』

「まあ、問題は無いだろ。そんじゃ迎えに行くか、アリシア、行くぞ」

「はぁーい！」

さてさて、一体全体何を言ってくるのやら。

何も無ければいいんだけどねえ。

隊舎の入り口に向かうと、そこには……六人と一匹の狼と一人の妖精が居た。

全員が全員それなりにいい感じの気迫を纏ってる。

特に後ろに居るピンク髪は、旦那に匹敵する程の腕前だ。ありや間違いない騎士だろうなあ。

それにあの妖精っぽい……ありやアギトと同じ融合騎か？
珍しいな、融合騎を従えているなんてさ。

「態々ご苦労さん、ここの部隊の分隊長を務めるアクセル・ターナード」

「貴方が二代目の拳王ですか？」

「およ、俺の事知ってんの？」

「はい、カリムから聞きましたから」

「あゝあの人な、て、あの人まだ俺を騎士にすんの諦めてないの？」

「そうみたいです」

「うへゝいい加減諦めろよ、しつっこいなあ……まあ、いいや、立ち話も何だしロビーに行こうか」

「はい、お願いします」

今話していたのが、『八神はやて』か。

……ありや、狸だな、間違いない。

《ロビー》

全員席に着き、軽く自己紹介をしておいた。

アリシアが自己紹介した時、特に高町とフェイトが驚いていた。

二人は直にアリシアの死体を目撃している訳だから、驚くのも無理は無い。

ちなみに、自己紹介の際にフェイトの妹だと言う様に言い含めてあり、その事についても全員に説明をしておいた。

本来ならアリシアが姉になるんだけど……生きていた期間が違い過ぎるからこればかりはしょうがない。

下手にアリシアが姉だと言ってもわかんないだろう、何せアリシアはまだまだ子供だから。

事前にアリシアにもフェイトの事を教えておいたので、速攻で懐いている。

多分、アリシアとフェイトは双子のような存在だから、よくわかるんだろう。

「んじゃま、自己紹介も終わったし、本題に入るが……ぶっちゃけ説明求めるって、何を説明すりゃいいんだ？」

「先ずは何でジェイル・スカリエッティのような次元犯罪者が司法取引なんて結べたかや」

「司法取引自体は正式な手続きに則ってるよ。ちなみに、取引材料を集めたのは俺達な。」

「……なんでそんな事をしたんですか」

何でって言われてもなあ、友達の為に骨身を削るのは当たり前的事だろ？

別におかしい事でも何でもないじゃんか。

それともあれか、ジェイルが次元次元犯罪者だから、友達になるなんておかしいとか思ってたんの？

それだったら自分らもそうじゃねえか、元々犯罪犯している事に違いは無いだろうに。

「別に理由なんてねえよ、ジェイルとは暫くの間共同生活してて、その間に友達になっただけ。友達の為に骨身を削るのは別に不思議じゃねえだろ？」

「友達って……相手は次元犯罪者ですよ！」

「それは関係無いだろう。それにさ、悪いけどジェイルを何時までも犯罪者扱いしないでくれないか。それ言ったら八神も同じようなもんだろ？」

「はやてちゃんと一緒にしないで！」

「そうだ、主はやてをあのような男と一緒にしないでいただく」

……随分な言われようだな。

覚悟はしていたが、ここまで毛嫌いされるとは……なかなか堪える。

そりゃ八神に比べればジェイルの方が犯した罪は大きい、それこそ比べ物になら無い位に。

ジェイルと八神じゃ世間に対する影響度だって格段の開きがある。

だが、そんな事は言われなくたって、頭の悪い俺でもわかってる。

でもさ、罪の大きさが違おうが何だろうか、結局は同じだろ、自分の罪を悔いて償おうと足掻いているのは。

「確かに八神に比べればジェイルが犯した罪は比べ物になら無い位に大きい。けどさ、あいつも八神と同じで自分の罪を償う為に足掻いてるんだよ。その点に関しちゃう同じだろ。」

「そ、それは……」

「そう、だが……」

「信じてくれないって言わない。ただ、あいつが本気で償おうとしてるって事だけはどうかわかってやって欲しい、この通りだ!」

俺は目の前にいる連中に向け思いつきり頭を下げる。

それこそ、机に頭突きする勢いで。

ジェイルは俺にとって大事な友達なんだ、その友達の為なら俺は頭でも何でも下げてやる。

土下座しろってんならしてやるさ。

あいつは確かに元犯罪者ではある、だけど本気で償いをしようと頑張ってるんだ。

だから、それだけはどうかわかって欲しい。

「あ、頭上げて下さい?!」

「いいや、わかってくれるまで俺は頭を上げるつもりはねえ!」

「な、何でそこまで……」

「ジェイルは俺の友達だ、俺は友達の為なら頭でも何でも下げてやる。土下座しろってんならしてやる、腹切れってんなら切ってやる、俺は……あいつを信じてるんだ!」

『もういいよ、アクセル』

「ジェイル……」

『君のその言葉を聞けただけで十分さ。全く、私もいい友人を持ったものだ、心からそう思うよ。』

こ、これが本当にあの広域次元犯罪者のジェイル・スカリエッテイかいな。

こんな顔、本当の悪人に出来る顔やない。

この人は本気で償おうとしてるんやね。

私と同じように……。

凄いお人やね、アクセルさんて。

あのジェイル・スカリエッティをここまで変えてしまっただなんて。

「ジェイル・スカリエッティが罪の償いをしようとしている事は貴方の言葉と今の本人の態度でわかりました。無礼な事を言ってしまった、申し訳ありませんでした。」

「わかってくれりやそれでいい、俺もすまなかつたな、酷い事言っちゃまってさ」

「ええんです、私も礼儀も弁えず色々言ってしまった……」

どうやら八神はわかってくれたみたいだな。

まあ、信用しているかどうかは別にしてください。

でも、一人でもわかってくれたんならそれだけでも嬉しい。

何れは多くの人がこうして八神のように、ジェイル達の事を認めてくれると嬉しいんだけどなあ。

「他の面々はどうか？」

「……確かにはやてちゃんの言う通りかもしれませんが……でも、私は今すぐに理解するのは無理です」

「私は……少しだけならわかるつもりです……私も同じような事をしていますから……」

「そっか……まあ、俺もこの場で完全に理解しろだなんて無茶を言うつもりはない。ただ、時間を掛けてでもいいからわかる努力だけはしてやってくれ。」

自分の価値観とかもある、今この場で全てを理解して貰うのは到底不可能だ。

特に海に所属している連中じゃ、広域次元犯罪者ってだけでも拒否反応が出るだろう。

俺みたいに今まで管理局との関わりが薄いならまだしも、こいつらは九歳位から管理局にいるんだ。

こういった反応になるのはしょうがない。

特に高町はこういった事には強い拒絶反応を示すみたいだからなあ。

所謂潔癖症ってやつなのかもしれない。

まあ、それはそれで構わない。

実際の所、こいつらが反対した所で司法取引その物は覆す事は出来ない。

もし覆そうって言うなら、俺が全力で阻止する。

……ここにいる皆は、俺にとっては大事な身内なんだから。

その後も引き続き、ジェイルやその娘達であるナンバーズについて、司法取引の詳しいデータを交えながら解説。

その際に集めた証拠がきっかけとなり、上層部にメスが入っている事。

今まで捜査に進展の無かった犯罪組織や違法研究施設についても、制圧の準備が進んでいる事。

このようなデータを見せた上で、司法取引の正当性を説明。

勿論、正当性の説明に関しては、事前にラミアやウーノ達が準備してくれている。

返ってくるであろう反応や質問にも対応している、凄いいマニュアルを作ってくれている。

とはいえ、マニュアル通りに受け答えしていたら、本当の理解を得る事は出来ない。

だからこそ、俺は自分の思いのたけをぶつける事にした。

おかげで、八神やザフィーラ、シャマルにフェイトといった面々はある程度は理解を示してくれている。

まあ、高町やヴィータ、シグナムといった面々はまだそこまでは至っていないが……何れは理解してくれるといいかなと思う。

続けてプレシアについての説明なんだけど……どうやって説明したもんか。

正直に蘇生した事を説明してもいいんだけど……信用されないだろうしなあ。

まあ、蘇生したのは事実だから、信用されなくても構わないけど下手な事を言うとなんだか面倒な気がする。

頭硬そうだもんなあ……特に高町とシグナム辺りは……。

それにプレシア本人が隊舎の奥に引っ込んでしまってるし……。うむむ、どうしよ、無理矢理にでも連れて来るか？

「それで、プレシア・テストロツサ関係やけど……本人は何処にいるんです？」

「それが……未だハラオウンに会う決心が付かないらしくて……隊舎の奥に引っ込んでしまってるんだ」

「あゝなる程……」

「……母さん……私に……会いたく無いんでしょうか……」

いや、そんな悲痛な顔しないでくれよ。

別にあいつも会いたくない訳じゃなくて、決心が付いてないだけなんだからさ。

しかし、このままじゃ流石に不憫だし、かといって本人はあれだ

しなあ……うん、やっぱり無理矢理にでも連れて来るべきか。
このままだと、プレシアも何時まで経っても決心付かないだろうし。

「……よしわかった、んじゃプレシア連れて来るから、少し待って
てくれ」

「いいんですか？」

「ああ、どの道このままじゃプレシアも何時まで経っても腹括れない
だろうからさ」

「わかりました、ここでお待ちしています」

「ああ、そうしてくれ」

さてと、プレシアの部屋に来たが……案の定鍵掛けて籠城してや
がる。

しかも、デバイス使ってパスワードまで掛けてやがる……どうし
てこう無駄にスペック高いんだ。

とりあえず、プレシアの部屋の扉をノックしてみるが反応が無い
……。

仕方ないので強めにノックしてみる。

「おい、プレシア、出て来いよ、フェイトがお前に会いたいって
さー！」

「……………」

だが反応が無い。

中にいるのは間違いないんだけど……。

あんにやろつめ、どうあっても出て来ないつもりか。
しょうがねえ、ぶち破るしかねえか。

「ゲイン、やるぞ」

『あまり気は進まないが仕方ない』

「ふう……………せゝの！」

思いつきりを込めて扉に向けてタツクル！

その際少しばかり魔力が籠ってしまったのはご愛嬌だ。

んで、扉をぶち破ると……………今にも逃げ出そうとしているプレシア
がいた。

……………娘相手に何をそんなにビビってるんだか……………。

「ちょ、ちよつとアクセル?!」

「なゝに転移魔法まで使って逃げようとしてんだよ……………」

「だ、だって……………!」

「はぁ……………」

やれやれ、子供じゃないんだから、いい加減覚悟決めろってのに。
とにもうつ、手間の掛かる奴だ。

つつても、このまま話しても埒が明かないし逃げられても面倒
だ。

仕方ないからバインド掛けてこのまま運ぶか。

『ゲイン、プレシアにバインド』

『いいのか？』

『しょうがないじゃんか、逃げるんだもんよ』

『……致し方ないか』

ゲインによりバインドが発動。

プレシアは抵抗する間も無く捕らえられた。

あんまりこういった手段は取りたくないんだけどねえ。

……でも、プレシアまた逃げ出しそうだし勘弁してくれ。

「は、放して！」

「駄目だったの、このまま担いで運んでく」

「お、お願いだから放して頂戴！ まだフェイトに会えないのよお！」

「だから、いい加減腹括れって。そんなんじゃ何時まで経っても会えないよ。」

簀巻き状態のプレシアを肩に担ぎ上げる。

このまま連中が待つロビーへ向かおう。

「んじゃ、行くぞ」

「いやぁ……お願いだから許してえ〜！」

「いい加減にして覚悟決めるこった」

肩の上で喚いているプレシアは放置して、ロビーに戻るとしよう。

これでいよいよ数年ぶりの親娘の対面だ。

いやはや、ここまで長かったなあ……あの時蘇生して以来この為

に色々頑張ったし。

さて、感動の対面となるのかな。

プレシアを強制的に連れ出し、ロビーに戻った瞬間、高町とフェイトの二人が非常に驚いたようだ。

プレシアが虚数空間に落ちるのを目撃したのは、この中じゃ二人だけだし。

ただ、他の面々はなんというか、俺に担がれている状況を見て少し呆れている感じだな。

無理も無い、バインドでぐるぐる巻きにしてあんだから。

驚いてる面々を他所に、プレシアをフェイトの目の前の席に座らせ、バインドを解除。

流石に此処まで来ればプレシアも逃げ出す事は無いだろう……多分。

「お待たせ」

「な、何だか凄い状況ですね……」

「逃げ出そうとしたもんでね、仕方なくさ」

「そ、そうですか……」

その後、プレシアとフェイトはお互いに見つめあったまま微動だ

にしない。

下手に何か言うのもあれだし、とりあえずこのまま様子を見るしかないだろう。

にしてもあれだよなあ……久々の親娘の対面だと言うのに些かギヤラリーが多過ぎないだろうか？

先に全員を別の部屋に移しておくべきだったかな……失敗したかも。

あれからどれ位経っただろう、未だに言葉を発しない。

周りも固唾を呑んで見守っている状況なので、やたらと静かに感じる。

しかし、もうかなりの時間二人は固まっただまだ。

どうしたもんかねえ……と、そんな事を考えていたとき、フェイトが口を開いた。

「……か、母さん」

「……フェイト」

だが、言葉が続かない。

きつと、言うべき事が多過ぎてどうしていいかわからないんだろう。

そりやそうだよなあ、お互い数年ぶりの再会で、しかもプレシアは死亡扱いだった訳だし。

普通であれば、もう二度とこうして顔を合わせる事も出来なかったんだから。

「……あ、あの……本当に……母さんなんですか……」

「……ええ……久しぶりね……フェイト……」

「……は、はい……」

「い、今更言えた義理じゃないけど……大きく……なったわね……フェイト……」

プレシアの言葉を聞いた瞬間、フェイトの眼から大粒の涙が零れ落ちた。

プレシアも顔をくしゃくしゃにして泣いている。

「母さん……母さん！」

「フェイト！」

お互いの事を呼び合いながら、涙を流し抱き合う二人。
万感の思いが籠っているんだろう。

いやはや、いいものだ、親娘の涙の再会つてのは。

テレビとかでたまに見るけど、こうして直に見ると感慨も一押しだなあ。

『……いいものだね、親娘の再会というのは』

『ああ、ジェイルか、何だよ通信で見てたのか？』

『一応はね。しかし、昔の私ではこんな素晴らしい光景は……眼にする事はなかっただろう。』

『そだな』

ジェイルもモニタの向こうで感動している。

他の面々も同じように、涙を流して感動している。

特にフェイトと付き合いの長い高町は感動も大きいだろう。

とはいえ、これから説明しなきゃならないんだが……さて、どうしたもんなあ。

何しろ蘇生だからなあ……下手に本局に知られるとかなり面倒な事になるだろう。

……特に一部の高官は、酷いになるとロストログアの私的利用とかもあつたみたいだし。

確実に何か言って来るだろうし……プレシアとアリシアに被害が及ぶかもしれない。

うむむ……どうしたものだろうか。

「け、けど、どうしてプレシアさんとアリシアちゃんが生きてるんでしょうか？ 確かにあの時私とフェイトちゃんは……虚数空間に落ちるプレシアさんとアリシアちゃんを見ているのに。」

「あゝそれなだけださ……説明するにしても正直かなりヤバイ内容になる。誰かに知られるとプレシア達にも被害が及ぶ可能性がある。だから、説明をするならこれから先の話は一切の記録を取らない事と誰にも言わないと約束してくれ。そうじゃなければ、悪いが話す事は出来ない。最悪虚偽の報告をして貰う必要もある。」

「け、けど、それは……」

「悪いが何と言われようと条件が飲めないなら説明はしない。ちなみに違法な事をした訳じゃないって事だけは承知しておいてくれ。」

あの時の蘇生行為が違法かどうかなんて、誰にも判断出来ないだろう。

そもそも、蘇生行為が出来るのは現状では俺だけだし、条件が揃わない限りは出来はしないんだ。

マジであの時は、偶然に偶然が重なったんだろう。

正直、意図的なモノを感じずにはいられないが……。

「……わかりました、お約束します」

「そうか……ああ、そうだ、ゲイン、ラミア、悪いがここら一帯に防諜用の結界張ってくれ、とにかく強力なのを」

『了解した』

『畏まりました』

「悪いが外から覗かれてるとも限らないんでね、結界張らせて貰う」

正直な所、この連中が信用出来ても本局の連中まで信用出来るって訳じゃない。

他の事はどうしても、蘇生に関する事だけは知られる訳にはいかない。

蘇生を行う方法なんて、あのアルハザードですら確立されていなかった技術らしいとジェイルから聞いている。

そんな方法が世に出回ってみる、それこそ大混乱になるのは必至だ。

それに、その方法を悪用しようとする連中は必ず現れるだろう。

……下手な人物蘇生されてしまうと、世の中ひっくり返りかねない。

特に過去の偉人とかはやば過ぎる。

戦争に発展する危険性すらあり得る以上は、この処置も致し方ない。

「それじゃ説明するぞ、とりあえず質問やらは後にしてくれ」

プレシアの蘇生に関して、俺が二代目拳王を襲名した事なども含めて説明をしたところ……全員啞然としていた。

そりゃそうだろ、普通じゃ有り得ない事だし。

それに、惑星規模の生命エネルギーなんて、今まで誰も観測した事が無いだろうしなあ。

正直、証明する手立てが無いのが辛い所ではある。

一応ラミアが保存していた、蘇生の際の映像を見せたりしたのである程度は信用して貰えているようだが、それでも懐疑的なのは拭えないだろう。

何しろ今の魔法技術じゃ解明出来ない事なんだから。

「……信じられへん、こんな事が……」

「これでわかったら、ヤバイ事になるって意味が」

「確かに。こんな事が世に知れたら、それこそ大混乱や。」

「それだけじゃないよ、悪用されでもしたら……」

「実際は生命エネルギーを操作出来るのが今の所は俺一人だし、そ

もそもゲインとラミアがいなければ俺でもあれだけの量のエネルギーを操作するのは不可能だ」

「とはいえ、危険性がある事には変わりはない。主はやてこれは確かに報せぬ方がよろしいかと。」

「けど、嘘を付くのは……」

「こりや必要な嘘だ。悪意のある嘘とは違うよ。」

「でも……」

「……やれやれ、高町は随分と潔癖症だな。そんなんじゃ何時か潰れるぞ。」

『そうだな、もう少し思考を柔らかくすべきだろう。でなければ、何れは理想と現実の狭間で苦しむ事になるう。』

「わかってます、そんな事……」

高町は意固地な所があるねえ。

将来色々と苦しむ事になるんじゃないか？

高町自身、魔法に関する能力や成績は高いんだから、何れはもつと上に昇進するだろう。

そうなった時、上層部の汚い部分を見てしまったら……不味いんじゃないかねえ。

まあ、俺が心配する事じゃねえんだろうけどさ。

周りの連中がフォローするだろうし。

「でも、どうしてもっと早くフェイトちゃんに伝えなかったんですか？」

「そりゃな、引き取り手がハラウン家である以上、下手に伝えてみる……プレシアが逮捕されちまうかもしれない。だからこそ、司法取引の事を考えたのさ。ジェイルと接触したのだって最初はその為の材料となる情報を集める為だったんだ。結果的にジェイルとは

いい友達になれたけどな。」

「確かにそうですね、被疑者死亡と思われていたのが生きていたとなれば、再逮捕もあり得る」

「そうなれば、アリシアは天涯孤独になっちまうし、ハラウンだつて下手をすれば二度も親を失う事にもなりかねん。それに、プレシア自身も心の整理をする時間が必要だったしさ。」

「そうだったんですか……ありがとうございます、母さんとアリシアを助けてくれて」

「娘のあんたにそう言つて貰えれば、頑張った甲斐があるってもんだ」

「感謝しているわ、アクセル」

その後、プレシアやアリシアと過ごした日々など、色々と話して聞かせた。

その中には勿論ジェルや旦那、ナンバーズの生活の日々も含まれている。

最初の頃と後の方になって、ジェルやナンバーズの印象が大分変化している事に驚いている。

俺自身も驚いたからなあ、特にナンバーズの連中の変わり様にはさ。

プレシアとアリシアの事については、八神が客観的な立場から報告するそうだが、蘇生に関しては伏せてくれるらしい。

八神自身も蘇生がどれ程危険かわかっているようなんぞ。

そうそう、フェイトからは名前で呼ぶように言われた。

何でも、姉と母を助けた相手だからという事らしい。

なので、フェイトもこれから先は俺の事を名前で呼ぶようにと伝

えておいた。

本人は男の友達ほとんどいないらしいので、なかなか慣れそうも無いらしい。

それともう一つ、フェイトには隊舎に入れるパスを渡しておいた。母親に会いに来るのに遠慮は要らないだろうしさ。

とはいえ、一応セキュリティチェックは通って貰う事になる。

ジェイルが造ってる試作品とかは、結構ヤバイのがあったりするから……勿論俺達で厳重に管理しているけど。

「ほんじゃま、今日の話し合いはここまでって事で」

「お忙しい中、長々と申し訳ありませんでした」

「いいさ、何か聞きたい事があれば何時でも来てくれ」

「はい」

「高町もあんま突っ張ってないで、もう少し柔らかくなれよ」

「うう……わかってます……」

「フェイトも何時でも来いよ、母親相手に遠慮する事はねえからさ」

「はい！」

やれやれ、本当に今日は疲れた。

まあ、あれで全部を納得はしてくれないだろうが、一応の説明責任は果たしただろう。

後は本局側から直接何か言って来る可能性もあるが、そこはレジアスのおっさんになんとかして貰おう。

正直、もうこういう変に気を使う事はやりたくない、俺の性には合わないよ。

あの話し合いの後は特に問題が無く部隊が稼動し、早一年が過ぎ俺ももう十九歳になってしまった。

早いもんだよ……修行に出たときは十二歳だったのにさ。

この一年の間にフェイトはよく家の部隊に来るようになり、プレシアやアリシアと仲良くしているのを見かける。

フェイトもナンバーズやジェイルと最近では打ち解けたようで、よく話しているのを見かけるようになった。

最初の頃は、ジェイルとは結構反目の状態だったけど、根気良く説得しジェイルもフェイトに謝罪した結果、普通に話す分には問題がなくなっている。

それでもまあ、ジェイルがハイテンションの時は腰が引けているけど……ありや慣れてる俺らでも引くから無理もないんだが。

そのフェイトだけど、やっぱり女性って事もあり年も近いせいかウーノやドゥーエ、それとトーレやチンク等の年長組みと仲がいい。聞いた話によればウーノとドゥーエとは女性として、トーレやチンクとは魔導師として色々と話す事が多いらしい。

家の部隊は明らかに女性の比率が多いから、フェイトとしても楽しいんじゃないかな。

フェイト自身は執務官という事もあり、単独行動も多くなるので人恋しいのかね。

んで、俺も最近ではフェイトとは結構よく話すし、たまに食事を一緒にしたりする。

フェイトと一緒に歩くと何が疲れるかって、周りの視線がね。

何せフェイトは一級品の美少女だからねえ……そりゃ目立つてしようさ。

悪い気はしないんだけど、どうにもこうにも疲れるのさ。

……食事に行った後なんかは、大概の場合プレシア達に滅茶苦茶怒られるんだけど。

ただ単にメシ食いに行っただけなのに、何であんなに怒られるんだろう……アリシアにも呆れられるし……うむむ……。

おかげで、給料を自分で使う事があまりなく、食事代なんかで結構使う事が多い。

……何故に俺がここまでせにやなんのだ……理解に苦しむ……。

それと話すようになってからわかった事で意外だったのが、フェイトがかなりのバトルマニアだという事。

よく模擬戦を挑まれる事があるんだ、これが。

まあ、フェイトは高速戦闘型だから、俺のシュトゥルムヴィントが気になるらしいんだよね。

とはいえ、これは俺しか使えないから教える事が出来ないけど、高速戦闘時の改善点なんかは二人でよく話し合っていたりする。

そんなこんなでフェイトとは割と仲良くやっている。

あの時話を聞きに来たほかの連中とは、あれ以来会っていないがね。

更に言うと、この一年の間に残りのナンバーズ全てが覚醒し部隊のメンバーが全員揃った。

オットーは見た目は男に見えるが実際には女で、武装の関係上ゴースト分隊に所属している。

普段はのんびりしている子で、これもまた例に漏れず俺の事を『兄様』と呼ぶ。

ちなみに、もう一人の最後発組みであるデイドとは双子である。

そのデイドは、オットーと違いある程度は社交的なんだけど、それでも他の姉妹に比べれば情動は少ない方だと思う。

これまた、オットーと同じで俺の事を『お兄様』と呼ぶ……はつきり言ってかなり恥ずかしい。

デイドは近接戦闘型であり、普段はノーヴェとウェンディと共に組んでいる事が多い。

訓練の時も三人一組でやっているのをよく見かける。

まだまだ連携パターンが単調で、改善の余地ありって事らしくトーレ達年長組みが相手をしている。

たまに俺も相手をする事があるが、連携パターンがもつと複雑化していけば、かなりいいチームになるんじゃないかな。

最後に目覚めたセツテだが……覚醒した頃は本当に手を焼いた。何せ自分からはほとんど滅多に自分からは口を開かない。

一応俺の事は他の姉妹同様『兄様』と呼ぶが……あまり他の姉妹とも話している姿を見かけない。

ウーノ達年長組みも結構手を焼いているらしく、俺も何度も話し

掛けているが話しが長続きしなくてもうほんとどうしていいかわからなかった。

それでも、ジェイル曰く俺達には心を開いているらしく……まあ、物静かな子って事で落ち着いた。

最近ではトーレ達年長組みとよく一緒にいるのを見かけるし、この間はプレシアと一緒に料理をしているのを見かけた。

この調子なら何れは変わっていくだろうし、今は焦らず見守る事に。

セツテ自身は戦闘に関してはなかなかの实力があり、トレーニングの際は結構トーレやノーヴェともいい勝負をしている。

三人ともこれから先色々活躍するだろう。

まあ、身内が増えて俺としては嬉しい限りだけど。

んで、俺達の部隊はこの一年色々細かい事件などを担当していた。

とにかく実績を挙げなきゃいけないって事で、そこらじゅうの事件に首を突っ込んだ。

俺とラミアとトーレは、アサルト分隊として事件現場に強行突撃をする。

その際俺とトーレは全速力で最前線に向かい、ラミアは状況に応じて前衛もしくは後衛を務める。

半年ほど前に高ランク魔導師による人質事件が起きたんだが、こいつが魔導師崩れの上に質量兵器まで保有していた。

単純な質量兵器ならまだ良かったが、爆弾まで設置されており通常の陸士部隊では解除が出来ず手に負えない状況になってしまい、

本局所属の魔導師に出動要請を掛けようとした矢先にレジアス中將から俺達に出動命令が下った。

この事件では、俺が持ち前の頑丈さと防御力の高さ、そして突撃能力を活かしトーレと共に突貫。

犯人をトーレと一緒にフルボッコにしている間に、ラミアが爆弾の解除と人質の安全確保を実施。

おかげで人質には一切怪我人が無く、また、周囲にも一切の被害を出す事無く事件を解決する事が出来た。

この結果により、アサルト分隊は陸士部隊において結構有名になった。

……まあ、その事件で俺が二代目拳王だつて事が世の中に知れ渡ってしまい、一時期テレビの取材やらなんやらが鬱陶しくてしょうがなかったが。

その上教会の方からも色々と問い合わせが入ったりして、もう面倒この上なかった。

旦那のストライカー分隊は、主力部隊であり人数もアサルト分隊の倍以上になる。

平時は全員が出撃する事はない……全員出撃したら幾等なんでもオーバーキルすぎる。

その為、常時は隊長である旦那と副隊長であるメガーヌさんの指揮の下、二グループに分かれて行動している。

それでも十分な戦力だから、今の所は問題が無い。

今後はそれぞれのグループ単位での行動について、もっと連携した動きを取れるようにトレーニングに追加する予定。

本来なら三丁四人のグループが普通だからさ。

そういえば、前線に出る事からプレシアのデバイスが大幅に強化されている。

元々プレシアは『電気』の変換資質を持っているので、それに最適化されたデバイスに更新された。

プレシアの希望で人格は搭載されていないが、代わりに演算能力と魔力伝導率、それとバリアジャケットの強度が強化されている。というより、ありや魔改造だぜ……流石はジェイル。

だってなあ……演算能力が通常のインテリジェントデバイスの十倍分て……どんだけだよ。

元々プレシアはマルチタスクも凄いから、もう演算能力が人の限界突破してる。

そのおかげで、少し前にあったサイバー犯罪では普通なら専門の設備が無ければ解決出来ないところをプレシアがデバイスだけで対処してしまった。

……何だか家の部隊って……あれだよなあ、各人それぞれがスペック高すぎやしないかね？

ドゥーエが隊長を務めているゴースト分隊だが、これは少し他とは性質が異なる。

能力面からゴースト分隊は、潜入捜査や破壊工作なんかを主軸としている。

セットのディープダイバーで潜入し、場合によってはドゥーエのライアーズマスクで敵組織の幹部になりすまし情報を集める。

勿論、潜入するのは犯罪組織だけでは無く、管理局上層部や聖王

教会内部へも侵入をしている。

おかげで、色々と薄汚い部分が見えて来ている。
特に管理局上層部の『ラスキン中将一派』はかなりヤバイ。

マフィアとの癒着は勿論、献金横領やら裏金等々もうやりたい放題。

何故にこんな奴らが今までとっ捕まらなかったのか不思議だったが、どうやらこのラスキン中将というのは所謂二世に当たらしい。

その為かなりのコネを持つらしく、今まで手を出す事が出来ずにいたようだ。

それをゴースト分隊の活躍により動かぬ証拠を押さえた為、一ヶ月ほど前にフェイトを通じて本局の一部隊が動き全員を捕縛。

手柄は本局の物になってしまったけど、地上本部内では本局の手柄では無いというのは有名だ。

まあ、何処の部隊であるか等の詳細については伏せられている。

ゴースト分隊はその性格上決して表に出てはいけない。

部隊表でも名前すら暈されている分隊であり、誰が所属しているか等の詳細も部隊長クラスですら知らされていない。

だからこそ、密偵としては優秀であり着実に成果を挙げている。
勿論、レジアス中将は知っているので、個人的に報奨を出している。

俺も出来る限りの事をしたいと思い、何か無いか聞いてみた所それぞれ全く違う回答が帰ってきた。

ドゥーエは買ひ物付き合え、チンクは服が欲しい、セインは遊び

連れてけ、オットーはおいしいお茶が欲しいといった回答。

うーん、四者四様の答え……性格出てるよ。

特にドゥーエとセインはもうね……あいつら遠慮ってもんがないからねえ。

一応俺は尉官クラスであり魔力値やら測った魔導師ランク、二代目拳王って事もあって、結構な給料を頂いている。

その中で半分は両親に仕送りしていて、残り半分は適当に貯金している。

そもそも俺自身はあんま金使わない。

使ったとしても日々の生活費や格闘の雑誌買う位だし。

なのであいつら四人の要求は別にいいんだけど……ドゥーエとセインはもう少し自重しろと言いたい。

ま、喜んでくれているからいいけどさ。

最後に後方支援部隊として控えている、ジェイル達だが、基本的にジェイルはデバイス等の装備作製や装備の保守点検、後は医療方面で活躍している。

結構色んな部隊から装備の改良や改善、新規装備の作製依頼が来ていたりして、ジェイルは凄く喜んでいる。

先日バスの横転事故の際に、ジェイルが出動しその場で怪我人の治療に当たり、全員の一命を取り留めたのだがその際ジェイルが治療した子供から礼を言われていて……ジェイルの奴、柄にも無く照れてやがった。

あいつも新しい生き甲斐を見つけたみたいで、今では凄くいい顔をするようになった。

とはいえ、新しい技術や改良案なんかが出て来ると研究者としての血が騒ぐのか、相変わらず鼻息荒くしている。

……鼻息荒くしながら、ハイテンションで工具持つてにじり寄るのはやめろっていつてんだけどね、皆引くから。

ウーノやクアットロは通信管制や他部隊との折衝などを担当している。

元々ウーノは秘書としての能力が高いし、ISの関係上こういった事には滅法強い。

複数の通信管制やらなんやら一手に引き受けているのに、まだまだ余裕ありな所がまた凄い。

……その裏で料理サイトやら結婚のサイト見てたりするが……まあここはあえて言うまい。

クアットロはISの関係上、時折ゴースト分隊に交じる事があるが、ほとんどの場合は後方での管制に従事している。

仕事中は割と真面目なんだけどねえ……普段が普段なもんだから……ギャップ激しすぎるんだよ。

アリシアとルーだけど、二人共七歳になっており、もういい加減学校行かせようと思ってるんだが……これがなかなかねえ。

二人共皆と一緒に居ると言っただけ聞かないもんだからどうしたもんかと悩んでいる。

アリシアに関してはリンカーコアが無いので、行くとしても普通の学校になるだろう。

ルーは恐らくは魔法学校かなと思う。

ただ、二人を預けるのは……少し心配ではある。

しかし、学校行かないのは流石に問題あるだろうから、その辺については各自親と相談するようにと言っている。

将来の事を考えれば、確実に学校には行っておくべきだと思う、勉強はどうでもいいけどやっぱり友達作るべきだ。

……十二歳で修行の旅に出してしまった俺が言う事じゃないけど、何かあった時、親兄弟よりも最後に頼れるのは友達だと思うんだよ。

てな感じでこの一年過ごして来ている。

最近は何れも大きな事件もなく、細かい事件や街の治安活動等々、多種多様な任務に就いている。

「しかし、最近は何れも犯罪減ったのかな」

「減ってはいるが、元が多いからねえ……如何ともしがたいところさ」

「そうだな、最近になって漸く我々も成果を挙げてきてはいるが……」

「正直手が足りん」

「だよなあ……単純な人数不足だもんなあ……」

このミッドチルダは、レジアス中将のおかげで犯罪の発生率は減ってはいるが、元が多いので焼け石に水状態だ。

ランクの高い魔導師が少ないというのもあるが、どちらかと言えば単純な人手不足が主な原因。

街の警備や治安維持にしても、人数が常にギリギリの状態で身動きが取れない状況が多い。

加えて各部隊間での縄張り意識の問題……はあ、まだまだ問題は多いなあ。

その時、辺りにけたたましいアラートが鳴り響く！

このアラートは……廃棄区画に事件が発生した事を報せる物だ。

「やれやれ、一息入れる暇も無し、か……」

「ぼやくな、アクセル」

「へいへい、んじゃまジェイル、管制の方は頼んだぜ」

「任せておきたまえ」

廃棄区画か……あそこって調査が進んでないから何があるのか今
一よくわからない。

結構ヤバイ連中も入り込んでるって噂だし、何れは大掃除しなければならぬ。

とはいえ、あの広大な廃棄区画を大掃除するとなると……人手足りないんだよなあ。

やっぱ、魔力が無い人でもある程度戦える装備が必要だ。

となると、ジェイルが言ってたカートリッジシステムを応用して、
魔力タンクを付けた戦闘用スーツみたいなのを開発するしかないの
かもしれない。

しかし、完全な新規装備開発となると、開発費やらで結構金が嵩
む。

うむ、とは言っても地上本部の予算は何時でも火の車状態だから、
そう簡単に資金は捻出出来ないし……。

はあ、ほんと、金が無いのは首が無いのと一緒にとはよく言ったも
んだ。

そんなこんなで廃棄区画へ到着。
今回はアサルト分隊だけで出動している。

旦那のストライカー分隊は別の任務が入ってしまったので、
今は動く事が出来ない状況にある。

アサルト分隊は、それぞれがA A Aランク以上だから、ほとんど
問題は無いと思うが。

「こちらアサルト1、廃棄区画の現場に到着……特に異常は見られ
ない」

「そのまま周辺探査を頼むよ、何があるかまだはつきりしないから
ね」

「了解」

周辺探査を続けていると、トーレから妙な反応があると通信が入
った。

魔力の反応ではあるが、どうも生体反応と機械反応も混在してい
るらしい。

まるで自分達のような反応だと……うむむ、ジェイル以外に戦闘
機人技術を確立させた奴がいるのだろうか。

それは無いと思うんだが……とにかく現場に向かってみるか。

《反応現場》

「トーレ、どうだ」

「探査を続けてはいるが、先ほどの反応は……」

「うーん、どうなってんだ？」

「わからん、だが警戒はした方がいいだろう」

「そだな、ラミアの方はどうだ？」

『特にこれといった反応は……アクセル様！』

ラミアが大声を上げた瞬間、地上から無数の攻撃が俺達に迫る！
だが、攻撃の速度はそれ程でも無い！

あの程度なら避けるのは容易い！

俺達は全ての攻撃を回避し、次なる攻撃に備える！

「ちっ！ トーレ、行くぞ！」

「了解だ！」

『私は上空より援護いたします、アンジュルグ武装形態！』

ラミアが所有するデバイスの一機、アンジュルグの武装形態が展開された！

背中には翼、左手には小型の盾と弓、腰の左右には布状のアーマ―が装備されている。

ラミアが使う、遠距離・広域攻撃用に調整されているデバイスだ。結構見た目好きなんだよね、このデバイスって。

さてさて、何処のどいつだ、喧嘩売ってきたのは？
見つけ出してボコボコにしちやる！

と、そんな事を考えていると、トーレが驚いた顔をしている。
何だろうと思いい、トーレの向いている方向を見ると……俺も驚いてしまった。

「おいおい冗談だろ、ありや！」

「ああ、間違いない……ガジェットだ」

「んなバカな、あれは俺達も協力して廃棄したはずだろ？」

「そのはずなんだが……」

『アクセル』

「ジェイルか、どうなつてんだありや！」

『恐らくガジェットなのは間違いない、ただ、私が作った物と違い生体反応が検出されている』

「……そりゃおかしいな、ジェイルが造つたのは全部機械のはずだし」

改造されてるつてのか？

んなバカな……あれをジェイル以外が扱えるとは思えないが……。

て、通信してんだから少しは……遠慮しろつてのにもう！
落ちて着いて通信できないじゃないか！

つか、とりあえずはぶつ壊すしかないか。

このままじゃ要らぬ被害が増えるばかりだしな！

『破壊したら破片を回収してくれたまえ、こちらで調べてみよう』

「了解だ、トーレ、ラミア、全部ぶつ壊すぞ！」

「おう！」

『了解』

俺は青龍鱗を使い、一気に四体を破壊！

トーレはISであるライドインパルスを使い一気にガジェットに接近！

接近と同時に三体を切り裂く！

ラミアはアンジュルグ装着時の魔法である、＜シャドウランサー＞を使い左手の盾から槍状の魔力弾を発射！

広範囲に渡る＜シャドウランサー＞により五体のガジェットを撃破する事に成功！

流石はラミアだ、一発一発の威力が高い！

だが、戦ってみてわかったが、ジェイル作製のガジェットよりも性能がいいようだ。

何機かは俺達の攻撃を確実に避けてやがる。

しかも、動きが結構有機的な動きをしてやがる。
ありやどうみても機械の動きじゃ無い。

こりやただ事じゃなさそうだ。
今後面倒な事になりそうだぜ。

「とりあえず、全機撃破したか」

「ああ、しかし……」

「間違いなく今までのガジェットより性能がいい」

「面倒な事になりそうだ……一先ず破片回収して帰還しよう」

「了解だ」

『畏まりました、アクセル様』

どうにも嫌な予感がするんだ、今回の事件は。
単純に破壊を免れたガジェットの暴走とかじゃないのは間違いな

いはず。

となると、誰かがガジェットを改良して何かを企んでいるって事だろう。

……こりゃ早めになんとかしないと不味いぞ。

レジアスのおっさんにも報告して、地上本部内で情報を集めよう。今後、確実にあのガジェットの被害は増えるはずだ。

大事になる前に、何としても食い止めないと。

このままじゃ、ジェイルに濡れ衣着せる事になっちまうかもしれないしな！

「ミツ……ケタ……」

「セカイ……シンセイ……」

第八話：胎動（後書き）

現時点でのアクセルプロフィール

年齢：十九歳

魔力値：A A A +

陸戦ランク S +

空戦ランク A A A -

第九話：予言

廃棄区画での事件から一週間が経過した。

あの日以降、同様の事件は今の所起きていない。

回収したガジェットの破片については、現在ジェイル達後方支援組みが鋭意調査中。

現時点では素体としてはジェイルの作製したガジェットで間違いないという部分と、駆動系等に生体部品が使われているという事しか判明していない。

その生体部品についても、出所がわからない物が大半で、かつ、解析不能な素材が使われていた。

……ジェイルですら解析出来ないって、一体何処の誰が製造したんだろう……。

勿論の事ではあるんだが、今回の事件についてジェイルは関わっていない。

んな事してたら、俺らでぶっ飛ばしても止めている。

今回の事件については、再発の恐れが十二分に考えられるのでレジラスのおっさんに直接報告済み。

レジラスのおっさんもジェイルが作製したガジェットは全て俺達の手で破壊されている事は知っているので、恐らく第三者の犯行だろうと考えているようだ。

なお、一応この事件については緘口令が敷かれ地上本部でも一部しか詳細を把握していない。

あまりむやみに広めても要らぬ混乱を招く可能性がある為の措置

だ。

もつと情報が集まれば各部隊に通達しより広域での捜査もできるようになるんだろうけど、今のようには情報が何も無い状態じゃ致し方ない。

なので捜査については家のゴースト分隊が主力として動いている。

しかし、幾等ゴースト分隊といえども何も手掛かりが無い状況からの捜査なので、捜査は難航を極めている。

一応人手が足りないので、ストライカー分隊からも何人が出しているがそれでも未だ何も手掛かりが得られていない。

せめて捜査に役立つ何かしらの取っ掛かりでもあればいいんだが。なかなか思うようにはいかないもんだ。

「アクセル」

「およ、フェイトじゃないか、来てたのか」

「うん、母さんとアリシアに会いにね」

「そうか。て、昨日も来てただろ？ 執務官で忙しいのによく時間取れるな」

「元々地上本部に用事もあったから、その序だよ」
「なるほどね」

執務官の忙しさは半端じゃないらしいからなあ。

単独捜査とか次元航行部隊への出向やらなんやら、その上法務的な事までせにやらなんから文字通り寝る暇も無いらしい。

現にフェイトの奴も明らかに疲れが見える。

生体エネルギーの流れも少し淀みが見えるし……これじゃ近い内にぶっ倒れちまうかもしれん。

責任感が強いのはいいけど、もう少し自分の体を省みなきゃだめだろうに。

一応釘刺しておくか。

「なあフエイト」

「何？」

「お前ちゃんと食事と睡眠取ってるか？」

「え、う、うん……」

こりゃあれだな、恐らくは食事もサプリメントとかで済ませてるっばい。

睡眠も碌に取ってないみたいだし。

やれやれ、本当にもう、どうしてこう変なところで頑固なんだこいつは。

親友共々よく似てるわ。

「まあ、執務官だから忙しいのはわかるし俺もとやかく言いたくは無いが、せめて食事と睡眠だけはしっかり取っておけよ。既に生体エネルギーの淀みが出始めてるからな、このままだとぶっ倒れちゃうぞ。」

「う、うん、気をつけるよ……」

「はあ……そういつてまた無理をするんだろ。全く、余り心配掛けさせるなよ、お前が倒れでもしたらプレシアが卒倒しちゃうからな。」

「うん、大丈夫だよ、心配してくれてありがと」

とかなんとか言っつて、こいつはまた無理をするんだろう。

誰かしらお目付け役でも付けなきゃマジでヤバイかもしれない。

つつてもフェイトの親友である高町や八神もフェイトに負けず劣らず無理をする連中だし。

そのせいで高町は一度落ちているみたいだからなあ。

なんかこう、この三人でどうにも生き急ぎすぎている気がしてならない。

そりゃ俺達管理局の局員は体張って何ぼだけど、自分が倒れちまったら何にもならない。

それに俺やフェイト、それに高町や八神のように戦力の中核を担うような連中が途中で倒れるような事になっちまったらそれこそ部隊が壊滅しかねない。

自分一人で戦ってる訳じゃねえんだから、もう少し自分を大事にして貰いたいもんだ。

「頑張るのはいいけど無茶はしても無理はするなよ。フェイトも一人で何でも出来る訳じゃねえんだからさ。」

「わかってるよ、大丈夫だから」

「まあ何かあれば俺達呼べよ、手貸してやつから」

「ありがとう、アクセル」

「どういたしまして」

と、フェイトと雑談している最中に誰かから通信が入った。通信主を確認すると……八神はやてだ。

八神から通信なんてこりゃまた珍しい事もあるもんだ。とりあえず出てみるか。

「あいよーこちらアクセル・ターナーだ」

『お久しぶりです、アクセル二尉。で、フェイトちゃんもおるんですか？』

「ああ、プレシアとアリシアに会いに来てたんだよ」

「はやて、どうかしたの？」

『丁度ええわ、フェイトちゃんも一緒に聞いて欲しいんよ』

「何かあったのか？」

『えとですね……』

八神の話はこうだ。

聖王教会の理事でもあるカリム・グラシア、彼女の持つレアスキ
プロフェーティン・シクリフテン
ル預言者の著書に数年前から妙な予言が記されていた。

その内容は解釈が正しいかどうかはさておいて、管理局の根幹にも関わる非常に危険な内容。

それに対応していく為、八神やカリム・グラシアは色々と準備を進めていたらしい。

だが、ここ最近になってその予言の内容が突如として書き換わった。

書き換わった時期は丁度俺がジェル達の司法取引を成立させた頃。

その内容は部分的には解読出来たようなんだが、正直な話全く意味がわからないらしい。

そこで古代ベルカの事を記憶しているデバイスの保持者でもある俺に解読の手伝いをして欲しいという話。

だけど、何故にそこでフェイトまで必要になるのか気になって聞いてみたが、通信では話せない内容らしい。

……恐らくは機密に抵触するんだろうと思うが。

「なるほど、それだと確かに俺が適任だわな」

『ええ、事が事だけに早急に解明したいんです。ご協力頂けますでしょうか？』

「協力すんのは全然構わないんだけどさ、俺が聖王教会に行くと確実に面倒な事になりそうなんだけど」

『そ、それは……まあ……確かに』

またぞろ騎士になれって煩そうだもんなあ。

別にカリムさんの事はそこまで嫌いじゃないんだけど、あのしつこさはどうにかならんもんかと思ってしまう。

ゲインやラミアが持つ古代ベル力の情報やら、ベル力王族の血族である俺が聖王教会にとって非常に重要な位置にいるのはわかるんだけど……ねえ。

俺としては騎士になるつもりも聖王教会に所属するつもりも無いんだよなあ、下手に聖王教会に所属したりすると派閥争いとか政治的に面倒な事に巻き込まれる可能性が高いしさ。

「まあいいや、とりあえず聖王教会に行けばいいんだな？」

『ええ』

「んで、何時行けばいいんだ？」

『明日の午後に、フェイトちゃんもお願い出来る？』

「うん、スケジュールの方は」

『それなら大丈夫や、リンディさんに頼んでスケジュールは調整済みや』

「わかったよ、それじゃ明日の午後に聖王教会に行くね」

『よろしくな。アクセルさんも頼みます。』

「了解」

プロフェーティン・シュリフテン
しかし、預言者の著書か。

話しには聞いているが、実際どうなんだろう。

予言と言っても的中率は然程高くは無いようだけど、八神の様子からして結構ヤバイ事態っぽい。

こりゃ行く前にレジアスのおっさんには連絡を入れておくべきか。

つか、勝手に聖王教会に行ったらおっさんの事だから激怒するのは火を見るより明らか。

そうなるとまた飲み連れて行かれそうだし。

「アクセル、明日行く時は一緒に行かない？」

「構わないぞ、何処で待ち合わせる？」

「私が迎えに来るから、隊舎で待ってて」

「あいよ」

それからフェイトは二三話した後、本局に戻って行った。

さて、そんじゃ俺はレジアスのおっさんに連絡入れるとしますかね。

レジアスのおっさんに連絡したら、案の定怒鳴られた。

協力要請なんだから仕方ないだろうに、全く、おっさんの聖王教会アレルギーにも困ったもんだ。

その内あれだオーリスさんにも協力して貰って矯正しなきゃな。地上本部で実際に一番怖いのって何を隠そうオーリスさんだし。

あの人だけは怒らせちゃならん。
ぶっちゃけ勝てる奴いない。

さてと、とりあえず今の所は出勤の予定も無いしトレーニングでもしてますか。

ここ最近忙しくてなかなか纏まった時間が取れないからな、こういう機会にみっちりやっておかないと。

「アクセル、トレーニングかい？」

「ん、おお、ジェイルか。ここ最近忙しくて纏まった時間取れなかったからさ、ここらで引き締めなおそうと思ってよ。」

「好きだねえ、君も」

「まあな。それよりどうよ解析進んでるのか？」

「いや、これがなかなか手強くてね」

「そっか」

「まあ、時間を掛ければ何かしらは掴めるはずだからね。もう少し待っていてくれたまえ。」

「あいよ、期待してるさ」

この日は残りの時間全てをトレーニングに費やし、俺と同様に暇していたトレーや待機中の旦那と模擬戦しまくった。
やっぱ体動かした後は飯が美味い。

翌日となりフェイトが迎えに来る予定なので俺は隊舎で待機中。
旦那はレジアスのおっさんとの今後の各部隊の編成やらについての
の会議で本部に出頭。

総責任者が不在なので代理として副隊長であるメガーヌさんが部隊を指揮している。

といつても別段出勤掛かっている訳じゃないし、今日も特にこれといつて予定は無いので今の所は平和なもんだ。

「あれ、にいにい、どつか行くツスカ？」

「ああ、ウエンディか。聖王教会から呼び出し掛かっててよ。」

「うえ、聖王教会ツスカ、にいにいも大変ツスね」

「全くだ。んで、ウエンディは何してんだ？」

「今日はオフシフトツス」

「そか、まあたまには街にでも遊びに行けよ。隊舎に籠ってたら腐っちゃうからな。」

「了解ツス〜それじゃ私は部屋に戻るツス」

ウエンディが部屋へ戻ると同時に表に車が止まった音がした。
恐らくフェイトだと思うが、時間的に早すぎやしねえか？

こつからなら車飛ばせば二時間程度で着くのになまだ十時前だぞ。
もう少しゆっくり着てもいいだろうに。

「アクセル、お待たせ」

「おいっす、つか、早過ぎじゃね？ まだ10時前だぞ」

「遅れちゃいけないと思って早く着ちゃった」

「そりゃまあいいんだけどよ……フェイト、お前朝飯食って来たのか？」

「えと……少しだけ……」

念の為フェイトの朝飯を聞いてみたが、野菜スティック二本と野菜ジュースだけらしい。

そんなんじゃないだろうに。

「あんなあ、もう少しちゃんと食べて来いよ」

「でも、これだけでも十分『足りねっつもの！』」

たくもつ、こいつは……。

真面目なくせにどうしてこう自分の健康には無頓着なんだ。

「まだ時間あるから、俺が何か作ってやつから食っていけ」

「え、でも」

「いいから、黙って食え」

「う、うん、わかったよ」

【調理中】

厨房で余った材料からライス、野菜炒め、ハムエッグを作製。
この位ならフェイトも食べられるだろう。

味の方にもサバイバル生活が長かったおかげで結構自信があったりするのだ。

とはいえ、レパートリーはそんなに多くないけど。

「おいしい、アクセルって料理上手なんだね」

「そりゃサバイバル生活長かったからな。料理の一つや二つ自然と覚えるよ。」

「そっか」

結局十分もしないで完食。

やっぱ腹減ってたんじゃねえの。

こりゃあれかな、行きと帰りも俺が運転して少しでも寝かせてやった方がいいかもしれん。

そうでもしないと、寝る暇無いだろう。

「ごちそうさま、凄くおいしかったよ」

「そりゃよござんした。んじゃ聖王教会までの行きと帰りは俺が運転するわ。」

「え？ いいよ、私が運転するから」

「いいんだって、どうせまた昨日も寝てないだろ。行きと帰り位車の中で寝ておけて。」

「で、でも……」

「人の好意は素直に受け取っておけよ」

「それじゃ、お願いしようかな」

「任された」

こんな事もあるとかと免許取っておいて正解だった。

基本的に俺は筋力を使う為に歩くか走るからあんまり車使わないけど、やっぱ免許だけは有った方が何かと便利だ。

んじゃま、ラミアを呼んで向うとするか。

ナビはラミアとゲインに任せればいいだろう。

「そんじゃま揃った事だし向いますか」

「うん」

『畏まりましたアクセル様』

『迷うなよアクセル』

「わあってるよ」

さてフェイトの車は……やっぱりスポーツカータイプか。
しかも色も黒……本当に黒が好きなんだなあ。

運転席に俺が乗り助手席にラミア、んでもって後部座席にフェイト。

このメンバーで車で出掛けるのもなんというか珍しいというか。

とはいえ、楽しいドライブ気分て訳にはいかないんだよなあ。

例の事件の事もあるし予言の事だってあるからどうにも落ち着かない。

特に予言の内容が気に掛かる。

多分元々の予言てのはジェイルが計画していた管理局崩壊に関する事だったんだろう。

だが、ジェイルの司法取引が成立し計画そのものが破棄されたと

同時に新しい予言が出てきたとなると……十中八九例の生体部品を使ったガジェットが関わっているはず。

だがガジェットだけで済む筈が無い、確実にその裏に暗躍する奴がいるはず。

早い段階で何かしらの手掛かりを得ないとジリ貧になる気がしてならない。

こりゃ他の部隊にも協力を依頼した方がいいかもしれないなあ、と、考え事していないでさっさと出発しますか。

「んじゃ出発するぞ」

「うん」

「着いたら起こすからそれまでゆっくり休んでろよ」

「ありがと、アクセル」

途中の道が混雑する事無く順調に進んでいる。
ラミアも初のドライブなので結構楽しそうだ。

後部座席に座っているフェイトは出発と同時に寝てしまっている。
やっぱり疲れ溜まつてるんじゃないか、全くもつ。

こりゃあれだな、それとなくプレシアからも注意して貰った方がいいだろう。

母親からの注意なら流石にこいつも聞くだろっし。

『アクセル』

「んあ？ どつたのゲイン」

『機械の私が言うのも変な話ではあるのだが……』

「どうしたんだよ、そんな口ごもるなんてゲインらしくないぜ」

『例の事件以降、どうにも嫌な予感がしてならんのだ』

「嫌な予感？」

『私もです、アクセル様』

「ラミアもか……」

この二人が揃ってこんな事を言い出すなんて今までなかったはず。俺自身も嫌な予感はしているし、こりや早急にも各部隊間での連携強化とか済ませておくべきかもしれない。

警戒し過ぎて何も無しつてならまだいいけど、警戒緩んでて大事件勃発とかなったら洒落にもなんねえ。

それ以上に今後の事を考えれば各部隊間での連携強化は必須。

それに人員不足を補う為の装備強化や、各部隊での軋轢の排除などやる事は山積み。

何よりも本局との軋轢をどうにかしないと、今後地上本部は立ち行かなくなる。

改めて考えてみると本当にミッド地上本部は問題だらけだ。

せめてシャドウミラー隊がその問題を解決する試金石になればいいんだけどねえ。

と、そうこうしている内に聖王教会に到着。
相変わらず荘厳な建物だ。

「うつし、到着と。フェイト、着いたぞ。」

「う、ううーん、あと五分……」

「ほら、起きろってば」

「……あ、あくせる、もう着いたの？」

「ああ」

完璧に寝ぼけてるなこいつ。

まあ、かなりグッスリ寝てたから無理も無いけど。

「ほれ、涎拭けって」

「え?! う、うん……」

とりあえずフェイトに身支度を整えさせてから聖王教会に入った。受付でそれぞれの名前を伝えると迎えが来るまで待つように言われた。

それから暫くしてカリム・グラシアの使いと名乗る女性が現れた。確かこの人は、シャッハ・ヌエラだっけか。

俺が二代目拳王を襲名した時にも、カリムの傍にいた人だったはず。

シスターの格好してるけど教会騎士だったんだ。

シャツ八さんに案内され到着した部屋は何時ぞやのカリム・グラシアの執務室。

なんだけど、何故かそこには八神と高町、それにもう一人男性がいた。

制服の階級章からして提督か？

うへへ本局の提督まで出張って来るとなるとやっぱり大事か。

「あれ、クロノも来てたんだ」

「ああ、僕も今回の件には関わっているからな」

クロノって確かフェイトを引き取ったリンディ・ハラオウンの息子だっけか。

本局じゃ結構な有名人だったような気がする。

結構な魔力を感じるし魔導師としても優秀なんだろう。確かかなりの若さで執務官から提督になっただけだし。

「君が二代目拳王のアクセル・ターナーか」

「ああ、そうだぜ」

「そうか、僕はクロノ・ハラオウン、妹が何時も世話になっている」
「おう、二代目拳王を襲名したアクセル・ターナーだ。よろしくな」

クロノから差し出された手を握りしつかりと握手。

こういう事は最初が肝心。

それに目見ればわかるけど、クロノは間違いなく善人だ。

まあ、本局所属の提督である以上はあんまり接触する機会はない

かもしれないが仲良くしておくべきだろう。

「ア、アクセルさん、一応クロノ君は提督なんだけど」

「まあまあいいじゃねえか、堅苦しいのはよ」

「あ、相変わらず階級気にせんのですね」

俺は前からそうだし。

階級なんて気にした事ねえからなあ。

レジアスのおっさんの事もいつの間にかおっさんで定着してるし。
最初は皆面食らってたな、特に地上本部の連中は。

「レジアスのおっさんにもこんなだしな俺って」

「……アクセルさんだけや、そんなん言えるの」

「そうか？ おっさん顔は怖いけど凄くいい人だぞ。飲みに行くと面白いしな。」

おっさん酔っ払うと直ぐに脱ぐからなあ。

この間も店の中で脱ぎ出して腹踊りしてたし。

まあ、その後、飲み屋のおばちゃんにおっさん共々たたき出されただけ。

あのおばちゃん強いんだよ、まさにおっかさんて感じの人だ。

「んで、ある程度は八神から話を聞いてるけど、何でもカリムさん
プロフィール・シュリフテン
の持つ預言者の著書の予言の内容が変わったらしいな」

「ええ」

「念の为一応変わる前の予言を聞いてもいいか？」

「はい、こちらです」

そういつてカリムさんが一枚の用紙を差し出して来た。
それを読んでみるとこう書かれている。

『古い結晶と無限の欲望が集い交わる地。死せる王の元、聖地より彼の翼が蘇る。死者達が踊り、なかつ大地の法の塔は虚しく焼け落ち、それを先駆けに数多の海を守る法の船も焼け落ちる』

ふむふむ、内容はジェイルが言ってた計画と完全に合致する。

最初の方はレリックとジェイル達の事だし、中間辺りは聖王のゆりかごや聖王自身の事だろう。

最後の方は管理局の崩壊を示している。
前に聞いたジェイル達の計画そのままだな。

「なるほどねえ、ジェイルから聞いた計画そのまんまだわ」
「一応参考までにその計画の内容を聞いてもいいか？」
「あいよ」

そうしてジェイルが以前に計画していた内容を説明。
中には聖王の復活やら何やら結構ヤバイ内容が含まれている。

しかも、聖王の復活を主導しているのが最高評議会だってんだから、他の面々は啞然としている。

まあ、今じゃ最高評議会に連絡を取る事が出来ないんだよね。

地上本部地下の奴らがいた場所に行ってももめけの殻だったし。
一体何処に行ったんだろう。

「てな訳さ」

「……にわかには信じがたいな」

「だろうねえ、俺も最高評議会なんて聞いた時には自分の耳を疑ったぜ。何せミッド地上じゃ都市伝説級だもん。」

「でも、最高評議会に連絡が付かないって」

「それもまた解せないんだ。ジェイル達の司法取引が終わった後に直ぐ連絡つけようとしたんだけど、一向に繋がらないもんだから直接乗り込んだけどもぬけの殻でさ。一体何処に行ったんだか。一応は今でも調査はしているけど一向に足取り掴めないんだ。」

「うーん、何や予想以上に大事になりそやなあ」

とはいえ既にこの予言は覆されている。

ジェイルが俺達側についている以上は問題は無い。

問題があるとすれば聖王と聖王のゆりかごについてだろう。

あそこのアジトは施設その物は俺達でぶっ壊したけど、聖王のゆりかごその物は生きている。

例のジェイル以外のチームが進めているであろう聖王のクローン計画が完了すれば、もしかしたら聖王のゆりかごが動き出すかもしれない。

そうなりや次元航行艦隊にでも出張って貰わなきゃ対処出来なくなる。

そうならない為にも早めに聖王のクローンについては探し出すべきか。

まあ、事実を知れば聖王教会側としても楽観視は出来ないだろう、何せ高司祭級の人間が色香に負けて聖遺物持ち出してしまったんだから。

次元世界各地にいる信者に知れらたらそれこそ宗教裁判でも起きかねない。

間違いなく今の聖王教会上層部は軒並み失脚するだろうなあ。

「しかし、今となつてはジェイルの計画も実行に移される事は無くなつてゐるから、この予言が成就する事は無い訳だ」

「ああ、君が司法取引を成立させた事でね。よもやあのジェイル・スカリエッティを改心させる人物が現れるとは思わなかつたよ。」

「ほんと、そうやね」

「アクセルさんは凄いですね。私だったら多分信用出来ないかも。」

「そんなもんかねえ」

「そうですね、だって広域次元犯罪者ですもん、こう言つては何ですけどそう簡単には信用出来ません」

「そうだな、僕も突然そんな事を言われても正直信用は出来ないだろう」

長い事管理局にいて次元犯罪者共とやりあつてゐる連中からすりやそうかもしれないな。

まあ、俺の場合はそういう先入観はこいつ等ほど強く無かつたし、何よりもジェイルと共同生活の中であいつの考えを理解出来たのが大きい。

じゃないと流石に俺でもあいつと友達になろうとは思わなかつただろう。

でもまあ、どんな理由があれども持った縁である以上は大事にしなければ。

現に今はあいつといつて結構面白いし。

頭いいのにどっか妙なところでずっとぼけてゐるから弄り甲斐があるんだよ。

「まあ、何事も信じる事から始めなきゃ、何も変わらないし変えら

れないもんだろ」

『ふっ……アクセルも随分と言うようになったものだ』

「そりゃ俺だって少しは成長してるさ」

『未だに勉強は苦手だな』

「あゝそれを言うなよゲイン！」

『ああ、そんなアクセル様も可愛い』

「十九の男相手に可愛いはねえだろ、ラムミアよう」

『いゝえ、アクセル様は可愛いのですっ！』

「ラ、ラムミアさんて、何だか最初の印象とちよつと違うね」

「そ、そやね……」

ラムミアは時折こうなるから困る。

ちよつと前にも暴走して俺が風呂入ってる最中に乗り込んで来たし。

あんどきやもうマジで大変だった。

もみ合ってる内に何故かプレシアやアリシアまで参戦。

更にはウーノやドゥーエやらまで参戦してもうひっちゃかめっちゃか。

しかも、アリシア以外全員の眼が血走ってたし……マジでビビった。

最終的にはメガーヌさんの一喝で何とか収まったけど、あんどきやもう食われるかとマジで腹括るところだったぜ。

あれ以来、男性陣が風呂入ってる最中に女性陣が近づくのは禁止された。

まあ、アリシアやルーのような子供は別だけど。

あいつら未だに俺のベッドに潜り込んで来るからなあ……親と寝

りやいいのにさ。

ああ、何か思い出したらアリシアとルーの将来が心配になって来た。

兄離れ出来るんだろうな、あの二人……。

「て、んな事よりも今日呼んだ大事な話に移ろうぜ」

「あ、ああ、そうだな。はやて、いいか？」

「うん、私から説明するわ」

「頼むわ」

八神が説明し始めたのは、例の予言に関して地上本部では懐疑的な見方がなされているという事。

元々個人保有の技能であるプロフェーティン・シュリフテン預言者の著書に関して、地上本部側ではあまり重要視されていなかったらしい。

とはいえ、今回の予言は内容が内容だけに聖王教会も本局側も無視する事は出来ない。

予言が成就された場合、管理局はおろか管理世界の秩序そのものが崩壊しかねない。

それを危惧したカリムさんとかねてより管理局の部隊における諸問題を痛感していた八神が相談し、クロノ提督や本局のリンディ・ハラオウン統括官、それに非公式ではあるが伝説の三提督を後見人とし地上において本局主導で動かせる部隊を創設しようと考えている事。

この部隊は八神が部隊長となり、八神に従う守護騎士達や高町とフェイト、それから有望な新人などを集めた少数精鋭の機動力を重視した非常に強力な部隊になる予定。

表向きはレリックなどのロストログアに対応する為としつつ、その実は予言にある管理局の崩壊を未然に防ぐ事を目的とする。

部隊の設立・運用期間は一年とし、成果があがれば期間延長もあ
りえる。

というのが今までの予言に対する対応だった。

しかし、今回予言が変化した為に対応の方針転換が必要となった。

その為、古代ベルカ語を翻訳する事の出来る俺達と呼ばれた。

新しい予言の翻訳とそれに対する対応策について協議する為に。

「なるほど、んで、予定していた部隊のデータであるか？」

「あ、これです」

「……なんだこのデタラメな部隊規模は」

提示されたデータを見たところ、八神を部隊長とし分隊長に高町
とフェイト、んでもって守護騎士全員に有能な新人四人。

それ以外にも各地上部隊から優秀な人材を登用。

よくもこの人員で部隊の戦力保有の原則をクリア出来たもんだな
……。

まあ、それ言ったら家の部隊もそうなんだけど……とはいえ、家
の部隊は元次元犯罪者であるジェイル以下ナンバーズの監視の意味
もあるって名目でレジアスのおっさんがゴリ押しで通したもんだか
らなあ。

今考えるとよく通ったもんだと思うわ。

どれだけ強引な手段使ったんだろうか。

にしてもこの予定されている部隊の設備や装備は一般的な陸士部

隊の比じゃねえや。

装備に関しても前線メンバー全員に個別に専用デバイスを付与、更には移動手段の輸送ヘリやらなんやら……一般的な陸士部隊の何倍の予算掛けるつもりだ？

「よくまあこんだけのデタラメ部隊を作る気になったな……とはいえ、家の部隊ほどじゃねえけど」

「確かにシャドウミラー隊の保有戦力は凄まじい。正直な話を言えば、直ぐにでも本局に欲しい位さ。」

「地上本部があれだけの戦力を保有する事については、本局のお偉いさんは気に入らないらしいけどな」

「聖王教会側としてもアクセル様には騎士として、聖王教会に所属して頂きたいのですが」

「そりゃ無理。俺にその気が全く無いから。」

「……はう」

相変わらず諦めてないのかよ。

いい加減に諦めりゃいいのに。

聖王教会って色々堅苦しいから嫌なんだよ。

まあ、宗教そのものに関心が無いってのもあんだけどさ。

「ま、本局にも聖王教会にも正式な依頼がありや協力するのは問題ねえさ。それよりも、例の新しい予言はどうなんよ。」

「あ、はい、こちらです」

カリムさんが差し出して来た用紙には古代ベルカ語がビッシリと書き込まれている。

一応ゲインとラミアから習ってはいるけど、直ぐには読めそうも無い。

こりゃゲインとラミアに解読任せた方がよさそうだし。
解読間違えるとんでもない文章になりそうだし。

「ゲイン、ラミア、解読頼めるか」

『古代ベルカ語は教えているだろう』

「いやまあそうなんだけどよ。解読間違うと不味いだろう？」

『全くしょうがない奴だ』

『お任せ下さい、アクセル様』

何だかんだ言いながら解読を始めるゲインとラミア。

まあ、この二人の演算能力なら直ぐ終わるだろう。

「そうだアクセルさん、実は『機動六課』についてなんですけど、

新設するにあたって二つほどお願いしたい事が」

「お願い？ 内容は？」

「一つ目がシャドウミラー隊の機動六課との協力関係、それともう一つが……アクセルさんとラミアさん、それからプレシアさんに出

向をお願いしたいと思ひまして」

「出向と協力関係ねえ」

「駄目でしょうか？」

「協力関係については問題ねえ、どちらにしろ地上で何らかの事件
が起きる可能性が高い以上は必要な事だろうから、俺の方で総責任
者であるゼストの旦那に話通すわ。だけど、出向に関しちや俺の一
存じゃ決められないし、何よりもレジアスのおっさんの許可も必要
だから今この場でOK出すのは無理だぜ。」

何せシャドウミラー隊は地上本部にとっての最強戦力。

おいそれと貸し出しは出来ないだろう。

それにだ、八神が希望している三人だけでも部隊の戦力保有の権限ぶっち切りそうなのがすんだよ。

何せラミアはSSS+だしプレシアも限定的とはいえSS+、俺に関しちゃうもう直ぐS+だし。

ただでさへ機動六課は戦力が集中している以上、これ以上のオーバースランカーを所属させるのはかなり厳しいだろう。

まあ、状況が状況だけに必要だと思うし、おっさんやオーリスさんに頼み込めばゴリ押ししてくれるとは思っけどさ。

それにだ、出向に関しての許可を取るなら、部隊設立の関係者である八神やクロノ、それにカリムさんが話しをした方がいいと思う。勿論、おっさんを説得するのであれば俺も一緒に説得するけど。

「許可取る時は八神達からちゃんと話しろよ、俺も同席はするけどさ」

「うう……大丈夫やるか」

「大丈夫だろ、幾等おっさんでもいきなり殴りかかるような事はしないだろう、大激怒はするかもしれないけど。それにだ、おっさんが殴りかかって来るような事があつたら、そんなとき俺がおっさんぶん殴って止めるよ。」

「い、いや、中將を殴るのはどうなんだ？」

「ん、俺とおっさん、よく殴りあいの喧嘩してるぞ。特に酔っ払った時なんかは、二人して暴れてるし。前にも酔っ払った状態で質量兵器の不法所持者見つけて二人で速攻でボコったからなあ、あはははは。」

「……なにそれこわい」

おっさん実の所は魔力使わない戦闘なら、そこらの騎士や魔導師なんか目じゃない位強い。

何せあの服の下は丸々筋肉の塊だからなあ。

とても五十いつてる肉体とは思えないぜ。

俺でも魔力での身体強化なしでおっさんのパンチを真正面から受けたら、結構ダメージ食らうからなあ。

『アクセル、解読が完了したぞ』

「お、そうか、何て書いてあんだ？」

『モニタに表示いたします』

ラミアが手早くコンソールを操作し、各自の前に解読した文章を表示させた。

その内容は次の通り。

『世界を見守る者、争いあう生命に嘆き悲しみ、新たなる世界と生命を求める。世界の理は砕け、全ての生命は滅び去り、静寂なる世界が訪れる。世界を見守る者……その名は……アインスト……。』

……何だか前の予言以上に難解で危険な匂いをする内容だ。

世界が崩壊とか生命が滅びるとか。

「な、なんや凄く危険な内容やね」

「うん、世界の理が砕けるとか生命が滅び去るとか、正直前の予言よりも危険性が高い気がするよ」

「そうだね、フェイトちゃん」

「この内容からすると、前回の予言よりも規模が大きくなるかもしれないな」

「ええ、聖王教会側としてもこれは見過ごせませんね」

やっぱり高町達も同じような感想か。

当然と言えば当然か、こんな気味の悪い予言見せられれば不安にもなる。

しかし、この最後に書かれた『アインスト』という言葉。これがどうも引っかかる。

何が引っかかるのかはわからないが、こう魂がざわつくというか、ともかく言い知れぬ不快感がある。何故なんだろう……。

『アクセル、お前も気づいているな』

「ああ、この最後に書かれた言葉、何故か魂がざわつく感じがする」
『私も非常に不快感を感じます』

もしやこの間のガジェット的事件もこの予言に通じているのかもしれない。

となると、今この場にいるメンバーには報せておくべきだろう。

幾等ゴースト分隊やジェイルが優秀でも、あいつらだけで情報を集め切れるとは限らない。

だとすればこいつらにも協力して貰う方が得策。

よし、おっさんに許可取るとしようかね。

まあ、またガミガミ言われそうだけど。

「ちと悪いけどレジアスのおっさんに通信してもいいか？」

「へ、どうしてです？」

「ちよいと気になる情報があるんだけど、まだ秘匿されている情報だから情報開示の許可を貰おうと思ってさ」

八神達が何か言う前にさくつとおっさん宛に通信を送るとオーリスさんが対応してくれた。

事情を簡単に説明しおっさん呼び出して貰う。

『どうした、アクセル』

「あゝおっさん、悪いんだけどさ、例の事件の事についてここにいる連中に話していいか？」

『あの事件に関してはまだ公開は出来んぞ』

「わかってっけどさ、カリムさんの予言聞いたらそうも言ってもらえないんだわ」

『ふん、予言か。当てになるのか？』

「まあな、前回までの予言はほぼ的中してたし。それに、どうにも引つかかるんだ、新しい予言の内容がさ。」

『一応その内容をわしにも見せてみる』

「八神、構わないよな？」

「あ、はい、どの道後日内容を送る予定でしたので」

「ほいじゃ解読したデータ送るわ」

おっさん宛にデータを送信。

内容を読んでおっさんも唸っている。

実際にジエイルが計画していた内容は伝えてあるから、おっさんも予言が正しかった事は理解しているだろう。

となれば今回の予言も何らかの形で成就される可能性があると考ええるはず。

『この内容からすると、以前の予言よりも事件規模は遥かに大きくなりそうだな』

「ああ、それに最後にある『アインスト』の文字……これに例の事件が関わっている気がしてならねえんだよ」

『ふむ、お前がそうまで言うのであれば何かしらあるのだろう。わかった、先日の事件についての情報開示を許可する。』

「すまねえなおっさん」

『構わん、つまらぬ意地を張って地上に被害が出ては元も子も無いのでな』

「あんがとさん。ああ、それと後日八神が話しがあるそうだからさ、時間空けてやってくれよ」

『いいだろう、では、何かあればまた通信を寄越せよ』

「了解」

さてとそれじゃ例の事件について説明しますか。

俺達もまだわからない事の方が多いから、あんまり詳しくは説明出来ないんだが。

【説明中】

説明を終えた後、周りは一様に考え込んでいる。

取り分け八神は深く考え込んでいるようで、恐らくは予定している部隊に関する事だろう。

「しかし、ガジェットとは。確か数年前からレリックを收拾していたはずだな。」

「うん、私もフェイトちゃんも何度か遭遇しているよ。AMFを持つてるから対処が難しいんだよね。」

「その上今回の奴は改良されて頭も良くなってるし装甲や攻撃力も上がってる。一般的な陸士部隊や航空隊じゃ少し厳しいかもしれん。」

「そっやね、こりゃどうあっても機動六課は必要や」

「俺の方はジェイルに頼んで対AMF装備の開発を急がせよう。新人連中じゃ、AMFへの対抗は難しいだろうからな。」

「そうですね、AMFについてはスカリエッティはある意味専門家でずしお任せした方がいいかもしれません」

「対抗策が出来たら直ぐにでもそちら側にも提供するようになるわ」「よろしくお願いします」

「そういや八神が構想している部隊の設立って何時頃を予定しているんだろう。」

それによつてはこちら側も色々と準備しなきゃならないだろうし、一応は聞いておいた方がいいか。

「そついや気になったんだが、部隊の設立時期と新人の目処はどうなんだ？」

「部隊の設立時期は法的な問題もありますし、何より予言が変わってしまった事でもう一度細部を見直さなきゃならないですから、恐らくは後一年以上は掛かると思うんです。それに新人の方も一応何人か候補はおるんですけど、まだ決定まではいつてないですね。」

「一応候補の中で有力そうなのがいたらデータ見せてくれるか？」

「えーと、クロノ君ええかな？」

「構わんさ、アクセルなら他言するような事はしないだろう」

「信用してくれてあんがとさん」

八神から開示されたデータを参照すると、『スバル・ナカジマ』『ティアナ・ランスター』『エリオ・モンディアル』『キャロ・ルシエ』の四名の名が記されていた。

ふむふむ、それぞれのデータからすると将来有望なのは間違いない。

スバル・ナカジマはシューティングアーツを使うようだから、俺

が稽古つけてやれるかもしれん。

ソウルアーツ
魂流は色々特殊だから教えてやるのは出来ないけど、組み手とか基礎的な格闘については教えてやれるだろう。

ティアナ・ランスターは射撃型か。

なら、プレシアやラミアが教えるのがいいかしんねえ。

それにしても、後の二人って確か以前にフェイトが引き取ったガキ共だよな？

聞いた話じゃどっちも親に見捨てられたような境遇だった気がするが……。

「なあフェイト、この二人って確か」

「うん、私が引き取った子達だよ……本当は管理局に所属させたくはなかったんだけど、どうしても二人とも人の役に立ちたいって言うから」

「はあ、この年なら学校いって友達とバカやってる頃なんだけどねえ、子供なのに根性あるじゃねえか」

こんな小さい内からそんな考えを持てるとは、なかなか出来るこっちゃねえぞ。

きつと将来はいい局員になれるだろう。

とはいえフェイトとしては心配だろうなあ。

幾等二人が決めた事だとはいえ、まだ十歳にも満たない子供を戦場に送り出すようなものだし。

でも、生き方なんて結局は周りがどうこう言おうとそいつ自身が決める事だからこればかりはしょうがないのかもしれない。

俺だって最初は両親に反対されてたけど、結局は拳王としての修

行のために一度は家を出ている訳だしさ。

もしも機会があればこの二人をアリシアとルーに引き合わせたいもんだ。

きつといい友達になれるだろうしさ。

「しかし、この新人共はなかなか見所ありそうだな」

「せやろ、アクセルさんようわかってるわぁ」

「スバル・ナカジマは格闘型だし、俺が鍛えてもいいかもしんねえな」

『アクセルがやっている修行と同じ修行は出来んだろう。下手をすると死ぬぞ。』

「そうか？」

「……い、一体どんな修行してはるんです？」

「そうだなぁ……」

【修行内容説明中】

「……人間のする修行やあらへん」

「……さ、流石にこれは僕もどうかと思うぞ」

「……ア、アクセルさん、色んな意味で凄いの」

「……さ、流石は拳王様」

「そんなに驚く程か？」

「今の修行内容だと、普通なら死ぬで……て、フェイトちゃんは驚いてないんやね」

「うん、前にアクセルから聞いてたし、実際に修行風景も見てるか
らね」

「とはいえ、まだまだなだけどさ。未だに<シャドー>の先代は

最終段階じゃねえし。」

『当然だろう、先代はそう易々とは超えられんぞ』

「わあってるって、まだまだこれから修行あるのみだ」

それから今後の部隊創設に関する事や、協力関係について話し合い今回の会合は終了。

部隊創設の目処が立ち次第、また改めて会合を開く事に。

何れ近い内に家の部隊のメンバーとも顔合わせをする事も決定した。

協力関係を築くのであればどの道必須事項だろうし、早めに済ませようという事に。

今の家の部隊の連中なら喧嘩する事もねえだろうとは思う。

……セインやウエンディ辺りが悪戯仕掛けそうで不安ではあるが。

にしても、解読した予言は思いの他ヤバイ内容だったぜ。

あの予言が本当にそのまま成就されたら、管理世界の崩壊どころの騒ぎじゃなくなる。

今のままの地上本部じゃ恐らく対処するのは難しいから、一刻も早く本局との軋轢を解消せにゃならん。

その為にも例の八神が創設しようとしている機動六課は重要だ。

本局の精鋭部隊と地上本部の精鋭であるシャドウミラー隊が協力して事件を解決する事が出来れば、地上本部勤務の連中が本局に対して理解を示すきっかけになるだろう。

まあ、レジアスのおっさんも予言の危険性については認識してくれているし、機動六課の設立には反対する事はあるまい。

ともあれ、それまでの間に地上の陸士部隊間における管轄問題などの諸問題は出来る限り解決しておくべきか。

やれやれ、当面の間は俺達に気の休まる日は来ないのかもな。

第九話：予言（後書き）

現時点でのアクセルのデータ

年齢：十九歳と半年

魔力量：S

階級：二等陸尉

保有資格：分隊指揮権、普通自動車免許

取得予定資格：教導資格

第十話：出現 - 前編

あの会合から半年、俺も二十歳となった。

例のガジェットによる事件は散発的にはあるが、何度か発生している。

どうにも奴らは根本的な習性は変わっていないようで、ロストロギアなどの魔力の高い物を収集しようとする性質があると判明している。

先日も護送中のロストロギアが襲われ危うく奪われそうになったが、ギリギリの所で阻止する事が出来た。

ただ、やはり元々のガジェット以上に性能が上がっている事もあり、一般的な陸士部隊は対応に苦慮している。

A M Fだけでなく純粋な装甲も強度を増していて、官給品のデバイスに組み込まれているような魔法ではなかなか通用し辛い。

その上あのガジェット共は厄介な事に、多少の破損だと例の生体部品により自己修復してしまうのだ。

俺も自己修復する瞬間を見たが、機械というよりもほとんど生物に近いような感じを受けた。

動きの方も段々と有機的な動きをするようになって来ていて結構手強い。

あれはもう元となったガジェットとは別の存在と考えるべきだというのがジェイルの見解。

なので俺達シャドウミラーはこれからは個人技能だけでなく集団戦闘の方にも力を入れる事に。

特にアサルト分隊は個人の力に頼る部分が大きいので、俺とラミアとトーレの連携は殊更力を入れている。

幸いにも家には旦那がいるので、集団戦闘に関する訓練については問題が無い。

ただ、どうにも俺やトーレは突撃思考が強いので、つつい突出してしまいがちで……早くこの突撃癖治さなきゃなあ。

「アクセル、少しいいか」

「およ、旦那にジェイル、どうしたんだ？」

「少し話があつてね」

「何だよ、改まって」

「とりあえず、一緒に来てくれ」

「あいよ」

どうしたんだろう、なんだか二人して凄く神妙な顔してっけど。

例のガジェットについて何かわかったんだろうか？

それとも他に何か懸案事項でも出てきたのか？

何にしても付いていけばわかるか。

《ジェイルラボ》

連れて来られたのはジェイルの専用ラボ。

ここにはジェイルが研究中の新型デバイスやらなんやら、世の中にはまだ出せない結構危ない物もあつたりする。

その中でも取り分け慎重に扱われているのが、ゼストの旦那も収

容されていた生体ポッド。

大半の人が脳死状態なので正直蘇生は難しいらしいのだが、ジェイルは何とか蘇生しようと頑張っている。

まあ、元々ここに收容されている人のほとんどが最高評議会から送られて来たらしい。

というのも、ジェイルが話してくれた最高評議会の目的は、驚く事に自分達が宿れる体を得る事。

奴らは既に脳髓だけの存在になっているので、自由に動ける体を欲したらしい。

その為の戦闘機人技術であり、人造魔導師計画やプロジェクトF・A・T・E、果ては聖王のクローンも最終的にはその目的に繋がるんだってさ。

なんともまあとんでもない事考えるよ。

もう奴らは人じゃないのかもしれないな。

「そんで、話したのは？」

「実は一人ここに收容されている人間で蘇生の目処が立った人間がいるんだ」

「マジで？」

「ああ、元私の部下でもあるクイント・ナカジマだ」

「確か陸戦魔導師でメガ・ヌさんとコンビ組んでたんだっけ？」

「そうだ」

前にゼストの旦那に聞いた話じゃ、シューティングアーツの使い手だったな。

蘇生したら一度組み手してみたいもんだ。

にしても、この二人の反応からすると蘇生について何か問題でもあるのだろうか。

蘇生出来るならそれに越した事は無いはずなんだが。

「なあ、何か問題でもあるのか？」

「彼女の夫であるゲンヤ・ナカジマとその娘二人にどう説明したのかと思ってな」

「あゝなるほど」

「何せ彼女は公式に死亡扱いになっていて、葬儀までされているからね」

「葬儀まで……て、そんな時の遺体はどうしたんだ？」

「あれは私が作った精巧な偽者さ。何せ彼女は研究素体としては優秀だったからね、手放したくは無かったんだよ。」

「なるほどねえ」

そりゃ二人して難しい顔すんのも無理ないわ。

死亡していたと思っていた家族が実は生きていて、それも敵と思う相手がずっと保管していたなんて。

そんな話を聞かされたら俺だって怒る。

特に娘二人の方はそう簡単には納得しないだろう。

親を奪われてそれを今まで隠されていたんだから、相当頭に来るだろう。

こりゃ下手な説明したら不味い事になるかもしれないなあ。

「まあ、あれじゃないかな、下手にお為こかしするよりも正直に話すのが一番いいんじゃないか？」

「しかし、それで相手が納得してくれるだろうか」

「納得するしないは今俺達が考えてもしょうがねえだろ。誠意を見

せる意味でも、包み隠さずに事実を話すべきだと思っぜ。」

いっその事、レジアスのおっさんにも同席して貰うか。
多分話をすれば協力してくれるはず。

何しろおっさんも少なからず絡んでいる訳だから、あの人がその
事をうやむやにするととは思えない。

だとしたら、おっさん経由でゲンヤ・ナカジマとその娘二人を呼
び出して貰って話しをするでしょう。

その上で相手がどうであるかは、その時の状況次第だ。

まあ、二丁三発位なら殴られる事も覚悟しておこう。

「ならさ、レジアスのおっさんにも協力して貰おう。一応おっさん
も関わっている訳だしさ。」

「そうだな、レジアス経由でナカジマ三佐を呼び出して貰うのが一
番いいかもしれん」

「それが一番いいかもしれないね」

「まあ、話ただけじゃ納得出来ないだろうから、二丁三発程度は
殴られるのも覚悟しておくべきだろうさ」

「その位は覚悟の上さ。むしろ、それで済むなら御の字だよ。」

「そだな。それじゃ、レジアスのおっさんには俺が頼んでおくよ。
んでさ、蘇生の方はどの位で出来そうなんだ？」

「そうだね、恐らくこのまま順調にいけば後半年といったところか
な」

「そか」

ジェイルから聞いた話じゃ、蘇生つてのは最後の詰めが一番神経
使うらしい。

ので、下手に急いだとしても何処かに欠陥が生じる可能性が高い

んだそうだ。

なので、ジェイルが半年と言えば半年掛かるのだろう。それについてはどうしようもないので、そのまま続行して貰う事になる。

つつても心配するような事は無い。

家にはプレシアもラミアもいるのだから、蘇生自体は問題なく出来るはず。

後はゲンヤ・ナカジマっておっさんがどう出るかだけど、これについては今考えてもわかんねえから考えない事にしよう。
上手く話が纏まればいいんだがねえ。

それから三日後、俺は地上本部に來ている。
用事といえば、例のクイント・ナカジマさんに関する件でおっさんに直接話そうと思ったから。

まあ、最近忙しくて地上本部の方にはあんまり顔出してなかったから丁度いい。

此処の人達とは結構仲良くやってる。

「アクセル二尉、本日はどうされたので？」

「んっおっさんにちよつと用事あつてね」

「アクセル二尉、また訓練お願いします！」

「あいよ」

てな具合に、結構皆普通に話しかけて来てくれる。

なんでも俺のおかげで地上本部のピリピリした空気が和らいだそうだ。

多分あれじゃないか、レジアスのおっさんの雰囲気が変わったからじゃないかね。

昔のおっさんは何時も張り詰めてて、何というか余裕が無かったし……と、そんな事よりさっさとおっさんのところにいこつと。

《レジアス中将執務室》

部屋の扉の前にある呼び出し用のインターホンを押すとドゥーエが出た。

ちなみにドゥーエは既に地上本部内では変装をしていない。

する必要が無いってのもあんだけど、ドゥーエがゴースト分隊に所属している事は基本的には俺達の部隊以外ではおっさんしか知らない。

その辺は部隊の特性上しょうがないんだけどね。

「あら、アクセル」

「おっさんいるか？」

「ええ、いらっしゃるわよ」

「んじゃ開けてくれい」

扉が開くとおっさんが執務机の椅子に座り何やら難しい顔をしている。

ありやムカついてる時の顔だ。

何ぞあつたんか？

……もしかしてあれかな、本局が聖王教会から無茶振りでも来たのかな。

「おいっす、おっさん」

「ここでは中将と呼べと言っておるだろうが」

「いいじゃん、今更だし。つか、どうかしたんか、難しい顔してさ。」

「ああ、本局からこんな物が届いた」

「どれどれ」

おっさんから渡された書類を見ると、例の八神が主導となっている機動六課に関する内容だった。

六課に関しては既におっさんにも教えてあつて設立そのものはOKだと言っていた。

正式な書類とか色々あるからまだオフレコではあるんだが。

しかし、この書類にはその六課に関してとんでもない事が書かれていた。

書かれていたのは予算に関する事だ。

元々六課の予算は本局が出す予定だったのだが、その額が半端じゃない。

一般的な陸士部隊の五倍以上の予算という、ある意味じゃとんで

もない金食い虫。

何だけど、この書類を見る限りその額が増額されている。

その額がなんと一般的な陸士部隊、三部隊分。

…… どんだけ金使うつもりなんだよ。

しかもその増額分を地上本部が負担しろとか書いてある。

そりゃ六課が設立されれば当然の如く連中にも地上の治安維持やらなんやら協力して貰う事になるだろう。

だから多少なりとも予算なんかで協力するのはおっさんとしても
吝かじゃないはず。

けどこの増額分て…… 年間じゃなくて月単位だぞ。

ぶっちゃけこんなアホな予算地上本部で払いきれん訳が無い。
唯でさえ地上本部の家計は火の車状態なんだから。

「これ、要求して来たの誰よ？」

「例のラスキン中将の子飼いの准将だ」

「意趣返しのもりかね」

「だろうな」

全く未だに掃除しきれてなかったのか、あのラスキン一派は。

こりゃあれだな、クロノに頼んでこの要求撤回して貰うようにしよう。

幾等なんでもこんな要求不当もいいところだ。

元々本局主導なんだし、向こう側にこちらへ強制する権利は無い。

てか、これ、八神達は知ってるんだろうか。

……いや、知るはずないか、八神達が知れば確実にストップかけるだろうし。

「ちとクロノに聞いてみるわ」
「うむ」

クロノから預かった端末番号へアクセスすると丁度休憩中のクロノが出た。
隣には見知らぬ男がいるが、とりあえず構わず話を始めるとしよう。

『どうした、アクセル』
「実はよクロノ、例の六課の事でちと問題かな」
『……ここでは不味い、執務室に戻るからこちらから掛け直す』
「あいよ、休憩中の所悪いな」
『いや、構わないさ、それじゃ』

【十分経過】

十分後、クロノから通信が来た。
随分と息切れしているようだが、悪い事したかな。

『すまない、待たせた』
「いや、いいって」
『それで、六課についてという事だったが』
「ああ、実はさ」

本局から届いた例の書類について聞いてみると、やはりクロノも

知らないらしい。

話を聞いたクロノも頭を抱えている。

唯でさえ六課の設立は裏技的な事が多いのに、下手に問題を起こせば設立その物が危なくなる。

これは何とかしないとなあ。

「つか、この准将って六課の事知ってるのか？」

『設立自体は知っていても詳しい事は知らないはずだ。特に例のラスキン中将に近かった者は、あまり重要な案件は任されない事になっているから。』

「ふーん、干された訳か」

ある意味じゃ起死回生を狙ったのかもしれない。

クロノやその母親であるリンディ・ハラウンなどは、三提督ともある程度親しい事は有名で本局じゃある意味一番有力な派閥だ。

その派閥が本局と地上本部の軋轢の原因を作ったとしたら、派閥の勢いを殺ぐ事が出来るとでも考えたのだろう。

あのラスキン一派の逮捕以降、きつと奴に近かった連中は本局じゃ落ち目なんだろうから多分必死なんじゃないかな。

とはいえ、こんな阿呆な事を容認する訳にもいかないし、何よりもうこれ以上余計な茶々を入れられる訳にもいかん。

ならば徹底的に潰す必要がある。

「なあ、クロノ、この准将潰せないか？」

『また物騒な事を言うな、君は』

「だってよ、これ以上余計な茶々入れられたら面倒臭いだろ」

『まあ確かに。ともあれ、これは後見人である僕やカリム、それに

三提督も知らされず独断で行われたものだろう。下手をすれば本局と地上本部の軋轢を増大させかねない。よって、三提督とも協議した上でしっかりと処罰させて貰う。」

「ああ、クロノがそう言うなら間違いないだろ。何か手伝う事があったら言ってくれよ。」

『ああ、その時は頼むよ、それじゃ』

「待ちたまえ、クロノ提督」

『レジアス中将、何か？』

クロノが通信を切ろうとした時、おっさんが待ったを掛けてきた。多分六課設立に関する事だろう。

今のおっさんなら反対するような事は無いだろう。

怒鳴るくらいはするかもしれんけど。

「機動六課設立については、わしは基本的には賛成だ。シャドウミラー隊の協力体制やアクセル達の出向についても許可しよう」

『よ、よろしいのですか？』

「うむ、機動六課設立は本局と地上本部の和解のいい材料になるかもしれない。それに、わしも嫌な予感がしていてな、今までにない以上の問題が地上で起きようとしている……そんな気がしてなんのだ。」

『中将……』

「よって、何があってもこのバカげた要求は止めねばならん」

『了解いたしました。早急にも事態を究明し双方にとって不利益とならないよう努めます。』

「うむ、頼んだぞ」

おひょーあのおっさんが本局提督であるクロノ相手にねえ。

こりゃ明日は槍が降るかもしれないなあ。

しかし、おっさんもやつぱ何かを感じている訳か。
流石は現場たたき上げだけの事はある。

今現在このミッドチルダ地上において蠢いている何かを肌で感じているのだろう。

こりゃ俺もうかうかしてらんないな。

「いやはや、おっさんがまさかクロノ相手にねえ」

「わしとて今がどのような状況かは理解しているつもりだ」

「そつか。んじゃま、六課の事はクロノに任せるとして、今日俺が来た本題に移りたいんだがいいか？」

「そういえば別件だったな、して、内容はなんだ？」

「実はさ」

クイント・ナカジマに関する蘇生の目処が立った事を伝える。

するとおっさんの顔が何やら沈痛な面持ちに変わった。

……仕方ないのかもしれない。

何せあのゼスト隊の全滅については、おっさんも無関係とは言えないから。

「だもんでさ、クイント・ナカジマの旦那であるゲンヤ・ナカジマに色々説明しなきゃならないから、おっさんにも同席して貰いたくてね」

「……そうだな、恐らくナカジマ三佐はわしを大層恨んでいるだろう。自分の妻を死に追いやった一人でもあるのだからな。」

「おっさん……」

「ならばこそわしも謝罪せねばなるまい、それがせめてもの礼儀というものだろう」

「説明するときは俺とゼストの旦那、それにジェイルとメガーヌさんにも同席して貰うつもりだ」

「わかった、では、三日後に予定を組むとしよう。ナカジマ三佐にはわしから通達しておく。」

「それとさ、出来ればナカジマ三佐の娘二人も呼んでやってくれな
いか」

「無論だ、その二人の娘にも真相を知り権利はあるからな」

「悪いけど頼むわ、俺の方はジェイル達と説明する内容について話し合っておくから」

「うむ」

話し合っただけでも、どう話を持っていくかの段取り付けるだけだ。

基本的にナカジマ三佐相手に隠し事をするつもりはない。

それじゃ説明する意味が無い。

とはいえ、安易に最高評議会関係話すのは不味いのは確かなんだ。

何せ相手は既に人間やめちまっているような連中だから、真実を知った奴相手に何をして来るかわかったもんじゃない。

まあ、生きているのかすら不明だから、そこまで警戒する必要も無い気がするが。

と、そんな事を考えていると、突然緊急コールが入った。
相手は……ジェイルか。

「どうした、ジェイル」

『アクセル、市街地南部にガジェットと思われる反応が多数検出された』

「何だと?! それで数は?」

『確認されているだけで二十、恐らくまだ増える可能性が高い』

二十以上だと?!

そんなん普通の陸士部隊じゃ対処しきれない。

こりゃ不味い!

急いで現場に向わないと!

「おっさん、飛行許可を!」

「許可する、近隣の部隊へはわしの方で指示を出す。急ぐのだ!」

「OK、ジェイル、詳しい座標データを!」

『もう転送してある、こちらもストライカー分隊も含めて出撃させるよ。すまないが、アクセルはそのまま現場に向かい敵の足止めを頼む!』

「わあった! ゲイン、行くぞ!」

『了解だ、アクセル!』

しかし、ガジェット二十体か。

一体一体はそうでもないが、徒党を組まれると結構厄介なんだよな。

にしても、何で突然そんな数が現れたんだ?

一体何がどうなってやがる。

『アクセル、今は集中しろ』

「おっと、いけね、そうだった。そんじゃ最高速度でぶっ飛ばしていくぜ!」

『しくじるなよ』

「わあってるって!」

市街地上空を最高速度でぶっ飛ばし現場付近に到着。
既に近隣部隊により住民の避難誘導がなされている。

そんな中、ガジェットと思しき機影を探してみると……なんだあ
りゃ？

ガジェットから妙な触手が生えてる。

「ゲイン、あれって」

『私にもわからんが……このままでは民間人に被害が出るぞ』
「おっとそうだった、敵についての考察は……」

体内で魂^{ソウル}を練り上げ戦闘準備。
一体も残さず破壊する！

「全部ぶっ潰してからだっ！　いくぜ！」
『おう！』

シュトゥルムヴィントを使い、手近なガジェットに接近し魂^{ソウル}を乗
せた拳を叩き込む！

ガジェットはそのまま爆砕、だが……。

「ゲイン、今の感じたか？」

『ああ、プロテクションでもバリアジャケットでも無い。何か空間そのものに妨害されたような感じた。』

「……こりゃ気合入れてかからねえとヤバイな」

『そのようだ、出し惜しみしては押し切られる』

「んじゃま……」

更に体内で魂^{ソウル}を練り上げ全身の筋肉の隅々にまで魂^{ソウル}を流し込む。
これ以上被害を増やさない為にも……。

「全力で潰してやるぜ、ガジェット共！」

手近な一体に向け回し蹴りを放つ！

ガジェットは防御する間もなく碎けるが、やはり自己再生を始めやがった。

くそつたれめ、半端な攻撃じゃ再生されちまうか……。
なら、再生出来ない位に碎くまでよ！

『アクセル、半端な攻撃では駄目だ！』

「なら……パワーで碎くのみ！」

拳に体重を乗せ、捻りを加え更に腕にシュトルムヴィントを纏い拳の速度を上げる。

拳がヒットした瞬間、ガジェットは粉々に粉碎！

だが、その瞬間別のガジェットが俺に向け触手を伸ばして来た。
ちい、そう簡単にはやらせてくれねえってか！

「ゲイン！」

『パンツァーガイスト』

防御魔法を展開するが、結構な衝撃を受ける。

他のガジェットも俺に気づき、一斉に触手を伸ばして来やがった！

「くそ！ なめんなあ！」

更に手近なガジェットに向け玄武剛弾を放ち粉碎。

そのままシュトゥルムヴィントで近づき更に二体を拳と蹴りのコンビネーションで破壊！

『アクセル、砲撃、来るぞ！』

俺が二体のガジェットを破壊した瞬間、残りのガジェットの中央部が赤く光り、奴らから一斉砲撃が来た！

くそ、一発一発はどうって事ないが数が多いからなかなか前に進めない。

このままじゃジリ貧になっちまう。

どうにかして奴らの砲撃を掻い潜らないと！

「……ゲイン、パンツァーガイストを三重に展開！」

『どうするのだ』

「そのまま敵陣に突っ込んで乱戦に持ち込む！」

『了解だ、しくじるなよ』

「ゲインこそなっ！」

『パンツァーガイスト、三重展開！』

「いっくぜあ！」

奴らが密集している中央までパンツァーガイストを三重展開し乱戦に持ち込む。

するとどうだろう、先ほどまで砲撃一辺倒だったのがまたもや触手による攻撃に切り替わった。

恐らく味方同士を攻撃しあわないようになっていんだろう。
ならば好都合、この間に叩き潰させて貰う！

「おらおらおらあ！」

拳と蹴りの猛ラッシュでガジェットを破壊するも、何故かどんどん湧いて来る。

これじゃキリが無い！

『このままでは不味いな……』

「ああ、流石に俺の体力も何時までも持つわけじゃねえしな」

そう言いながらも俺はガジェットからの攻撃をかわしつつ、奴らを破壊し続ける。

たく、ゴキブリみたいに湧いて来やがって！

いい加減にしつこいつてんだよ。

一体何処から湧いて来るんだ。

『アクセル様！』

「アクセル！」

「ラミア、トーレ！ て、旦那達はどうした？！」

『それが、西部方面にもガジェットが出現した為、今はそちらへ急行しております』

「マジかよ?!」

本当にゴキブリみたいな連中だな。

一匹見つけたら百匹はいるってか。

だが、そんな冗談言ってる余裕も無い。
早くなんとかしないと。

「ちくしょう、一体こいつらどつから沸いて来るんだよ!」

『アクセル様、私が出現位置を特定いたします。その間、ガジェット共の掃討を!』

「了解、トーレ、行くぜ!」

「ああ!」

トーレのスピードで攪乱し俺のパワーでガジェットを破壊。
だがまあ、案の定破壊する傍から湧いて来る。

たく、うざったいったらねえな!

こんちくしょうめ!

それから数十分、ガジェットを破壊し続けているとラミアが遂に出現位置を割り出した。

巧妙に隠されたそれは、一種の転送ポートのようなものらしい。

誰がそんなもん用意したんだか。

だが、そうと判ればやるべき事は唯一つ、その転送ポートを破壊

する！

「ラミア、トーレ、ここは任せる！」

『畏まりました』

「手早くな、アクセル」

「わあってるってば」

出現位置に向けシュトゥルムヴィントを全開にし全速力で急行すると、そこには得体の知れない物体が鎮座していた。

なんともグロテスクというか……ともかくあれを破壊すればもうガジェットは出現しないはず。

^{ソウル}魂を右拳に集中。

敵の真芯を狙い……。

「玄武剛弾！！」

全力の玄武剛弾を放つ。

すると、玄武剛弾が着弾すると同時に転送ポートは爆発を起こし粉砕。

あたかも元々そこに存在しなかったかのように塵一つ無く消え失せた。

なんだか嫌な感じだ、まるでこうなる事が予期されていたような。

それから程なくしてガジェットの掃討は完了。

旦那達の方もラミアからのデータに基づき出現位置を特定。

そのまま残りのガジェットも無事に殲滅し状況終了。

しかし、今回のガジェット事件による被害は結構なものとなった。

幸いにも死者は出ていないが、それでも怪我をした人はいるらしい。

それに家屋などの建物への被害は結構バカに出来ない。

こりゃ早急にも対策立てないと、洒落じゃ済まない事になりかねない。

装備の強化についても本局技術部にも協力を要請する必要があるだろう。

それに奴ら……恐らくあれが予言に出て来たアインストなんだろう。

既にガジェットとは呼べない存在に成り果てている。

奴らについても早急になんらかの情報を得る必要がある。

となれば……本局の無限書庫に調査の依頼を出すべきか？

あそこなら、無駄に情報詰まってるから何かしらの手掛かりがあるかもしれない。

そうとなれば、早速明日にでもクロノ経由で頼むとしよう。

「ミッド地上は更なる混乱へ……か」

『奴らは恐らく尖兵に過ぎないだろう。この騒乱は、まだまだ先が

見えんな。
□

「全くだ」

あの予言が本当なら、恐らくあれ以上の敵がいるのは間違いない。
だとすればこの騒乱はもっと大きな騒乱へと発展するだろう。

だが、そんなのを黙って見逃す事は出来ない。

俺達シャドウミラー隊と地上本部の皆で必ず阻止してみせる！

第十一話：出現 - 後編

昨日の事件解決後、俺はすぐさま地上本部に戻りおっさんや旦那と今後の対応について協議。

奴らと直接交戦した俺達の意見としては、今現在の官給品デバイスなどの装備では恐らく歯が立たないという結論に達した。

何かはわからないが、奴らは特殊なフィールドのようなものを纏っていてそれが魔法なり物理攻撃なりを軽減してしまう。

尤も俺や旦那クラスの攻撃になれば然程問題は無いが、官給品デバイスに組み込まれているような汎用魔法では分が悪い。

かといって既存のデバイスに無理に強力な魔法を組み込むと耐久性の問題などが出てしまう。

となるとやはり新型のデバイスが必要になって来るのだが、問題はコストの面と生産ラインの確保。

新型デバイスに求められるのは今以上に強化された魔法の組み込みと、ストレージデバイスと同程度のコスト、更には現在の生産ラインを使う事が出来る事。

ぶっちゃけこれだけの要求を満たすとなると開発側としてはかなり厳しいだろう。

それに事態が急を要する以上、クロノを経由して本局の技術部にも協力を依頼する必要がある。

それにAMF対策もしなきゃならんから、こりゃ開発部側は大忙しになりそうだ。

「しっかし、どうしたもんかねえ」

「新型デバイスの供給問題、予算問題、部隊編成……正直頭の痛い問題ばかりだ」

「当面の間は集団戦法に頼るしかあるまい」

「そうだなあ、複数人で一体を相手にする位しかないか」

通常の装備で戦うなら人海戦術でもって対処するしかないだろう。一体に複数人で一齐に攻撃すれば恐らく攻撃も通る可能性は高い。

実際の所はもう少しデータが揃わないと確実な事は言えないが、今の時点では仕方ない。

ジェイル達も現在最優先で解析に当たっているし、その結果を待つ他は無いか。

それにしても奴らの一番厄介なところはあの転送ポートらしき物体だ。

あれが有る限り際限なく出て来るんだから。

もしかしたら、奴らは俺達よりも遥かに精度のいい転送技術を持っているのかもしれない。

そうだとしたらこれ程面倒な事は無い。

人の密集する場所とかに転移出現でもされ様ものなら、人的被害がどの程度でるか皆目検討も付かん。

こりゃそっち方面の対策もしていく必要がある。

と、おっさん達と協議しているとコールが入った。

相手はクロノか、丁度いいや技術部への依頼も済ませてしまおう。

「クロノか、どうしたんだ？」

『報告を聞いたものでね』

「あゝもう情報行ってるのか」

『ああ、事件の直後にスカリエッティが送ってくれてね。それで、出来れば事件の詳細については直接会って話をしたいんだが。』

「ふむ、おっさん、構わないか？」

「うむ、許可する」

「OK、なら今から本局行くわ」

『わかった、それじゃ18番転送ポートに来てくれ、迎えを送る』

「あいよ、そんじゃまたな」

そついや俺って本局行くの目茶苦茶久しぶりな気がする。

例の司法取引を成立させる前に根回しとかで行ったつきりだったもんな。

尤も本局にはあまり用事が無いから行く必要も無かったんだが。

まあ、これからはクロノとも協議しなきゃならん事も増えるだろうから行く回数は増えそうだが。

「んじゃ、ひとつ走り行つて来るわ」

「うむ、何か進展があれば連絡を入れる」

「あいさ、序に無限書庫にも寄つて来る。何かしら情報あるかもしれないし。」

「そうしてくれ」

そうだ、行く前にラミアに連絡して一緒に来て貰おう。

ラミアの持つデータも見て貰った方がいいだろうし。

「ゲイン、ラミアに通信送ってくれ」

『わかった』

ゲインからラミアに通信が繋がり、事の顛末を話して一緒に来て

貰うように伝え転送ポートで待ち合わせ一路本局へ。

つか、クロノに報告するにしても俺達もまだ然程情報を得ている訳じゃないからなあ。

何れは回収した奴らの破片についても本局に提供すべきだろうか？

……いや、下手にあれば外に出さない方がいいかもしれない。

何せ自己再生まで出来るような代物だ。

下手に情報が流出しようものなら、色々と面倒な事になるのは必至。

情報が出揃って対策が整うまでは外には出さないようにしておく。

後でおっさんにも伝えておかなきゃ。

ラミアも合流し本局へ到着。

やっぱ本局の転送ポートだけあって、そこかしこで局員と思しき人や民間人と思しき人もいる。

やっぱ本局は忙しそうだねえ。

最近の地上本部も慌しいけど。

と、そっぴや迎えが来てくれるはずだったな。

あんまうるちよろしないで大人しくしてるか。

『しかし、何か先ほどから視線を感じるのだが』

「あれじゃね、ラミアがいつからじゃねえの、美人だし目立つたる」

『そ、そんな、アクセル様ったら』

『何でお前はそういう事をサラツと言うのだ……全く、本当に余計なところが先代とそっくりだ』

「素直な感想言ってるだけじゃんか」

『やれやれ、これは本気でその辺りも一度教育しなければならんな』

ラミアが美人なのは見りやわかるから、別に変な事でも無いんだけど。

それに家の部隊にいる女性は全員揃って美人だし。

メガーヌさんは明らかに旦那とくっ付きそうだけど……てか、早くくっ付けと言いたい。

まあ、旦那は仕事一筋な人だから、なかなか上手いかないんだろうけど。

「アクセル、お待たせ」

「およ、迎えてってフェイトか」

「うん、丁度クロノに用事があったから」

「そっか、悪いな」

「いいよ、それじゃ行こうか」

「あいさ〜」

フェイトの後を付いて本局内を歩いて行く。

やっぱ本局は金の使い方が違うねえ。

そこらにある施設を見るだけでも、地上本部とは予算の桁が違う

のがよくわかる。

まあ、担当する事件規模が次元世界なんていう広範囲だからそれ
も必要な事なんだろう。

かといって、地上本部を軽視してはいかんだ。

ミッドチルダは管理局発祥の地でもあるから、管理世界中に広がる
企業なんかでもミッドチルダを本部としているところは多い。

それに聖王教会の本部だってある以上、ミッドチルダは管理世界
の中でも取り分け重要な位置にいる。

勿論他の管理世界もそれぞれの特色があり、相互に影響しあって
成り立っているからミッドチルダのみ平和であればいいという訳で
もない。

その辺の匙加減が難しいんだよねえ。

あっちを立てればこっちが立たずってなっちゃうからさ。

「着いたよ」

「おう」

扉が開くとクロノともう二人が座っている。

一人は男、一人は女性。

男の方はスーツ姿の長髪。

女性の方は管理職の制服を着ている。

「おいつす、クロノ。んで、そっちの男と美人さんはどちらさん？」

「あらやだ、美人だなんて」

「……アクセル、人の母親をいきなり口説かないでくれ」

「母親……え？ マジで？」

クロノの母親って事は、この人がリンディ・ハラウンか。
確かに局でも有名だよな、美人な提督って事で。

学校時代の友達は、この人に憧れてたっけ。

……人妻わっほいと云ってただ。

「リンディ・ハラウンです。娘と仲良くしてくれてありがとうございます。」

「そっか、フェイトのもう一人の母親でしたっけ、と、アクセル・ターナーです、よろしく」

「フェイトさんからよく貴方の話を伺いますわ」

「俺の？」

「か、母さん?!」

そっぴや、クロノも俺の事をフェイトから聞いてるって云ってたっけ。

変な事言ってなきやいいんだけど。

「ちなみにどんな話を？」

「よく食事に行くとかね、この娘にしては珍しく『か、母さん、もういいでしょ?!』」

「おやおや、フェイトがクロノ君やユーノ君以外の男性の話をするのは珍しいですね。おっと、僕も自己紹介しておこう、僕はヴェロツサ・アコース、カリム・グラシアの義理の弟だよ。気軽にロツサと呼んでくれ。」

「アクセル・ターナーだ、よろしく。俺の事もアクセルって呼んでくれ。」

義理の弟なら似てないのも当然か。

つか、ロツサの周りにいる犬は何だありや？

半透明だし、なんだか魔力の波動を感じるから使い魔かなんかか？
にしては、どうも存在が希薄というか安定していない感じだけど。

「なあロツサ、お前の周りにいる犬って何だ？」

「み、見えるのかい？」

「ああ、今三匹いるだろ、なんだか半透明だけど」

「これは驚いた、まさか僕の無限の獵犬ウエントリヒ・ヤクトがこうも容易く見透かされるなんてね」

「無限の獵犬？」

「僕の持つ古代ベルカから受け継がれるレアスキルだよ」

「へーそうなんか」

古代ベルカから継承されてるって事は、カリムさんの預言者の著書フテンと同じようなもんか。

まあ、俺の魂ソウルもレアスキルのようなもんだけど。

そついや八神も古代ベルカのレアスキル持ちなんだっけ。
確か蒐集とかいうスキルだったな。

「そんじゃま、自己紹介も終わったしさくつと話につて、クロノ、
リンディさんやロツサには聞かせていいのか？」

「ああ、母さん……もとい、リンディ統括官は六課の後見人だし、
ロツサは査察官でもあるから情報収集を頼んでるんでね」

「そか、つか、母親なんだから別に言いなあする必要ねえべ」

「い、一応体面というものがだな」

「あらあら、この子ったらもう」

リンディさん、めっちゃ母親だな。

つか、うちの間で呼び方なんて今更じゃねと思う。

そりゃ締めるべき所は締めるべきだろうけど、今はある意味身内しかいねえんだしそこまで気にする必要は無いだろうさ。

まあ、俺は身内以外がいても気にしないけど。

「今は身内しかいねえんだから、気楽にいこうぜ」

「そっだよクロノ君、真面目なのもいいけど適度に気を抜かなきゃ駄目だよ」

「それもそうだな……それじゃ話を始めようか」

「おう、んじゃ今回の事件のあらましから話そう、詳しいデータなんかはラミアが出てくれっから」

『お任せを、アクセル様』

今回の事件について、念の為最初に起きた廃棄区画でのガジェット事件から説明を開始。

時折ラミアがデータ上の補足をしながら進める。

ああ、念の為、ゲインとラミアの事はちゃんと紹介しておいた。
その際ラミアの事を女房役って言ったら、ラミアが軽く暴走しかけてフェイトが不機嫌になったが……なんでだろうか？

【説明中】

「今分かっているのはこれ位だ。ちなみに俺達はこの相手を『アイnsto1』と呼称してる。」

「予言に出て来た言葉か。わかった、こちらでもその呼称を使うでしょう、しかし今回の事件は予想以上に厄介な事件のようだ」

「ああ、予言の事も考慮するとミッドチルダだけで事が済むとは思えない」

「確かにそうだね」

間違いなくミッドチルダだけの問題では止まらないだろう。

予言にもある通り他の世界にも波及するのはほぼ間違いないと予想出来る。

だが、そうになると、管理局の戦力だけで果たして防ぎきる事が出来るのかどうか。

勿論聖王教会にも協力して貰わなきゃならないだろうけど、それだけで足りるのか正直不安が無いと言えは嘘になる。

六課を設立するのもいいけど、ぶっちゃけあの部隊だけでどうにかなる範疇を越えている。

こりゃ急いで戦力を整える必要があるが……。

「それにこの相手がフィールドのような物を纏ってるってどういう事？」

「攻撃した瞬間、何かに阻まれたような感じを受けるんだ。ある程度の威力があれば問題ないが、官給品のデバイスによる魔法じゃ結構厳しいと思う。」

「そうなると戦力の増強は急務という訳か」

『それに、これは推測だがまだ奴らは尖兵に過ぎないと思われる。更に強力な個体が出現する可能性がある。』

「そうだとすると、六課の設立は急がなければならないわね」

「予定を前倒ししなきゃ駄目みたいだね、クロノ」

「ああ、もう悠長な事は言ってられないだろう」

確か八神の話しじゃまだ設立までは一年以上掛かるって言ってた

な。

確かにあと一年も待つてたら、設立する意味が無くなってしまいかもしれない。

だとすれば色々裏技を駆使してでも、六課の設立は急ぐべきか。正直、分散して出現されるとシャドウミラー隊だけじゃ手が足りなくなる。

陸士部隊は各部隊の戦力が均一化されてはいるが、突出した部隊が無いからこういった強敵が多数出現するような場合には弱い。

その弱点を穴埋めする為にも六課の設立は急務という訳か。

これはまじでおっさんにも協力して貰う必要がある。

幸いおっさんも六課の設立には賛成してくれているから割とスムーズにいくと思うけど。

つつても、昨日出現したアインスタ1はガジェットから触手が生えていた……というよりも、ガジェットの内側を食い破るように触手が生えてきていた。

その事を踏まえて推測すると、奴はまだ完全な状態じゃないといえる。

まあ、樂觀視は出来ないけど、まだ時間的余裕は多少なりともあるだろう。

その間に出来る限りの準備を進めなきゃならないな。

にしても、奴らの行動原理というか目的がいまいち良くわからない。

前は人の全く居ない廃棄区画だったし、今回は市街地の端っこの方だ。

人間を狙っているのか元々のガジェットと同じようにレリックなどの魔力の高い物を狙っているのか、それともまた別の狙いがあるのか……。

その辺も調査しないといけないか……やれやれ、やる事多過ぎて手が回らないぜ。

その後も話し合いを続け、今後本局と地上本部の垣根を越えて協力していく事で決定。

ロツサも査察官という立場で情報収集などで協力してくれる。

ただ、六課の設立は出来る限り迅速に行うようにするという事だが、どうしても法律の面も関わって来るので直ぐにという訳にはいかないようだ。

でもまあ、当初の予定よりは早まりそうなので何とかなるだろう。

「んじゃ、後は無限書庫に寄って行くか」

「なら丁度いい、ユーノを紹介しておこう」

「ユーノって？」

「無限書庫の司書長で、私達の幼馴染だよ」

「そうなんか」

無限書庫の司書長って事は、あの放置されまくりで有名だった無

限書庫を整理したって事か？

それだけでも目茶苦茶凄いいんじゃない？

何せあそこは管理局でも既に何があるかの把握出来ない一種の魔窟と呼ばれてた場所だからなあ。

聞いた話じゃ古代ベルカ時代の記録すら眠っているという話だし。

一部じゃ下手をするとアルハザードの記録もあるんじゃない？

なんて言われているからなあ、一体どんな所なのやら。

《無限書庫》

リンディさんとロツサは別の仕事があるので、自分の部署へ戻って行った。

リンディさんからは近い内に地上本部にお邪魔すると言われたが……その際の目がどうも……何狙ってるんだあの人……。

まあ、それはともかくクロノとフェイトと一緒に無限書庫に到着するとあっちゃこっちゃで忙しく人が動いている。

外から中を覗いてみる限りだと上も下も底が見えない。

伊達に無限書庫って名前じゃないだけの事はある。

でも、思ったより中は整理されているみたいで壁を埋め尽くす本棚に詰め込まれた本はきっちりと並んでいる。

「ほへへ結構真面目に整理されてんじゃない？」

「ここが整理されるようになったのは、ユーノが司書になってからさ」

「そうなんか」

ユーノってのは優秀なんだろう。

じゃなきゃここの整理なんて出来ないだろうし。

て、そういや、肝心のそのユーノってのは何処にいるんだ？

中には女性局員しかいねえけど。

「今ユーノを呼び出している、少し待っていてくれ」
「ほいほい」

クロノが呼び出しを掛けてから程なくして一人の男がやって来た。
多分あれがユーノだろう。

「お待ちせ、クロノ。フェイトも久しぶりだね。」

「すまないな、仕事中に呼び出して」

「久しぶり、ユーノ」

「いいよ、それよりどうしたの？」

「ああ、彼が無限書庫で調べたい事があるそうなんだ」

「アクセル・ターナーだ、よろしく」

「ユーノ・スクライアです、よろしく」

ユーノと握手を交わす。

やっぱ見た目通り柔和な性格っぽい感じを受ける。

「彼は聖王教会にも認められている二代目拳王だ。ユーノとしても
彼と話す事は有益だと思うぞ。」

「二代目拳王……て、あのベルカ統一王の拳王ですか？！」

クロノが俺を二代目拳王として紹介した途端に突然食いついて来た。

な、なんか目がヤバくね？

明らかにギラついてますけど。

……さっきまでと180度様子が変わったぞこいつ。

「ユーノは考古学者でもあるんだ」

「ああ、なるほど。それなら興奮するのもわかるわ、何せ古代ベル
力時代の生き証人が二人もいるんだし。」

「是非話を聞きたいです！」

「考古学つてのには俺も興味無い訳じゃないし、暇なときなら別に
構わないけど今はちよいと急ぎでね、悪いけどさ」

「何かあつたんですか？」

「ここでは不味いから、ユーノの執務室で話そう」

「うん、わかった」

《ユーノ執務室》

執務室にあるソファーに俺とラミアとフェイトの三人が座り、向
かい側にユーノとクロノが座った。

さて、何処から話し始めるべきか……やっぱ予言も含めて話した
方がいいだろうかね。

「それで、調べたい事って」

「結構長くなるけどいいか？」

「うん」

最初に起きたガジェット事件や予言の事、果てはジェイル達の事
も含めて可能な限りの情報をユーノに提供。

話の最中、ユーノは今回の事が非常に厄介な事態であると気がついたのか神妙な面持ちで話を聞いていた。

しかし、正直な話を言えば無限書庫でも情報があるかどうか怪しい。

だが、今は少しでも情報が必要だ。

本格的な対策を講じるにも今の俺達は、敵となりうる存在について何も知らないに等しい状態だ。

倒した敵の破片から『アインスト1』の事はわかるだろうけど、あれだけで終わるはずは無い。

絶対もつと強力な奴や親玉が潜んでいるのは間違いないはずだ。それらに対抗する為にも、どんな小さな情報でも今は見逃す訳にはいかないからな。

「これは非常に厄介そうだね、無限書庫でも情報があるかどうか……」

「俺のマジな感想では、『アインスト1』のような存在を人間が作り出せるのか、そこからして怪しいと思ってる」

「確かに、あれは最早機械とは呼べない存在だ」

「どちらかと言えば生物に近いと考えられます。差し詰め金属生命体とも言つべきなのかもしれません。」

「そんなに凄いの？」

「ああ、ありや自己修復というより再生と言った方がいいだろうな。何せちぎり飛ばした部分が生えて来るんだもんよ。」

「再生か……厄介極まりないな……」

「しかも、予想じゃあれはまだ雑魚中の雑魚だ。間違はなくもつと強力な奴がいるはず。」

「なんとも頭の痛い問題だ……」

奴の再生はデバイスが自己修復するときとは明らかに様子が異なる。

なんというか、こう『うじゅるじゅる……』といった擬音が聞こえてくるような感じだし。

それに奴を倒すとなれば、奴の再生速度を上回る勢いで攻撃を加えるか一撃必殺が必要。

一般的な局員に一撃必殺を求めるのは酷ってもんだろっから、手数が必要になる。

となると、今の一般局員が装備しているストレージデバイスよりも魔法の処理効率や魔力の伝導率なんかを上げたデバイスが必要になる。

ジェイルやプレシアがその辺りは既に気づいていて、対抗装備の開発を始めてはいるけど時間的な制約とかもあるからやっぱ本局技術部の支援も必要だろうな。

「それでさクロノ、本局の技術部にも対抗する為の装備開発で協力して欲しいんだ。家にはジェイルとプレシアっていう二人の天才がいるけど、それでも間に合うかどうか……。」

「勿論そちらについては僕の方から手を回しておく。幸い第四技術部主任とは結構長い付き合いだからな。」

「マリーさんだね、あの人ならきつと協力してくれるよ」

「そっか、悪いな何から何まで世話になっちまって」
「構わないさ」

ほんと、クロノは真面目だしいい奴だわ。

流石は若くして提督になるだけの事はあるよなあ。

にしても、俺って何時の間にクロノとこんなに仲良くなったんだろっ？

というか、当初からクロノの俺への対応がなんか柔らかかった気がするが……。

「どうしたの、アクセル？」

「んあ、いやさ、俺って何時の間にクロノとこんなに仲良く成ったのかなって」

「そういえばそうだな。なんだかいつの間にか友人になっていたし。ああ、多分だけど周りに男の友人が少ないからじゃないか？」

「あゝそういえばそうかも、家も男は俺と旦那とジェイル、それにゲインだけだし。他全員女だもんなあ。圧倒的に女が多いんだよね、家の部隊って。」

今改めて考えてみると家の部隊ってある意味じゃとんでもなく凄
い部隊かもしれない。

何せナンバーズは全員美人揃いだし、プレシアは言わずもがなだし
ラミアは言うに及ばず。

メガーヌさんもそうだし、アリシアやルーなんていうマスコット
までいる。

これって男からすれば花園なんじゃないだろうか。

「僕としてはユーノに早くなのはと落ち着いて欲しいんだが」

「ク、クロノ?!」

「何、高町とユーノってそういう仲なの？」

「べ、別に僕となのは……」

何という判り易い反応。

完璧に脈有りと言ってるようなものじゃないか、幾等俺でもこん

な反応されりゃわかるぞ。

しかし、あの高町がねえ……。

仕事一辺倒って感じだけど、やる事はやってんだ。

まあ、あいつも女だしそれにユーノみたいないい男ならそりゃ好きにもなるだろうさ。

見た目だけじゃなくて中身もいいみたいだし。

「それにだ、ユーノだけでなくアクセルもな」

「俺？」

「僕としては義妹であるフェイトを任せたいんだがね」

「?!?!? w ?!?!?」

フェイトとは仲がいいと思う。

よく話もするし飯食いに行ったりもするし。

でも、フェイトと俺は友達ではあるけど別に恋人とかじゃねえぞ。それなのに何故に俺にフェイトを任せるんだ？

「何で俺にフェイトを？」

「何でって……君は気づいてないのか？」

「何が？」

『無駄だクロノ提督、そんな遠まわしな言い方をしてはアクセルは気づかん。事こういった事については、アクセルは最早病的なまでに鈍い……先代と同じでな。』

酷い言われようだな。

そりゃ確かにナンバーズの妹連中からニブチンとか言われる事はあるけど、病的って程じゃねえだろ。

そりやまあ俺は今まで修行漬けの日々だったから、異性に対して恋愛とかした事無いけどさ。

俺だつて人並みには異性に対する感情はあるつもりだぞ。

『……その顔だとわかっていないのだろうなあ』

「へ？」

「……アクセルの鈍さは相当なようだ、これは苦勞するなフェイトも」

「や、やめてよ、もう……」

『アクセルのこれは先代譲りだからな致し方ない』

なんだか目茶苦茶言われている気がするの、気のせいなんだろうか？

つか、先代と似てると言われてもあんまり実感が無いんだよ。

史実や伝記なんかである程度は知っているけど、それって先代が成し遂げた事がほとんどで人柄とかって記録に無いんだよなあ。

ゲインやラミアから聞いても、何故かはわからないけど上手くイメージ湧かないんだ。

それにゲインとラミアも封印されて以降、先代がどういった人生を歩んだのかは知らないらしいし。

何処で死んだのかや何処で子供作ったのかなど、そういった私生活的な部分については全く記録が無い。

まあ、俺という子孫がいるから子供作ったのは間違いないだろうけど、一体何処で子供作ったんだろうねえ。

……俺も拾われっ子だから生みの親はわかんないんだけどさ。

ユーノとの話し合いも終わり、本局での用事を済ませたので地上本部に戻る事に。

話し合いの中でクロノからリンディさんも言っていた通り、近い内に地上本部へ来るという話を受けた。

その際は八神や高町など、六課の主要メンバーは全員連れて来るらしい。

顔合わせの意味合いもあんだろう。

何せ守護騎士の内シグナムとヴィータは高町と同じで頑固そうだからなあ。

シヤマルとザフィーラ、それにリインフォースはそうでも無いんだけど。

それに聞くとところによるとシグナムはバトルマニアらしいから、俺や旦那に挑んでこなきゃいいんだがね。

修行は好きだけど、戦いその物は俺はあんま好きじゃないし。

痛いとか傷つくとかはどうでもいいんだけど、戦いその物には喜びは見出せない。

俺が修行するのは先代を超える事、そして何より『守れる漢』になるってのが目標なんだから。

目標は高く険しいけど、何時か必ず達成してみせよう。
それが出来た時こそ、俺は本当の意味で拳王の名を継ぐ事になるんだから。

「じゃあ、クロノ、フェイト、ユーノ、またな」

「何かあればこちらからも連絡を入れる」

「僕の方も何か判り次第連絡するよ」

「アクセル、母さんの事よろしくね」

「あいあい、そんじゃ」

転送ポートに入り帰ろうとしたその時、本局内にけたたましいアラートが鳴り響く！

すぐさまクロノが通信を送り、状況を確認する。

「どうした！」

『本局内部にアンノウンが出現、数は五体です！』

「映像を回してくれ！」

『はっ！』

そこに映されていたのは、間違いなく『アインストー』。

おいおい、奴ら本局内部にまで入り込んで来たってのか？！

一体どうやって入り込んだんだ。

ここには強力なディストーション・フィールドが張られているってのに！

「クロノ、俺は奴らの迎撃に向かう。近くの新戦闘員を退避させる！」

「わかった！」

「ゲイン、武装形態！」

『了解!』

「私も行くよ、バルディッシュ、セットアップ!」

『Yes sir!』

「ラミアは情報収集を頼む!」

『畏まりました、お任せ下さい!』

相手が五体程度なら、俺とフェイトでカタが着く。
さっさと済ませてやる!

奴らの出現場所に着くと、既にそこは混乱の極みだった。

幾人かの魔導師が迎撃に当たっているが、どうも効果的とは言えない状況のようだ。

やはり、あのフィールドのせいなのか、生半可な攻撃は通じていない様子。

それに奴らの砲撃や触手による攻撃を受け、幾人かが倒れている。

「フェイト、さっさと片付けるぜ!」

「うん!」

「おらあ! 玄武剛弾!!」

「プラズマランサー!」

俺とフェイトの魔法がそれぞれ一体ずつアインストーに直撃。

だが、やはり一度何かに遮蔽されたように攻撃の威力が弱まってしまった。

一応奴らには届き、破損させる事は出来たみたいだがすぐさま再生が始まる。

くそつたれめ、やっぱ射撃魔法じゃ効果は薄いみたいだな……ならば……。

「フエイト、近接攻撃で潰すぞ！」

「任せて！ バルディッシュ！」

『Load Cartridge！』

フエイトのデバイスから薬莢が排出され、デバイスが変形し大型の鎌となる。

変形と同時に俺達二人はアインスト1に突っ込む！

俺は拳の連打、フエイトは大鎌で複数回斬りつける！

再生速度を上回る攻撃を受けた敵はそのまま爆散！

「おっし、この調子で残りも片付ける！」

「うん！ いくよ、バルディッシュ！」

『Yes Sir』

続けてそれぞれ二体を破壊し、最後の一体を破壊しようとしたその時！

後ろの空間が突如として歪み始め、またもやアインスト1が出て来やがった。

出現直後、奴らは俺達に向け一斉砲撃を開始。

威力や精度は昨日と変わりはないが、やっぱりこれだけの数だと

重い！

くそつたれめ、例の転送ポートらしき物体もねえのに奴ら直接空間を越えて来たってのか！

あの歪みをなんとかしないと延々と出て来るぞ。

「ラミア！ あの空間を閉じる方法は！」

『現在解析中です、お待ち下さい！』

「なら……フェイト、ラミアの解析が終わるまで奴らを潰し続ける。へばるんじゃねえぜ！」

「アクセルこそね！」

「へっ！ 上等だぜ！」

奴らからの砲撃や触手による攻撃をかわしながら、俺とフェイトは速攻で潰していく。

だが、潰した端から湧いて出て来るもんだから、面倒臭いったらねえな。

本当にゴキブリみたいな連中だぜ！
いい加減にしろってんだ！

『アクセル様、解析完了しました！』

「どうすればいい」

『^{ソウル}魂を全開にしあの空間に叩き込んで下さい、それであの空間を維持しているエネルギーを相殺出来ます！』

「OK！ ゲイン、^{ソウル}魂全開だ！」

『おう！』

「フェイト、援護を頼む！」

「任せて、プラズマランサー、ファイア！」

『Plasma Lancer』

フェイトの射撃魔法により、一瞬奴らの動きが止まる。

その瞬間を見逃さず、シュトゥルムヴィントで一気に敵中を突破。

ゲインの魂^{ソウル}コントロールシステムにより、体内で急速に練り上げられた魂^{ソウル}を拳に集中！

それら全てを全力で叩きつける！

「うおおー！」

空間の歪みと魂^{ソウル}がぶつかった瞬間、物凄いエネルギーのぶつかり合いが起き、辺り一面が激しく振動。

十秒ほどの間それが続き、突然空間の歪みが消滅。

アインスト１の出現も止まり、後は残敵を掃討するのみ。

一気にいくとするか！

「フェイト、残りを片付けるぜ！」

「うん！」

無限出現がストップすれば後はこっちのものだ。

残敵の数も多くないので、フェイトと二人で割とあっさりと片付けた。

とはいえ、魂^{ソウル}を全開にしたので俺も結構疲れている。
やっぱ魂^{ソウル}の全力使用は堪えるぜ。

「ふう、なんとか片付いたか」

「でも、どうやって本局内部にあんな空間の歪みを発生させたんだろっ」

「こりやかなり事態は切迫しているのかもしれないな」

『しかし、何故奴らはここへ現れたのだ』

「さあな、元々ガジェットは魔力の高い物質を収集する性質があるから、それが原因じゃないのか？」

『それだと昨日の出現の説明がつかんだろう』

「だよなあ、明らかにあの場には魔力の高い物と違って無かったものなあ」

『その辺りの調査も今後の課題となるだろうな』

「ああ、そうだな」

本局内部にまで侵入されたとなると、何処であろうと安全は無いと証明されたようなものだ。

相手側の転送に関する技術は俺達の想像以上だ。

ディストーション・フィールドだけじゃ防げないとなると、何か別の防護策も必要になって来る。

やれやれ、次から次へと問題が噴出して来るなあ。

「とりあえず、俺は急ぎレジアスのおっさんに今回の事を報告して来る」

「うん、本局の方は私とクロノで」

「悪いが頼むわ。ラミア、急いで地上本部に戻るぞ。」

『はい、アクセル様』

何時までもここに残っていると、本局のお偉方が煩いだろうからな。

さっさと退散するでしょう。

しかし、奴らの目的は一体何なんだ。

あの予言通りなら、そもそも地上を狙わずに本局を潰しに掛かる

はずだ。

なのに奴らの出現回数は地上の方が多い。

単純にあの予言通りに行動しているんじゃないのかもしれない。

ちくしようめ、せめて何らかの手掛かりがあればいいのに。

ままならねえもんだぜ、本当によ。

第十一話：出現 - 後編（後書き）

アインスト1：データ

容貌：ガジェットI型の左右と底面部分から、無数の緑色の触手が生えている。

本体中央部に赤い宝玉のようなものがあり、この部分がコアと思われる。

攻撃方法：触手による近接攻撃

砲撃による中～遠距離攻撃（B＋ランクに相当）

特殊能力：フィールド（詳細不明）

自己再生

概要：ガジェットが変質したような存在。

一部でまだガジェットの容貌を残している事から、完全な状態では無いと推測される。

強度や攻撃力は基となったであろうガジェットI型より向上している。

行動原理に不明確な部分があり。

また、本体前面にフィールドラしきものを展開している為、威力の弱い砲撃や射撃魔法は効果的とは言えない。

現時点で確認されている初のアインストである。

見た目はアインストグリートに酷似

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9315v/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ～拳王アクセル～

2011年12月1日15時54分発行